
GOD EATER ~ 銀の戦士 ~

湯飲み茶碗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G O D E A T E R ー 銀の戦士ー

【Nコード】

N 6 6 0 5 U

【作者名】

湯飲み茶碗

【あらすじ】

エルセイダ家、それは荒廃し尽した世界の中でただ一つ、名家として名を知られた家名。
その家から生まれる者は皆、世界に名を知られ、人類の砦を支える柱となっていた。

ある日、そこに生まれた一人の少年は無能とされ家を追放された。

少年が追放されてから数年後、彼は強き力を得て戻ってくる。
その道中に見つけた相棒 アラガミ である少女と共に。

第1話 戦士が生まれた雨（前書き）

その運命は廻り始める

第1話 戦士が生まれた雨

「フュート、逃げて！」

少年を少女が庇うようにして目の前に立つ。

ヤメロ

少女を飲み込もうとする黒き闇。

「逃げて！」

少女は抵抗できずにやみに飲み込まれていった。

ヤメロ

少女は悲鳴を押し殺し少年へと叫ぶ。

「……逃げて」

徐々に小さくなっていく声。

ヤメテクレ

その声が完全に途切れるまでそう時間は掛からなかった。

「フュー……ト……」

弱いというのはこんなにも無力だったのか

神とは人類を蹂躪するようなことでしか存在を示せないのか
少年の右目は何かに切り裂かれる。

痛みはもう感じなかった。

何かを吸い込んでいく。

何かに取り込まれていく。

それが心地良くて

少年は目を閉じた。

雨が少年に容赦なく降り注ぐ中、先ほど闇に飲み込まれたはずの少女と瓜二つの容姿を持つ少女が少年の前に立つ。

「……フュート」

降りしきる雨の中、少年の運命は変わり始めた。

第2話 ある青年とあるアラガミ（前書き）

思いは一つにあらず

この世界に現存する万象の生命

それらの思いは万別である

第2話 ある青年とあるアラガミ

『ねえ、ここにするの?』

「そうだ。新しい……いや、帰ってきたっていうべきかな」

レインは軽く笑う。座っている彼と話しているのは、純白のローブを着た美しい少女。彼と同じ色の長髪がどこか妖艶さを感じさせていた。

レインの右目は眼帯で覆われている。

銀髪に黒目、黒のロングコートという奇抜な服装はどこか注目を集めていた。

しかし気になる点はその視線は一切少女を捉えていない。

否、捉える事が出来ないのだ。

「何ボヤツと独り言言ってるんだよ」

レインの肩を叩くのは、衣服のあらゆるところが明るい色であるオレンジや黄色で統一されていた少年だった。

彼の名前は藤木コウタ。

レインの同期となる新米ゴッドイーターである。

「いや、色々緊張しててな。偉い人と会話する事になったらどうしようかと」

「大丈夫だって！ 絶対にうまく行くよ！」

このコウタという青年はやたらと明るい。
今、崩壊へと向かいつつあるこの世界では、かなり真っ直ぐな性格
をしている人物といえるだろう。

「新人さんですよね？」

声の方向を見るとそこにいたのは少女だった。

黒く長い髪が印象的な控えめそうな少女。

お嬢様、可憐、才色兼備など様々な言葉が似合う。

しかし外見とは裏腹に第1部隊の副隊長を務めているほどの腕前を
持っている。

そんな少女にレインは目を細める。

隣ではコウタが難しい顔をしながら思索していた。

「黒髪？ えっと確か……」

エルセイダ……か。

「ああ、そうだが……」

「私はアイリス・エルセイダと申します。 よろしくお願いしますね」

「エ、エエルセイダ！？ あっあの、俺っ、じゃなかった。 わ、

私は藤木コウタとも、申します！」

「落ち着け、コウタ……。俺の名前はレインだ。 よろしく頼む」

「ふふっ、コウタさんもゆっくりしてください。 ここはみんなの家
なんですから」

レインは内心苦笑した。

本当にこの少女は、何年立っても変わらない。
しかしその不変がレインを安心させていた。

「あつ、そろそろ用事の時間なので失礼します。検査頑張ってくださいね」

アイリスはどこかへと去っていく。

やはり久しぶりに見る家族は、最後に見たときの面影を残していた。既に自分はある頃とは違いすぎているというのに。

『どう？ 貴方の記憶と変わりない？』

先ほどからレインの傍にいた銀髪の少女が微笑を浮かべている。

……ああ、全然変わっていないさ。

「レイン、エルセイダって確かかなりのゴッドイーターを世に送り出しているっていう名家だよな」

「……らしいな。俺の住んでいた地域ではまったく知らなかったが」「ええ！？ エルセイダと言えばこの世界どこでも通用するぞ！？」

コウタの言っている通り、エルセイダ家はこの世界でもかなり有名な家だ。

フェンリルですら頭が上がらないといえばその凄さが分かるだろう。神機開発のほとんどに協力し、食料の新しい生産などこの世界に無くてはならないシステムの大半を作り上げている。

「そろそろ検査らしい。またな」

「あつ、レイン！」

レインはコウタと少女に手を振ると検査の場所へと向かっていった。

ただ広い空間の中、レインは一つの機械の前に立っていた。これはゴッドイーターの素質の有無を確認する検査である。

といっても素質が無ければ死と言う結末しか待っていないが。

ヨハネス・フォン・シッケザールという支部長が何かを喋っていたがレインは一つも聞いていなかった。

はつきり言ってレインは神機と呼ばれる物が無くてもアラガミを倒せる。

現にスサノオやアマテラス、ツクヨミといった接触が禁じられているアラガミと何度も対峙してきた。

失敗しても食い尽くされてやる暇など与えない。

逆に食らい尽くしてやる。

そう思いながら機械に右手を入れる。

機械が作動して彼の右手をプレスした。

痛みはまったく無い。

何かが入ってくるがそれは自分の一部へとなっていくように感じられる。

本当に一部なのだろうか。

あまりにその何かが小さすぎて存在すらはつきりしない。

「……ま、そりゃそうか」

右手の違和感が消えて機械のプレスが上げられる。

手首に赤い腕輪があった。

そして神機を強く握る。

ガラスの向こう側にいる人間が驚愕の表情をしてこちらを見ていた。そして目の前に現れるアラガミ。

ダミーターゲットだ。おおよそ3体。

近頃の試験はゴッドイーターになったとたんに生存訓練でもさせら

れるのだろうか 後に聞いた話では適正と実力が一定以上あった場合即戦力になるかどうか確認するものだったらしい。

レインはため息をついた。

暇つぶしにすらならない。

これからお世話になる神機の実践にはちょうどいいのか。

レインは神機をだらりと下段に構える。

一見すれば彼はスキだらけにも見えるだろう。

ダミーターゲットはレイン目掛けて飛びついてくる。

「……今日の夕飯何だろうな」

そんな事を考えながら神機を振り払う。

ダミーターゲットは両断され消滅していく。

そのまま勢いを増しすれ違いざまに切り裂いて二体とも仕留める。

本当にあっけなかった。

レインの持っている神機は一般のゴットイーターが使っている物より数倍強力になっていた。

理由は簡単だ。

レインはオラクル細胞を作り出せるのだ。それをいくらでも。

それは常識的に考えても不可能な事。

彼はその事を簡単に行っている。

研究者からしてみれば徹底的に調べ上げたい素材だろう。

「さて……もう終わりですか？ 支部長」

「……失礼。君ほどの力の持ち主なら世界の救世主になれるだろう。私たちは心から支援するよ」

レインは軽く笑う。

親友を助けられなかった者が世界などを救えるわけが無いのに。

なあ、どう思う？ ユア

彼の心の闇に気づく人間はまだいない。

「レイン……さんですか……」

アイリスはレインにあった後、自室に戻り壁に背中を預ける。
息がすっかり乱れきっている。

冷静に取り繕うのが精一杯だった。

髪の色や容姿、眼帯などをしていることからまだありえない。
しかしアイリスは動揺していた。

似ているのだ。

自身が目標としていた存在。

初めての憧れと初めての尊敬を捧げた人物、自分の兄『フット・
エルセイダ』に。

だがあの青年はどこからどう見ても兄の面影を残していない。

それでも彼女の本能は、兄が傍にいと囁き続けている。

「……何なんでしょうか。これは……」

アイリスは傍にあった写真にそつと触れた。

兄の姿を残している写真が一枚しか残っていなかった。

彼が消え去ると同時に家に残っていた彼の所有物は全て廃棄された。
廃棄される寸前にアイリスがかかるうじて手に入れた物がこの写真な
のだ。

「教えてください、お兄様……。私はどうしてしまったのでしょうか……」

アイリスの目尻に涙が溜まっている。

しかし彼女は堪えていた。

次に涙を流すのは、兄と再会する時だけと決めたのだから。

その頃、レインと呼ばれている青年がくしゃみをしている事など誰も知らない。

第2話 ある青年とあるアラガミ（後書き）

ちなみにこの小説はまれにご都合主義が発生します。

第3話 実戦開始（前書き）

運命の最中、旅人はようやく休める場所を得た

第3話 実戦開始

『今日から実戦ね。かなり注目されてるわよ。貴方』
「……だろうな」

レインは自室で少女と話していた。

少女の名はシユラ。

一見すると美少女だが実はアラガミだ。

彼女はレインの相棒でもある。

よくよく考えてみればアラガミを倒す役目であるゴッドイーター達の施設にアラガミが住んでいるという何か間抜けな話だ。

しかしシユラはある行動をとらない限りレイン以外決して姿を見ることは出来ない。

つまりレイン以外見つからないというわけだ。

ごく稀に何かしらの反応をする者もいるが見えないため問題は無い。そのため彼女には、フェンリルの情報を集めてもらったりしている。

「ま、コウタはまだ訓練みたいだけだな。先に一足早く戦場に足掛けさせてもらうさ」

ちなみにレインは新米としては即戦力となっていた。

そのため訓練などは一切せずいきなり戦場に立つのだ。

この事はゴッドイーターが始まって以来、異例のことである。

それが引き金となっているのか、あちらこちらからレインの名前が聞こえたりする。

『あら、貴方はすでに戦場のど真ん中にいるじゃない。私からしてみれば主演は貴方一人だけよ』

「おいおい、俺はエキストラだ。主演はアイツらに決まってるだろ」

おもしろそうに微笑を浮かべるシュラ。
もう何年も見慣れている相棒の行動を見てレインは苦笑いした。

「よう、新入り」

飄々とした男の声が聞こえた。

ソファで横になり寝ていたレインは目を開けて声の主を確認する。
階段から降りてきているのは雨宮リンドウとアイリス・エルセイダだった。

ゴッドイーターのほとんどは、普段着＝戦闘服になっている。

レインは自身の服装を見る。

黒のロングコートに、黒のズボンと黒一色である。

ついでに右目の眼帯も黒だ。

余談であるが女性ゴッドイーターの露出度が高いというのは、この世界での常識なのだろうか。

この世界を生み出した張本人がいるならば徹底的に問い詰めてやりたいと思った。

「リンドウさん。名前で呼ぶのが常識です」

「おっと……厳しいツツコミだな」

「ツツコミじゃありません！」

アイリスの姿を見てレインにある光景がフラッシュバックしてくる。

お兄様！ どうしていつもいつも！

悪かったよ……お詫びに料理作ってあげるから……

料理ですか……それなら私はお兄様の……っ！　そ、その程度で釣られませんか！

ならアイリスは飯抜きね？

横暴です！

「レインさん？」

アイリスの声で我へと帰る。

レインは苦笑しそうになる。

目の前にいる妹は自分が知っている妹の面影を残している。それに比べ自分はどうかろうか。

肉親にも気づいてもらえないほど変わりすぎているのだろうか。

黒かった髪は銀髪へと変わり色あせている。

人間は変わる生き物だと誰かが言っていた。

だが変わりすぎるのはもつとだめだろう。

それは誰かを傷つけるのと変わりないのだから。

「いや、懐かしかったただけだ」

「？」

「まあいいか。で、新人「ギロツ」……レイン。今から俺とコイツ、お前の３人で任務に出る。出来る限り自分の力で討伐するんだ。分かったか？」

「……ああ」

「危なくなったらすぐ助けに入るので安心してくださいね」

……変わった方が良い事もあるような気がする。

「そらっ！」

オウガテイルと呼ばれるアラガミを蹴り上げ神機 ロングとブラスト による追撃を与えて銃形態に変形させ散弾タイプの弾丸で吹き飛ばす。

右目は眼帯に覆われているが役に立たないわけではない。

オラクル細胞だけならば十分右目が感知してくれる。

どこの部分が一番弱いのか、どの箇所が一番破壊しやすいのか、何の属性に弱いのか、それらは右目を通して全て伝わってくる。

日々アラガミを熱心に研究している者によってかなり羨ましい物だろう。

飛来してくるオウガテイルの尻尾をレインは体を回転させすれ違うようにして回避する。

とある映画みたいに手を大きく回し体を仰け反らせて避けようとも考えたが、痛い人物と認定されても困るので普通に回避することを選んだ レインにとっては普通だ。

そのままの勢いで神機を振るい、その場にいた3体のオウガテイルをまとめて斬り捨てる。

数十体いたはずのオウガテイルはたった一人のゴッドイーターにより瞬間的に駆逐された。

リンドウとアイリスは驚いた様子でレインを見ていた。

それもそのはず。

新人ならアラガミを見た瞬間に体が硬直するか興奮のあまりいきな

り突撃したりする。

だがレインはそうしなかった。

手短な段差に飛び移り空中からアラガミを強襲　この時点で新人が
とる行動ではない。

そしてそのままラッシュに移り体術を使用、それも弱点の部分、そ
して相手を効率的に浮かせる場所を攻撃しており終始自分のペース
に持ち込み相手を圧倒しそのまま倒した。

しかも別のアラガミを見つけるや否や倒したアラガミを捕食もせず
乗り物として使用し、そのまま突撃。

数体のアラガミを巻き込み一掃し、討ち漏らした残りの数体を先ほ
どのように圧倒した。

何が言いたいのかというとレインの戦闘力は下手すれば極東支部の
中でトップなのだ。

それほど彼は戦いなれている。

新兵が持つ実力ではない。

しかし一番気になるのは実力ではない。

レインの体術がアラガミに通用したという点だ。

現に先ほどの戦闘でレインは数体いたオウガテイルのうち2体ほど
を体術により仕留めている。

「お前、武術でもやってたのか？　はつきり言って新米とは呼べな
いんだが……」

啞え煙草をしながら頭を掻くリンドウ。

その表情は驚きと戸惑いがほどよく混ざっていた。

それでもクールさを感じられるのは本人のカリスマによる物である。

「レインさん、家の方が何かアラガミに関する研究かフェンリルの
戦闘教官でも？」

アイリスは首をかしげる。

彼女の言葉にレインの心の奥で何かが悲鳴を上げた。

針で何かを一突きされたような感じ、心臓の鼓動と共にその痛みがより存在を主張していく。

彼女の言っている事。

それは間違っていない。

彼は捨てられたのだ。

無能と烙印を押された瞬間、彼は安全が保障されていた世界から危険がいたるところをうろつく世界へと放り出された。

その中でたくさんの汚い物を見てきた。

その中でたくさんの生きる術を得た。

その全てが今の彼を作り上げている。

「……いや、実は幼い頃の記憶が無いんだ。自分の家が何をしているのかすら分らない」

「そうですか……失礼な事を聞いてしまって申しわけありませんでした」

「いや、いい。早く帰ろう」

レインの極東支部第1部隊隊員としての初任務は終わりを継げた。ちなみにリンドウは報告書に何と書こうかずっと悩んでいた。

リンドウがアイリスがヘリに乗り込む間、レインは遠くの景色の一点を見ていた。

監視が3名……か。

レインは何かいたずらを思いついた子どものような笑みを浮かべるとヘリに乗り込んだ。

「ふむ……体術でアラガミを……」

「はい、どう考えても普通のゴツドイーターができる事ではありません。それに調べてみましたがあの男の過去は不明です。もしかすると人間とアラガミ、両方に関係している可能性があります」

「なるほど。ところで諸君、コレを見てくれ」

「これは……」

「あのレインという青年、神機との適合率が常に最大だ。それにもかかわらず彼には一切の異常が見られない。私は彼がオラクル細胞を自身で作成する事が出来るからだと思っている」

「馬鹿な、そのような事ありえません。マーナガルム計画はソーマ・シクザールにしか被験者になっていま……待て……ひよっとするとレインがアラガミであるという仮説しかできません。至急、始末するべきかと」

「分かっている。利用するだけさせてもらおう。首輪が付けられない犬ほど恐ろしい者はないからね」

『ふふっ……馬鹿な人達』

数人の男性隊員と白い服を着た男が会話している間、シユラは部屋に備え付けられていた椅子に座りおもしろそうに会話を見ていた。

『でも今はまだ生かしておいてあげる。勝手に殺したらレインになんていわれるか分からないもの』

少女は楽しそうに笑う。

しかしその部屋の中で少女の存在に気がつく者はいない。

第3話 実戦開始（後書き）

自分はまず下書きを書いたストックし、投稿する直前に作品を見直すという手段をとっています。

そのため下書きと投稿したものでは文字数がかなり違ったりする事がありますが……。

投稿した後気づいたんですけどフットでかなり発音しづらいですよね？

なんでこんな名前付けたんだろう……。

第4話 ロシアからの挑戦（前書き）

少年のたびはまだまだ続く
背負う荷物の重さにためらいは無い

第4話 ロシアからの挑戦

「初めまして。アリサ・イリーニチナ・アミエーラです。皆さんご存知の通り新型です。旧型は旧型なりの仕事をしていただければいいと思います」

レインに続き第1部隊に配属された少女、アリサはいきなり唯我独尊という言葉が浮かびそうな台詞を口に出す。

『これはまた面白い人が来たわね、レイン』

「……」

レインは苦笑いしながらアリサを見た。

ツンツンとしか表現が仕様の無い態度である。
もしくは生意気か。

「初めましてアリサさん。私はアイリス・エルセイダと申します。
これからよろしくお願いしますね」

「エルセイダですか。そのような身分の方がこんな辺境地で何をしているんですか？」

またもや爆弾発言である。

ちなみに言っておくがエルセイダ家の者は容姿聡明であるケースが高くアイリスも例外ではない。後二人エルセイダの者がいるがそれらもまた同じだ。

何が言いたいかというと彼らは人気が高いのだ。

アイリスはお嬢様という容姿ながら実践ではベテラン顔負けの指揮と実力を併せ持ち日常生活では誰にでも隔てなく接する広く健気な性格で、数多くのフェンリル職員を虜にしている。

中には、エルセイダという地位と己の欲望に駆られアプローチしてくる者もいるがそこは、お嬢様。

それらは全て捌いていく。

エルセイダ家ではそのような事を教えているのだろうかとレインはふと考える。

それはさておき、要するにアリサの発言は、アイリスのファンを全て敵に回した事と同然である。

「……ある意味大物だな、コイツは」

『でしょ？　これからが楽しみね』

レインの声が聞こえたのかアリサは、アイリスからレインへと視線を移し近づいてキツと睨みつける。

苦笑いしながらレインはアリサの瞳の奥にあるモノを見透かす。

そこに見えるのは絶望と怒り、そして悲しみ。

年相応の少女が背負うにはあまりにも重過ぎるモノばかりだ。

「貴方がレインですね、噂は聞いています」

「噂？」

「訓練いらずの新米ゴッドイーター、レイン。ロシア支部でも有名でした」

「……ロシアまでかよ」

「貴方に挑戦します。私と勝負してください」

その言葉に再び一同が啞然となる。

レインの耳には近くで大爆笑しているシュラの笑い声が大きく響いていた。

……最悪だ。

「で、勝負は何だ？ 雑草むしり対決なら誰にも負けないが」

「ゴッドイーターとしての勝負です！ 大体誰がそんな対決を受けるんですか！」

「いや、たまに外部居住区の奴らと勝負してるんだ。意外と強いぞ、アイツら」

「真面目に答えないでください！」

意外とツツコミタイプな人物である。

シユラが面白いといっていた意味が分かる気がする。

ロビーにいる何人かが笑いを堪えていた。

それに気づいたアリサが顔を少し赤らめ、両手をバタバタと振り回す。

「とつ、とにかく！ 今から訓練所にて私と勝負してもらいます！」

「……はあ、でルールは？」

「単純ですよ。ある程度の訓練で競い合って一番評価が高かった方が勝ちです」

レインは部屋に戻って寝たいと思いながら訓練所に向けて歩き出す。彼の耳には未だに相棒の笑い声が響いていた。

対決するルールは主に三つ。

1つ目は持久力。

2つ目は素早さ。

3つ目は攻撃力。

とごく単純である。

1つ目のルールは、ただひたすら走る。

より長く走り続ける事ができた方が高評価だ。

2つ目はダミーターゲットを相手にしたルール。

5体のダミーターゲットをどれだけ素早く殲滅できるかだ。
3つ目はヴァジュラをモデルにしたダミーターゲットに対してどれだけ素早く全ての結合崩壊を起こす事が出来るか。
以上の3回の対決によって勝敗が決まる。

1試合目は一周200mのトラックが舞台となる。

レインとアリサ、ともに他のゴッドイーター達が驚くほど、周回を重ねていたがアリサがスタミナ切れを起こしレインに軍配が上がった。

現在行われている2試合目は、先ほどの試合に対しほとんどのゴッドイーター達が観戦にきていた。
新型の動きを安全に見れるという事と二人の動きを参考にしてもっと実力を挙げられるかもしれないという理由からだ。

「よっと」

レインは複数を同時に斬り続けるように動き、剣でまとめて斬れないほど密集した時には爆発機能を持っているオラクル弾を撃ち一掃する。

先ほどのアリサの動きも他と比べたら確かにいい動きだった。

彼女のタイムは23秒、5体という数にしてみれば中々上出来だろう。

ちなみにアリサのタイムが表示された時、彼女がレインに対してどや顔をしていた事は余談である。

レインは、ステップし攻撃と回避を同時に行う。

残りは2体。

レインは両足に軽く力を加え瞬発力を爆発的に増加させ残りの2体をまとめて断ち斬る。

「よしっ、ツバキさん、タイムは？」

「18秒だ。これもレインの勝利だな」

「なっ！？」

18秒は普段からしてみれば遅すぎるが神機本来の力しか使っていないのを焦点にしてみればいい方だろう。

3試合で既に2試合レインが勝利している。

つまりアリサの負けは決定したということだ。

「っ、まだです！ このままでは済ませません！」

「……おいおい」

3試合目のためにレインとアリサが入れ違いになる。

今から行われるのはヴァジュラをダミーターゲットにした訓練。

もしシユラが見ていたら彼女はこの場所に居座っていただろう。

そもそもオリジナルとダミーでは味が違うのではないかという意見は愚問である。

幸い、その彼女は笑い疲れレインの部屋でぐっすりと熟睡していた。

「レインさん、お疲れ様でした」

レインの前にタオルが差し出される。

汗など掻いていないが、だからといって受け取らないのは失礼だ。

タオルをくれた人物の顔を確認すると、そこにいたのはやはり彼女だった。

「ん、ああ。ありがとうアイリス」

「アリサさんも凄いですけどレインさんもやっぱり凄いですね。だ

って私でも20秒以上はかかるのに……」

「じゃあ、あの訓練の最高タイムは？」

「レインさんの18秒です。次にシエルお姉さまの21秒ですね」

……あの悪魔^{シエル}か。

思わず背筋が震えた。

シエル・エルセイダは、エルセイダ家のゴッドイーターとしては、有名である。

男勝りな性格であり、その性格にぴったりしている容姿だ。

アイリスと同じ黒髪のスレートだが、表情はまるで違う。

気が強そうな女性という感じであり、その前にはシュンやカレルまでもが素直に従うと言えば想像つくだろうか。

しかし彼女もアイリスに負けず劣らずの人気を持っている。

その理由は、彼女の持つギャップだろう。

日常生活の中、シエルは稀に表情を崩す事がある。

その光景を見た者は少ないが、見た者は必ず彼女の虜になるだろう。極東支部では既に都市伝説と化している。

とそんなくだらないことを考えている間にアリサの方が終わったらしい。

タイムは2分26秒。

ヴァジュラの全ての部位を破壊しつつ動いていた事を考えるとかなりの好タイムである。

レインは、アイリスに軽く手を振って再び訓練所の中へと入る。

まずヴァジュラの破壊可能な部位は前足、頭、尻尾の3つである。前足と頭部は問題ない。

一番厄介な場所が尻尾だ。

タイムを縮める中で尻尾をどれだけ素早く破壊できるか。それが鍵となる。

「……ま、単純が一番だな」

ヴァジュラのダミーターゲットが現れるとレインはすぐに頭部と前足の二つに攻撃を集中させる。

尻尾などには目をもくれず、ただひたすら狂った戦士の如く斬り続ける。

頭部が結合崩壊を起こし、レインはすぐに前足を攻撃、その一撃で前足が壊れるのを確認しすぐに尻尾へと攻撃を集中させる。

ヴァジュラの尻尾へ攻撃するには宙に飛ぶか銃で攻撃しなくてはならない。

それが一般的な考え方だが、レインはヴァジュラの背中に飛び降り地上と同じように攻撃し続ける。

観衆が呆気に捕らわれている中、とうとう尻尾が結合崩壊を起こす。レインは背中から地上へとジャンプし、タイムを確認するためにツバキに視線を向ける。

「レイン、1分23秒！」

「……遅くなつたな」

そんな事を言っているがヴァジュラの訓練では5分が一般的なタイムである。

その訓練で1分台をたたき出すこと。

それがどれだけ凄いことなのかレインにとっては、まだ分からなかった。

もちろん、試合はすべてレインの勝利である。

アリサは、レインに視線を合わせようとするがすぐに視線を逸らし、再び視線を合わせようとする……という行為を繰り返していた。

「久々の訓練だったな。アリサも中々いいタイムだったぞ」

「……」

「どうした？」

「……ます」

「は？」

「仲間としてなら認めてあげます、って言ったんです。二度目は言いません」

たしか世界がアラガミによる荒廃を迎える前の単語で、こういうのをツンデレというのだったかとレインは思い出す。

その頃の知識は中々面白かった。

「……分かった、よろしくな。アリサ」

「っ……」

レインが差し出した手をアリサは、どこか恥ずかしそうにしながら握手する。

この日から、紅き女戦士が極東支部へと参入した。

ちなみにこの日から訓練所の使用率が上昇したことは完全な後日談である。

第4話 ロシアからの挑戦（後書き）

レインの意外な知識とアリサのフラグを地味にたてておきました。

次回は優雅なあの人が登場する予定……？

第5話 現実の片鱗（前書き）

旅人の家族は、思いのかなたにある人影を見つめる
その人物はまだまだ旅の途中だという事をまだ誰も知らない

第5話 現実の片鱗

「共同任務……」

極東支部のオペレーター、竹田ヒバリの言葉に言われた言葉をレインは復唱していた。

今回の任務は、水道施設にてオウガテイルとコクーンメイデンの討伐。

同行者は、エリックとソーマの二人だ。

二人の事はまだ名前程度しか知らない。

ヒバリに言われるがまま任務を受けてしまった。

こういう時、決断力の無い自分を恨みそうになる。

自室にてイメージトレーニングをしているとシユラが話しかけてきた。

『レイン、ソーマという人物は死神とも呼ばれているそうよ。彼がどんな任務を受けても必ず生還してくる事から付けられたみたい。

その異名で忌み嫌われているわ』

「馬鹿だな」

『ええ、馬鹿ね』

二人が馬鹿と呼んでいるのは、ソーマを死神と例えていることに対してである。

ゴッドイーターがいくら一般人より強く、アラガミに対抗できると言っても無敵というわけではない。

ゴッドイーターも元を辿れば一つの命だ。つまり死ぬこともある。

現にゴッドイーターの死亡率も近年上昇している。

いくら強力なゴッドイーターでも、人間であるという高く分厚い壁をぶち抜かない限り常に死の可能性は付きまとう。

その死を人の仕業とするのは、己のエゴでしかない。
それにソーマが死神と言われるなら俺は^{レイン}どうなのだろうか。

『後、ソーマはアラガミの形質を持っている……ごく微量だけど。

それでも一般的なゴッドイーターからしてみればかなり特殊よ。何よりあの子、時々私の気配を感じ取る事があるわ』

「シユラに？ ……だが完全に気づけていないとすると半分半分か」

『それからエリックって子だけれど……言いようが無いわね。何ていうか……周りからしてみれば「あ、コイツ死ぬな」っていう行動や言動を数多く残しているわね』

「……変わり者が多いな。この支部は」

レインはアイテムをまとめ、シユラに神機の簡単なメンテナンスをしてもらう。

何でもシユラには神機の声が聞こえるらしい。レインが聞き取るにはまだ時間が掛かるらしいが……。

ちなみに神機にはシユラの姿が見えるようである。

「……俺の神機は俺の正体に気づいているのか？」

「ええ、それもバッチリ。でも他の神機に言いふらしたりしていないわ」

「安心していいのかダメなのか……」

ため息をつくレインを励ますように神機が軽く震えた。

「やとと……」

ミッションである場所にたどり着きレインは二人の姿を探す。
青のフードを被り鋸のような巨大な刃を持った神機を持つ青年ソー
マと派手な髪型と服で銃形態の神機を持っている青年エリックだ。

「…………あれほど分かりやすい特徴はないよな」

ぼつりと呟き合流しようと歩き出すとエリックが走りよってくる。

それに対しソーマはレインに見向きもしない。

やけに対照的な二人である。

漫才のコンビとしては、かなり通用しそうな気がするのはいすぎ
だろう・

「お、君が例の新人クンかい？ 噂は聞いているよ。僕はエリック。
エリック・デアⅡフォーゲルヴァイデ。君もせいぜい僕を見習って、
人類のために華麗に戦ってくれたまえよ」

レインは少々呆れていた。

もしここにシュラがいたら大爆笑しているのではないか。

……耳元で彼女の笑い声が聞こえるのは間違いなく幻聴だと信じた
い。

そのような考えの中、眼帯に隠されている右目が反応した。

即座にソーマが呼びかけるがエリックは啞然とした声を上げるだけ
で動こうとはしない。

人間、予想外の事が起きると啞然とするものだ。

「エリック！ 上だ！」

「うっ、うわああっ！」

「伏せろ」

エリックを背後から襲おうとしたオウガテイルを文字通り両断する。
同時に周囲にアラガミの反応が現れた。

「人類のために華麗に戦ってくれるんだろう？」

そういつてエリックに手を差し出す。

レインはどこかこの青年を気に入っていた。

シユラから聞いていた情報では妹がいるらしい。

そういうことを聞いてレインはどこか自身とエリックを重ね合わせていた。

「ふっ、当たり前さ！ 僕の華麗なるエリックシュートをその目に
焼き付けたまえ！」

「……元気なやつらだ」

ソーマがボソツと呟くのが聞こえた。

その表情はどこか笑っている。

案外いいコンビなのかもしれないと思いながらレインは神機を構え
なおした。

この日の空は意外と晴れていた。

『このアラガミも中々美味しそうね……。あつ、これも捨てがたい
……』

レインが任務中の最中、シユラは部屋にあるターミナルでアラガミ
のデータを見ていた。

目がウキウキしているのは見間違いだろう。

『でもやっぱりスサノオね。あれが一番美味しかったし……』

突然ドアが開いて人物が入ってくる。

一瞬レインかと思い急いでターミナルのスイッチを切る。

「あれ……なんでレインさんの部屋に……」

入ってきた人物は意外にもアイリスであった。

きよとんとしている様子から無意識に入ってきたのだろう。

『アイリス・エルセイダ……ね。レインも結構可愛らしい妹持つてるじゃない』

気がつけばシュラはそんな言葉を口にしていた。

レインがいたなら目を丸くするだろう。

彼女が人を高評価するのは稀である。

「……レインさん、貴方は……何者なんですか？」

彼女がポツリと呟く。

シュラ
アイリス

少女と少女の間には、壁が出来ていた。

アイリス

少女には、決して破る事も乗り越える事も出来ない壁。

そんなことを思いながらシュラは少女に微笑む。

決して伝わるはずの無い言葉を口に出しながら。

『レイン、本当の名はフート・エルセイダ。エルセイダ家の人間……つまり貴方がずっと探していた兄よ』

今すぐ彼女と話せる状態で真実を伝えたい衝動に駆られる。しかしそれをこの場で行う事はレインを裏切る事になる。

アイリスは背中を向けてレインの部屋を出ようとしていた。

『アイリス・エルセイダ。兄の背中を追うのはやめなさい。……私や彼のように、あの日の出来事を体験してほしくない。貴方は貴方の人生を生きて』

その言葉と共にアイリスが部屋を出てドアが閉まり再びシュラは一人になる。

静寂が部屋の雰囲気を変えていた。

『……私もレインの性格が写ったみたいね。ホント、あんなことを言うガラではないのに……』

そんなことを言いながらシュラは再びターミナルを起動させた。

第5話 現実の片鱗（後書き）

アレ……短い……。

第6話 家族（前書き）

自身への思いは虚像

そうだと決め付けているのが自分だけだと悟るのは、まだ遠い

第6話 家族

極東支部職員食堂

レインは早朝に起きて食堂で朝食を食べていた。

ちなみに配給食品であるジャイアントとうもろこしはレインにとっては新鮮な味だ。

彼に食事という物は基本的に必要ないがやはり人間として味を楽しむという贅沢をしたいと思います。

ちなみに彼にとって捕食＝食事でもあり相手が強いアラガミである場合味の品質はかなり上がりヤル気が湧いてくる。

食べて一番うまかったのはスサノオだ。

あれは中々刺激的で香ばしかった。

「レインさん、お隣よろしいでしょうか？」

回想に入り浸っているレインに突然かかる声。

その相手はアイリスだった。

黒い髪が清楚なイメージをかもし出しいかにもお嬢様という感じをイメージさせていた。

女性ゴッドイーターの中では露出がかなり少ない。

アーミーと呼ばれている服を着ており軍人らしさがにじみ出ている。やはり育ちがいいのだろう。

……何故か露出して無いのに色っぽさがあるのは、追求してはいけないだろう。

ちなみにレインが着ている服はスナイパーノワールという物でありレイン自身かなり気に入っている。

開発班は色々と凄い猛者が集まっているのかもしれない。

「ああ、それにしても朝早いな」

「ゴッドイーターになってからはそうですから。たまに任務が連続で続く多忙の日々もあるので……でも人々を救うためですし文句は言えません」

人々を救うためか。

アイリスの肩越しに見えるテレビでは民衆がフェンリルに対して配給の品質を上げるようにデモを起こしているというニュースが流れていた。

それを見てもなお彼女は人々のために尽くそうというのだろうか。アラガミを神として信仰し、フェンリルに対抗しようという愚者もいるというのに。

「ところでレインさん、聞きたい事があるのですがいいでしょうか」
「どうした？」

アイリスの表情が引き締まる。
何かを覚悟しているかの様子だ。
反対に何かをためらっているようにも見える。

「フュート・エルセイダという人物に出会ったことはありませんか？」

「……悪い、知らないな」

フュート・エルセイダ、それはレインの本名である。
だが彼はその名前を捨てた。

その名前を語ることすら許されなかった。
そしてレインの知っているフュート・エルセイダはもうこの世にはいない。

「エルセイダ……コウタが言っていたが、もしかして他にも家族が？」

「はい、私のほかに二人、姉さまのシエル・エルセイダと弟のロイド・エルセイダが極東支部にいます」

「という事は……フュート・エルセイダっていうのは……」

「私のお兄様です」

そんな人物を兄として認めてくれている妹が目の前にいてレインはかつての自分に戻りたくなかった。

しかしもう無理だろう。

あの頃の自分と現在の自分の姿はあまりにもかけ離れすぎている。エルセイダ家の象徴でもある艶のある黒髪は色が薄れた銀髪、かつて優しそうな少年の顔はぶつきらばうな顔になっておりあの頃の面影は一切残していない。それも力を使えば自分はフュート・エルセイダに戻るのだが。

人々を救うという事すら自分は出来ているのだろうか。

本名を隠して行動していた時代、数々の二つ名を付けられたがレインには、何一つ実感できなかった。

アイリスに、絶望は与えたくなかった。

できる事なら彼女自身が思っている理想のフュートのまま生きていて欲しい。

そのようなどこか絶望であり、どこか幸せであるような願いをレインは祈る。

「そうか……見つかるといいな」

「はい、ありがとうございます」

遠くからアイリスを呼ぶ二つの声が聞こえる。

一人は女性、どう見てもシエルである。

ネクタルスーツを着ており胸がはだけている。

アイリスの姉だけあり、プロポーシオンも中々でアラガミが生まれる以前なら間違いなく姉妹アイドルとして活躍しているだろう。そつえば彼女と直接会話するのは初めてだ。

そしてもう一人は男性、確かロイドと言っただろうか。

F制式上衣を着ていて、真面目さが伺える。

活発的そうな人物だ。

「私の記録を破った新人りだな。私はシエル・エルセイダ。よろしく頼む」

「俺はロイド・エルセイダ。一番下の弟だけどよろしくな」

見間違えるはずは無かった。

目の前にいるのは自分の記憶に残っている面影を残している家族である。

支部内でも時折見かけたりはしたが会話をしたことは余り無い。

レインはある程度彼らと談笑すると部屋へと戻る。

何故か嫉妬を交えた視線を感じたが気のせいだろう。

レインは部屋に駆け込むとドアを閉めて乱れきっている呼吸を整える。

シュラもレインの変わり振りに、さすがに慌てて駆け寄る。

「レイン？　もしかして家族にあってきたの？」

「まあ、そんなところだ……こんなに動揺するなんて俺もまだまだだな」

「さすがポーカーフェイスを身につけているだけあるわね」

「一時期、賭け事だけで生活していた俺を甘く見るなよ？」

シユラと会話しレインはメールを確認する。

極東支部隊員たちからのメールが入っている。

第1部隊隊員は、雨宮リンドウ、アイリス・エルセイダ、橋サクヤ、藤木コウタ、ソーマ・シツクザール、アリサ・イリーニチナ・アミエーラ、レイン、エリック・デア「フォーゲルヴァイデ」

第2部隊隊員たちは、大森タツミ、ロイド・エルセイダ、台場カノン・ブレンダン・バーデル

第3部隊隊員たちは、カレル・シュナイダー、ジーナ・ディキンソン、小川シユン

独立行動隊員、シエル・エルセイダ

以上が極東支部で代表的なゴッドイーターとして配属されている。

<アイリス【件名】気をつけてください>

レイン、近頃不審な行動をとっていないでしょうか？

時折レインさんといると何やらたくさんの人に見られるのですが……。

何かの合図かも知れません。気をつけてください>

『……見せ付けてるわね』

「そんな自覚は無いけどな……。第1部隊の人数がかなり多い……。それにしても独立行動隊員が」

レインはそう呟いてターミナルのスイッチを切った。

『独立行動隊員というのは、数多く生きているゴッドイーターの中でも少数の者にしか与えられない所属。その支部での独立行動を全て認め、全ての部隊に所属している者……とか書いてあったわね』
「要するに何でも屋って事か。大変だな、シエルも」

レインはそんなシエルの姿を想像すると軽く笑みを浮かべてベッドに寝転がる。

ゆっくりと寝ていた彼が召集に来たアリサにたたき起こされるのは、それから数秒後の話であった。

第6話 家族（後書き）

気がつけばPVが1000突破していました。
ありがとうございます！

……短編集でも作ってみようかな……。

第7話 少女 アラガミ の声（前書き）

心は思うために存在する

第7話 少女 アラガミ の声

「よつと」

声と共にレインが一撃を繰り出し離脱、タイミングよくソーマが斬り込む。

グポロ・グポロの砲塔が折れる。

その隙にアリサが神機を銃形態に変えて弾丸を撃ち込む。

コウタもそれに続いた。

グポロ・グポロはレインを優先的に狙うが中々攻撃が当たらない。当たってもあつさりと装甲でガードされてしまう。

ヒレを斬りつけると同時に結合崩壊を起こしヒレが消えていく。

そのまま背後に回りこみさらに切り上げて追い討ちを決めてから距離をとる。

ソーマが入れ違いに一閃させた。

それが決め手となりグポロ・グポロは断末魔を上げて倒れた。

「よつし……皆お疲れ」

右目から敵対している反応を持つアラガミは無く、直感でも今はいない。

レインは神機を肩に乗せて同僚を見る。

「これくらい当然です」

「何が来ようとぶつたぎるだけだ……」

「もう怖い物無しだな！」

三者三様のリアクションを見て笑みを浮かべながらレインはグポロ・

グポロの死骸を見る。

傍にはシユラがいて黙々とその死骸を食べていた。

レインは周りに悟られないように気配を殺してシユラの近くによる。

「うまいのか？」

『ええ、このグポロ・グポロは中々質がいいわ。かなり美味ね』

「……素材は残しておけよ」

『……分かってる』

そういつて捕食の態勢に入る。

神機から現れる巨大な顎が、獲物を待ち構えるかのようにその体を震わせている。

「いいのが出ますように……っ」と

神機に捕食させコアの点滅を確認する。

しかし、点滅は無い。つまり出てきたのは普通の素材。

多少落ち込みながらシユラをチラリと見る。

シユラはそっぽを向いて口笛を吹いていた。

……空気が漏れる音しか出ていないが。

「……帰還するか」

ちなみにレインは経験を積みとのことで今、4日で6回とアナグラの連続出撃回数を更新し続けている。

本来のゴッドイーターは緊急任務などがない限り出撃は3日に1度ほど。

レインの予測では自分の力量と判断力を見極めるためだろう。

帰投のヘリに乗り込み、アナグラへと帰還する。

シユラを自室に帰らせよるす屋に行き彼女のご飯と娯楽用品を購入

して自室へと戻った。
ちなみに帰る途中、タツミに恋愛の事で愚痴をこぼされたのは余談だ。

『あ、お帰りレイン』

「ただいま。あー、疲れた」

『後半棒読みね……ねえ、レイン気づいている？』

「もちろんだ。ここ数日、俺に監視がついている。……気配を消す事に関しては素人だがな」

『多分本部からの特殊部隊よ、アレ。じっくり確認させてもらったけどどれも凄腕のゴッドイーター達だったわ。……あなたにとっては雑魚のクラスだけ』

「本部からか。妙な探り入れられてるな……。ま、当然といえば当然のことか」

レインはベッドに寝転がると天井に手をかざした。
神機の感触を手が完全に覚えている。

それにしても捕食の時の感覚はとても独特だ。
何か言葉では言い表せない感動を感じる。

『あのアリサって子、アラガミに相当なトラウマがあったみたいね。
あの子、やけに復讐に囚われてるわ』

「ああ、両親を目の前で殺されたらしい。それがゴッドイーターとなつてから成長に強力な糧となつたんだろう」

『……人って珍しいわね』

「そういうもんだ。さて、もう一度よろず屋でも行ってくるか」

『じゃあ何かお土産お願いね。今度は高いヤツ』

シュラが「しめた！」と言わんばかりに笑みを浮かべてくる。

いつもならここで苦笑いくらいしか出来なかった。
しかし今回は強力な反撃材料がある。

「さっき食ったばかりだからダメだ。さりげなくレア素材も食っていきやがって……」

『あ、アレは事故よ！ その……あまりに美味しかったから……』

ちなみにレア素材は完全な嘘だ。

そんな簡単な嘘を見抜けないほど彼女は珍しく慌てていた。
拳句の果てには目尻に涙が溜まりつつある。

これはまずいと思い、レインは即急に手を打つ。

「……単独ミッションが受注できたら同行していいぞ。現地で単独行動を許可する」

『やたっ！ バイキング バイキング』

先ほどまでの行動が別人であるかのような変わり具合にレインは苦笑しながら部屋を出ていく。

シュラが頭の中でどのようなアラガミを食べようかと思っていると突然部屋のドアが開いた。

入ってきたのは4人の男。

全員フェンリル特殊部隊の隊員たちである。

あの時、支部長室の部屋で見た顔ばかりだ。

「ターゲットが帰ってくる前に急いでDNAが残ってそんな物を探取しろ。時間は30秒、初め」

リーダーらしき男の声で散開しレインの部屋のあちこちを探りまわる。

シュラは何か心の奥に強い怒りを感じた。

ユルサナイ

『へえ、私がいるのに彼の部屋を漁るなんてずいぶんな勝手じゃない』

コロシテヤル

『残念ね、せっかく忠告してあげても貴方たちに私の声は聞こえないもの』

銀色の長髪の少女が手を掲げると少女の背後に複数、闇の塊が出現する。

「た、隊長！ 強いアラガミ反応です！」

「ば、馬鹿な。どこにいる！ 急げ！ 撤退……」

『死になさい』

闇の塊は大蛇となり男たちを飲み込み食べ尽くしていく。

哀れな獲物は悲鳴すら上げる事が出来ず自身の骨や肉が砕かれ、すり潰されていく音を聞きながら命を削り取られていく。

『クスクス、貴方たちみたいな下衆にフュートは渡さないわよ』

少女は闇を消すと静かに笑う。

闇があつた場所に血痕などの残骸は無く、既に部屋のどこをみても男たちがいたという痕跡は何一つ見つからない。

通信機能も意味は無い。

全てシュラが破壊したからだ。

全てを食らい奪い、そうして彼女の知識の一部となる。

『ユア、あなたが私の体じゃなく、あなた自身の体で生きていく
れたらフュートや私はどれだけ嬉しいと思う?』

少女のどこか切なく、どこか悲しい響きの声は部屋の虚空に飲み込
まれていく。

「……何、アナグラにアラガミ反応?」

「はい、すでに何名かがやられており未だに姿はつかめていません」

「そうか……。まだ焦らなくていい。まだ計画を公表するには早
すぎる」

「はっ
」

第7話 少女 アラガミ の声（後書き）

開発裏話 その1

原案では、シユラはオメガという名前で狼タイプのアラガミでした。力を出していない時は子犬ほどですが全力ではヴァジュラクラスの大きさを誇るという設定でしたが……何かダメだったのでボツとしました。

その後、人間にしたらおもしろいじゃないかと思い、何を間違えたのか暴走を開始。そして現在皆様が御覧なさっている設定となりました・

……今思つとどうして考えたんだろう。

第8話 力の断片（前書き）

旅人が得た力は、人にはあらざるモノ
その裏が見えるのはいつの日か

第8話 力の断片

「どうしてこうなったんだか……」

レインは神機を構えて目の前にいるアラガミ達を見る。

接触が禁じられているという禁忌種の代表例であるスサノオ2体に無数の雑魚アラガミ それでも数は多い というベテランのゴッドイーターでも真つ青の光景だ。

増援は呼んでいないがこの規模の反応をフェンリルが無視するわけが無い。

ちなみにシユラは「じゅるるる」という擬音が聞こえてきそうな目でアラガミ達を見ていた。

レインは内心呆れていたが、実はそんな彼の口からつつすら何か垂れていたりする。

彼は神機をその場に突き刺す。

普通に見れば自殺行為にしか見えないが長年、彼の相棒であったシユラには非常に分かりやすいサインだった。

力を解放する。

言葉にすればただそれだけである。

『珍しいわね。それを使うなんて』

「増援が来たらアウトだ。さつさと終わらせたいからな。それに…

…しばらく何も喰べてないんだよ」

『ふふっ、了解』

レインが右目の眼帯を外す。

眼帯の下に隠されていた右目が露わになる。

右目の真ん中を断ち切るかのような傷跡があった。

眼球に斬られた後はもう無いがその色は黄色。

人は生来にして様々な瞳を持つ。

しかしその目の輝きは人間が有している物ではない。

その目はただアラガミ達を解析し、あらゆる行動を読み取っている。もはや、本来の役割を果たしていない。

彼は傷に触れた後、軽く笑い左手で右手首を掴んだ。腕輪は彼の場合取り外しができるためポケットに入れている。

その手から光が溢れ、彼を中心に爆発的な力が生まれる。

溢れた力が大気を震わせ、強力な風圧を巻き起こす。

その風に押されアラガミ達の輪が広がっていく。

そして青年の髪は銀色から黒へと染まって行き、右手には銀色の大剣が握られていた。

大剣から感じる圧力にアラガミ達は再び大きく後退する。

「行くよ。シュラ」

『ええ、分かっているわ。フュート』

青年が走り出し近くにいたアラガミ達を斬り潰すのと闇で構成された無数の大蛇がアラガミ達を飲み込むのは、ほぼ同時だった。

「急がなきゃ……！」

アイリスは神機保管庫から神機を持ち急いで出撃の車に乗り込んでいた。

目的はレインの救出。

彼が受注していたミッションに無数のアラガミが乱入したという。しかも乱入してきたアラガミの内2体は、ゴッドイーターの天敵ともいえるスサノオである。

極東支部では緊急命令が出され、撃退班と救出班に分かれて現地に

向かっていた。

何故、これほどまで支部一つを動かす命令が下されているのか。理由は単純だ。

アラガミが乱入してから数秒後、さらに強大なアラガミの反応が検出された。

そのアラガミの詳細は不明であり、反応の大きさからかなりの強敵である事も分かる。

反応はかつて贖罪の街で確認されていた謎のアラガミとほぼ一致した。

しかし今回はそれに加えてさらに大きな力の反応が確認された。

もし、その力を持つアラガミが極東支部を攻めてきたら……。

結果はどがつく素人でも分かる。

あのベテランのリンドウまでもが軽口を一切叩かず、その表情を真剣へと切り替えていた。

もし、そのアラガミがこちらへ向かっているなら総動員して討伐もしくは撃退せねばならない。

アイリスは何故か怖かった。

レインという仲間が消えていくのが。

彼自身が目の前から消えていくのがかつての自分の兄とどこか重なっている。

「これは少しやりすぎたかな？」

青年は大剣をコートの下に吊るす。

そして眼帯を掛けて自身の力をコントロールし、黒だった髪を銀色へと変えていく。

まるで別人だった顔が再びレインという名の仮面を被り、仮面は本物へと姿を変えていく。

レインは、地面に刺していた神機を引き抜き肩にかつぐ。

シユラは食べ放題バイキングの真っ最中である。

やはりいい素材は出なかったがそれなりに喰べる事が出来たのでよしとする。

ちなみに捕食するのはシユラが喰べる前だったので素材が出てからちらりと彼女を見ると軽くガッツポーズをとっていたのを印象的だった。

戦いの激戦の後だがはつきり言おう。

かなり酷い事になっていた。

あちらこちらが斬撃により破壊され、一部にはクレーターまで出来ていた。

レインやシユラの服装に汚れが無いのはさすがというべきか。

やっぱ、急に食事すると眠くなるか……。

「少し寝るぞ、シユラ」

『ええ、レインお休みなさい』

シユラが一時的に食事を中断し、レインに駆け寄る。

眠りへと引きずり込まれていく意識の中、彼は彼女に表情に懐かしさを覚え、声を搾り出すにして放つ。

「ああ、お休み、ユア」

かつて人間だった少女の声を聞きながらレインはゆっくりと眠気に身を任せていく。

その眠気がまるでいとおしく感じられ、彼はゆっくりと眠っていた。

『……フュート、私は幸せよ。アラガミになってしまった私をその

名前で呼んでくれる貴方がいるから、私は私^{ユア}でいられる」

少女は闇を放ち、食べ残しを一気に食らい尽くす。
そういてレインの隣に座り、彼の肩に頭を寄せて、彼女も眠りへと
ついた。

「何？」

現地へと降り立ち、部隊に動きを説明しているシエルは、突然連絡
をしてきた無線機にそう尋ねていた。ちなみに彼女は全部隊に指示
を出している立場である。

無理もないだろう。

無線機からの情報によると先ほどまで、信じられないほど多く存在
していたアラガミ反応が瞬時に消えう。

例の力を持つ2体のアラガミもゆっくりと反応を消していったら
いい。

「……分かった。搜索に専念する。貴方はこの事を博士に報告して
くれ。それでは」

シエルは無線機を切り隊員たちに向き直る。
それぞれの表情は疑問に溢れていた。

「任務内容の変更だ。アラガミの撃退からレインの搜索に切り替わ
った」

「アラガミはどうなった？」

「それが全て消えたらしい。詳しい事は分からないがアラガミの交
戦はまず0と言ってもいいだろう」

「……不自然だな」

「今はレインの救出が先だ。幸い彼のビーコンはまだ確認されている」

シエルの号令と共にゴッドイーター達は街へと駆け出す。彼らにとって奇妙だったのは、エリア中を見てもアラガミ一つ見当たらないということであった。

体を大きく揺すられ何事かうつすらと目を開けると涙目になりながらこちらを見ているアイリスの姿が見えた。

「…………頼むから寝かせてくれ」

そんなことを言うとアイリスはこちらを凝視したまま、抱き締めてくる。

何をそんなに心配掛けたのだろうか。
眠気というものが全て吹き飛んでいった。

「どうした、アイリス。何かあったのか？」

「良かった…………生きていてくれてよかった…………」

ちらりと視界の隅にシュラが見えた。
なにやら己とレインを指差した後呆れたポーズをとっている。

……………そういう事が。

おそらくレインとシュラが力を解放した時、その反応をフェンリル

がキャッチ、こういう事態を引き起こしてしまっている。
頭の中で必死に言い訳を考えながらレインはアイリスの言葉に答えていた。

「つと、命令は守ってくれたな。新入り」

リンドウが神機を肩に担いで近くへと歩いてくる。

煙草などを加えているがその表情はほっとしていた。

レインにとってはアイリスの攻撃に戸惑^{ことば}っていたため、助け舟である。

「……まあ、無事だよ」

「それさえ聞ければ理由はいらん。ま、お前はこれからが大変だろうけどな」

リンドウの言葉の意味を理解しレインは顔をしかめる。

間違いなくツバキに色々と尋問され神博士にはデータを取られ、ゴッドイーターとしても出撃数も間違いなく増える。

要するに自由時間が少なくなるのだ。

さらに表情を曇らせるレインの事を考えシュラは微笑を浮かべた。

もちろん極東支部に帰ってきてからは質問攻めである。

どのようにして撃退したのか、現れたアラガミは何者だったのか、と多種多様な質問をされリツカからは神機の点検、教官から説教、博士からはアラガミ講座とデータ採取からの逃走、支部長からは小言と言う名の呼び出し。

とにかく本当に疲れた。

レインは部屋に帰るとベッドに倒れこむ。

『お疲れのようね』

「……嬉しそうだな」

『ふふっ、ご馳走様』

「それは何よりだ……」

『世間話はここまで。レイン、次からは大事な話よ』

シユラの言葉を聞くや否やレインは表情を引き締める。

『レイン、貴方は気づいているかもしれないけど、近頃本部やヨハネス直属の隊員が貴方の部屋を漁りに来てるわ。要約すると貴方を利用しようとしてる。ミッション中も気をつけて』
「なるほどね。通りで呑気に突っ立っているわけだ」

今回の任務中に途中から視線を感じなくなった。

アレは別のアラガミに捕食されたか見切りをつけて帰投したと推測した方がいいだろう。

明日はいつもにもまして厄介な一日となる。

『以上よ。これからも頑張ってね』

……ひよつとすると今日から厄介だったのかもしれない。

レインはため息をつくとしユラに必殺と名づけた宣告をする。

「シユラ、これからお前の食事の回数減らすからな」

それを聞くや否や座っていたソファから、がばつと立ち上がり何か言おうとしている。

だが湧き出てくる言葉多すぎて口から出てこないのだろう。

『こ、この鬼！ 悪魔！ 鬼畜！ 馬鹿！ 変態！ 変人！ 奇人！ シスコン！』

「……一部変なのが混じってるぞ」

シユラの意外と真面目な表情にレインは額を押さえながら頭を振る。

次の日、レインがよろず屋で耳栓を大量に購入している姿が目撃された。

第8話 カの断片（後書き）

今回はレインとシュラの持つ、力と過去について軽く触れてみました。

短編が思い浮かばない、どうしよう……。

第9話 手がかり（前書き）

一つ重荷が増えた

その圧力が自身を殺していく

第9話 手がかり

おい、聞いたか？

ああ、リンドウさんが死んだだろう？

あのアリサとかいう新型がやつたらしいぜ

次の隊長はやっぱりエルセイダ家の人間だよな

結局エルセイダの御曹司にはかなわないんだろうよ

第1部隊隊長雨宮リンドウが消息不明となった次の日。

レインはひそひそと聞こえる話を次々と聞き流している。

今、極東支部の雰囲気は暗い。

それは、彼らにとつて大きな支えであつた雨宮リンドウが生死不明になつたからだ。

アリサは意識不明という結果で、独立行動隊員だつたシエル・エルセイダが第1部隊隊長に代わつた。

事件がおきてから数日は立っているが、隊員たちの士気も低い。

特にサクヤの状態が安定していなかった。

無理もないだろう。最愛の人が行方不明になつたのだ。

死亡なら、まだ割り切れることは出来る。

しかし不明となると、そうはいかない。

まず生きているか死んでいるか分からない。

そんな正反対の願望をうまくコントロールしなければならない。

むしろそんな器用な真似を簡単にする事が出来る人間などいるわけが無い。

ぼんやりとそんな事を考えながら自室のソファに座りコーヒーを飲む。

「リンドウは生死不明、アリサは意識不明……アリサはアイツらに任せるとしてリンドウはどうするか……」

『あら、冷静ね。考えるのは性に合わないんじゃないかなかったの?』

『今回ばかりはそうも言ってられないさ。それに一度体験してるしな』

『……そうね。それじゃあ私はアナグラ内を見て回るわ。神機との会話も楽しかったし』

『情報は無かったのか? 不自然な噂とか』

『今のところは何も無いわ。けど以前からリンドウの神機が疑問を話していたみたいよ』

『疑問? ……今のところは待つしかないか。ところでどうすれば俺も神機と話す事が出来る?』

『それは分からないわ……。でも話してる所を周りから見たらボソボソ言っているだけの不審者よ?』

『……いつもの事だ』

嘆息を吐きつつ、レインはターミナルを起動させアラガミの情報を見る。

一部のアラガミに「この部位を食べずには死ねない!」や「グルメスポットにこの場所はオススメ!」などのマークがしてあるのは間違いないシユラの仕業であろう。

言っておくが彼女はかなりのグルメである。

さらに付け加えるとアラガミだ。

しかし彼女の中で一番美味しかった物はレインの手料理という事実。別にレインが倒したアラガミというわけではない。

人が育てた素材を使った料理という意味での手料理である。

何故アラガミなのに人が作った料理を要求するのか。

これはレインにとって永遠に尽きる事の無い謎だ。

「マークが増えてるぞ。お前、このごろ食べすぎだと思うが……」

『私はその程度じゃ満足しないわよ? あなたの手料理でも振舞ってもらったら考えるけど』

「……はあ。とりあえずこの騒動が落ち着いたらな」

レインは大きくため息をついた。

食材の確保などははつきり言って面倒くさい。

ましてやアラガミが蔓延るこの世界に安定した食糧供給など存在しない。

いくらアナグラがアークロージーとは言えどもたかが一人の手料理のために食料を出してくれるとは思えない。

『どうする？ 探知者の所にも行くの？』

「いや、俺も一応腹減ってるからな。ま、グルメツアーだ」

レインは部屋を出てエントランスへと向かった。

やはりエントランスはどんよりとした空気だった。

「……見つからねえ」

レインは雪が積もった寺を疾走し襲ってくるコンゴウを切り裂きながら食材を探していた。

人の手が余り入り込んでいないこの場所なら天然の食材があるはず。そう考えていた。

ただ現実は甘くない。

見ればあるのは雪・アラガミの骸・雪・廃材・雪・アラガミの骸の連続である。

大きなため息をつきたくなった。

「どうするか……ん？」

右目に微弱な反応があった。

アラガミと……半アラガミのような反応がある。

「君子危うきに近寄らず……ちょっと違うか」

その存在をすぐに察する。

いつかシュラが言っていた特異点という存在だろう。

「さて、食材食材っ」と

レインは神機を肩に担ぐと再びエリア全体を歩き始めた。

結果を報告しておこう。

目的の物は何一つ見つからなかった。

第9話 手がかり（後書き）

み、短い……。

話のストックがなくなってきました……。
更新頻度が悪くなるかもしれません……。

第10話 守るという力（前書き）

少年は一人の少女に自身を重ねる
自分のような存在になつて欲しくない
ただ、それだけを胸に

第10話 守るという力

「あ、あのレインさん……」

アリスが復帰してから数日後、レインは珍しくアリスから声を掛けられた。

よほどリンドウ失踪の件を思っているのだろう。その表情は暗い。主治医である大車ダイゴも姿を消しているため、彼女は今一人ぼっちである。

アイリスやシエル、コウタやロイドなど数々の同僚が励ましているが効果は見られない。

鬱になっている人にしてはいけない事が励まし、などと言われているが、その事がよく分かる。

「どうかしたか？ 用事があるなら付き合っが……」

「そ、その……た、戦い方を教えてください」

一瞬、何を言っているのだろうと思ったがすぐに理解する事ができた。

今まではあの大車に暗示を掛けられたからこそそこまで戦えた。しかし今の彼女は暗示から抜け出した、いわば素の状態だ。

暗示状態で出来た戦い方を体が覚えていて実戦で出来るとは限らない。

要するに今の彼女は新米と何ら変わらない。

「付き合っぞ。でどの任務に行くんだ？」

「まずはシユウからお願いします」

「分かった。少し用事があるから待っていてくれ」

レインはアリスに先に行くように促しアイテムの整理に取り掛かる。おそらく彼女は邪魔にならないように動きつつ戦闘を見守るという行動に徹するだろう。

教えるという点も重要である。ゴッドイーターから外れた行動はまず出来ない。

つまり、ゴッドイーターとしての力しか使うなということだ。

そんなことを思いながら必要なアイテムを揃えていく。

『見てたわよ、レイン。カワイイ子とデートっていい身分じゃない』
「……妬いてるのか？」

『ふふっ、当たり前じゃない。ついでに言つと貴方がアリスと話してるのを見ると少し妬ましく思うわね』

「言っておくが俺はそっち系に走らないからな？」

『あら、残念』

女性って難しい………と思いつながらレインはてきぱきとアイテムをポーチに詰めていった。

その頃、アリスがくしゃみをしていることなど彼は知らない。

任務の場所である嘆きの平原と呼ばれるエリアに向かっているヘリの中、レインは窓の風景を見ていた。

傍にはアリスが何か不安そうな表情を隠せていない。

「ところでアリス、どうして俺に持ちかけたんだ？ 新型ならアリスやシエルもいるし……」

「そ、その……お二人は忙しいですし、以前訓練所でレインさんの動きを見たとき、初めて凄いつて思ったので……」

そういえば昔のデータに「ツンデレはデレの時が可愛い！ 異論は決して認めん！」とか書いてあった気がするが今がその時なのだろうか。

反論意見としては「馬鹿野郎！ ツンからデレにかわりつつある時、突然ツンに戻る。その瞬間、俺のボルテージはマックスだ！ 要するにツンとデレの中間が一番いいんだよ！」などと書かれていた。さすがのレインもここから先を知ってしまったては戻れないような気がするので踏みとどまらざるを得なかった。

それにしても彼らは哲学者か賢者か、それに匹敵する何かなのだろうか？

そんな事をふと思った。

「分かった。なら俺も頑張るとするか」

「一つ聞いてもいいでしょうか？」

「ん、何だ？」

「レインさんはどうしてゴッドイーターになったんですか？」

フュート、逃げて！

彼女の言葉が引き金となり、過去の幻聴が聞こえる。

俺が人である時を捨てた時の事が。

俺が生まれた日の事が。

愚か、弱者、雑魚、無能、無力、敗者、屑、塵……。

彼は、頭の中をひたすら回る自虐というルーレットを無理やり停止させる。

「俺には、家族がいたんだ。珍しく裕福な家で姉や妹もいて、俺は世界がこんなことになっているなんて知る事すらなかった」
「幸せだったんですね……」

「ああ、とても幸せだった。……でもある時、俺は家を追放された」
「えっ」

アリサの表情が驚愕に染まる。

思い返せば自分の過去を人に話すなんて何年ぶりだろうか。

ほとんどは記憶が無いで済ませてきたが、何故だか今は話せることを話そうと思っていた。

「俺が無能だったからだ。姉や妹はどんどん凄い成績を収めていくのに対して、俺はほとんど残せなかった。だから追放されたんだろう。家からしてみれば恥さらしって訳さ」

「そんな……！」

「ただがむしやりに生き抜いた。生きて生きて生き抜いて、疲れ果てて倒れた時、俺に手を差し伸べてくれた少女がいた」

「……」

「彼女は世捨て人だった俺によく世話を焼いてくれた。生活するのは大変だったがそれでも彼女と一緒に入るから幸せだった。ただ現実には幸せなんて関係ない」

アリサはもう何も言わなかった。

レインの話をただ聞いている。

そんな彼女を見て、レインは再び口を開いた。

「雨が降っていた夜、俺と彼女は一匹のアラガミに襲われた。そして彼女は死んでいく中、俺は右目に傷を負って意識を失った。そうして目を覚ますと彼女の姿は無かった。その日から俺は純粋に力を求めた。誰かを守る力を。彼女が俺を守ったように、俺も誰かを守るという事を……。話が長くなったな」

アリサは声を押し殺して泣いていた。

あの頃からは想像もつかない。

確かにその時のほうが強かっただろう。

的確な動きで敵を翻弄し、強烈な一撃で敵を倒す。

それでもレインには今の彼女の方がより人間的でより魅力的に見えた。

「レインさん、その人の名前聞いてもいいですか……？」

「……ユアだ」

「……覚えておきます」

アリサは手に力を込める。

今度こそ、自分の力で誰かを守れるようになる。

自分の目の前にいる戦士のように。

その戦士を守った彼女のように。

今度こそ、自分の力で大切な人を守り抜きたいから。

「アリサは何でゴッドイーターを？」

「私は……両親の仇をとるためでした」

「……そうか、このご時世だから……」

「私の住んでいた地区にアラガミの警報が出されて、その時私はかくれんぼをしていたんです。それでパパとママが来てくれて自分を見つけてくれるのが嬉しかったから」

彼女は何かを押さえつけるようにして話す。

まるで水の中にいて呼吸が出来ていないようだ。

現に彼女は今、悲しみという名前の海に溺れているのだろう。

それを他人である自分が救い出すことは出来ない。

「でもその日、二人はとも必死でした。アラガミの危険が迫っている中、私を探しに危険な場所まで来てくれた。私はクローゼット

からパパとママを見てて、アラガミが来て、それから……！」
「分かった。それ以上話すな」

彼女の言葉が乱れつつある。

まだ暗示から完全に回復してない。

それでもここまで話せたことにレインは感服するしかなかった。

「無茶を言つてすまなかった。俺もまだ配慮が足りなかったな」

「……いえ、レインさんに比べたら私なんて……」

「アリサ」

レインは彼女の瞳を覗き込み、見つめる。

今の彼女の瞳は一言で言うところと純粹だった。

ただ一人の少女としては自然な目だ。

「人と自分の過去を比べるな。今を比べるんだ。過去を比べても何も変わらない。だが今を比べれば未来が変わる。だからその今を大事にしる」

「……はい！」

やはりこの少女は強い。

レインは笑みを浮かべると窓の風景に目を向ける。

いつもと変わらない風景。

だけど今は、その光景がとても新しく見えた。

第10話 守るという力（後書き）

ストックが全然増えない……。

そして現在下書き中の話の筋を見て思った事が一つ。

何故こうなった。

第11話 予感（前書き）

少女は目指すべき背中をただ見つめる

第11話 予感

「はっ！」

シユウを斬った後再び返す手で斬り距離をとる。

目の前をエネルギー弾が飛んでいった。

もし回避が遅れていたならその弾に当たって怪我していただろう。

怪我で済む事自体がある意味凄いが。

「近すぎたな……もう少し……」

続けてシユウが撃ちだすエネルギー弾を全て回避し強烈な一撃を叩き込んだ。

怯んだ隙について神機を突き出しシユウの翼を削る。

そのまま刃が上を向くように斬り上げた。

翼が結合崩壊を起こし消えていく。

「まだだっ！」

もう一度神機を素早く返し脇腹をなぎ払うように斬り裂いた。

体ごと回転させてもう一度同じ態勢で先ほどとは正反対の脇腹をなぎ払った。

そのまま連撃に繋げていく。

そうしてシユウの頭部を神機が削り取った瞬間、シユウは聞き取れない断末魔をあげて倒れていった。

「目標達成だな。アリサ、大体分かったか？」

「はい、何とか動きはつかめてきましたが……レインさん、回避が上手いですね。まるでアラガミの行動が読めてるようでしたよ？」

まあ、読めるからな。

そんな心の声を呟く。

今回は純粹にゴッドイーターとしての力を使つての戦いだったので結構新鮮だった。

ちなみにアリサに依頼されてから4回目の出撃である。

コウタに茶化されたりもしたが

バガラーリの映像データ、全部消去するぞ？

の一言で何とか落ち着いた。

脅迫ではない、断じて脅迫ではない。

「あの……本当にありがとうございました。これで私も何とか戦えると思います」

「ああ、俺もいい経験になった。その力でアイリスを支えてやってくれ」

訓練所で最終チェックを終え、アリサが並みのゴッドイーター以上に戦えることを確認した後、二人はエントランスでくつろいでいた。レインにとっては随分と久しぶりの休みである。

これまで築き上げてきた連続出撃記録は未来永劫、破られることは無いだろう。

「これ、私からのお礼です。使っていただけますか？」

彼女から手渡されたのは神機の装甲『ティアストーン』が内蔵され

たデータだ。

アラガミから得た素材を神機に使おうと思っても、それらは全てシユラの食料となっていくため、神機の強化が中々出来なかった。さらに装甲はほとんど言っていないほど強化していないため、このティーストーンはかなりの即戦力になる。

「……大事に使わせてもらう。ありがとな、アリサ」

「いえ、お礼を言うのは私の方ですから」

彼女の表情に迷いは無い。

一人前のゴツドイーターの顔だ。

レインはそれを見ると満足気にエレベーターに乗り自室へと戻っていった。

「……もしかしてレインさんは……」

レインが去った後、アリサは一人で考え込んでいた。先ほどのレインの発言がどうしても気になるのだ。

アイリスを支えてやってくれ。

どうも何かが引つかかる。

端から見れば隊長を支えてやれという意味だろう。

だがアリサはどうしてもそのように受け取れなかった。

「あの人は……」

まさか、アイリスの兄だったりするのだろうか。

アリサはそのような事を考えていた。

その答えが確信をついているなど、彼女は知るはずも無い。

「久しぶりの休みだ……。アリサに感謝だな」

『あら、お帰り。あの人からメール来てるわよ』

「……ああ、探知者のおっさんからか」

ターミナルに届いているメール一覧を確認する。

随分メールがたまっているがほとんど返信していない。

これで仕事までサボっていたらすばらしきニートだ。

メール一覧の中に初めて見るアドレスを発見しメールを開く。

<探知者【件名】報告

よっ、旦那。ゴツドイーターになった生活はどうだ？

俺も懐かしいもんだ。

それで雨宮リンドウの用件だ。

ビーコン自体の反応が各所を大きく移動していることからアラガミに食われた可能性が高い。

それが一般的な考え方だ。

目標がそちらでアラガミと交戦してから数時間後、鎮魂の廃寺に微弱なアラガミ反応が検出された。

それもかなり小さい。おそらくフェンリルが見つけれないくらいの規模だ。

これらの情報をどうするかは、旦那たちに任せる。

後、これは極東支部からハッキングして掴んだ情報なんだが、ヨハネス・フォン・シックザールが目標の暗殺を計画していたようだ。目に止まらないように気をつけるよ。

んじゃあ達者でな。

注意 このメールは開いてから30秒で消されるぞ>

読み終わった瞬間にメールが消失する。

アドレスや履歴からも完全に消されていた。
さすがとしか言いようが無い。

「……………本当に優秀だな、アイツら」

『そうね。今度来た時には何かおごってもらおうかしら……………』
「お前はいつまで経っても変わらないよ」

そんなどうでもいい事を考えながらレインはベッドに寝転がった。

雨宮リンドウは間違いなく生きている。

そんな事を思いながらレインは眠気に身をゆだねた。

第11話 予感（後書き）

どうして短いんだッ！

……と自身を呪っている作者です。

気がつけばユニークが1000突破！

PVが5000突破！

本当にありがとうございます！

第12話 姉として（前書き）

旅人の家族は、彼の身を案じ続ける

第12話 姉として

「……これを持って雨宮リンドウ搜索任務を打ち切る。次から各自通常任務に戻れ。以上」

雨宮ツバキの言葉にロビーが騒然とする。

そんな中平然と表情を崩さないのはレインただ一人である。一同が騒然とする中、サクヤが抗議の声をあげる。

「で、でもまだ安否は確認されていません!」

「そうですよ! まだ打ち切るには早すぎます!」

サクヤの声に賛同の意見が上がる。

そんな中でもツバキは表情を崩さずに淡々とリンドウの搜索が打ち切られたことを繰り返していた。

シエルは、ツバキの表情に動揺が隠されていることを見抜く。だが言葉に出さない。

今この時も、彼女はきつと自分自身と戦っているはずだから。

ブリーフィングが終了しそれぞれが呆然としていた。

レインはターミナルに手を伸ばし雨宮リンドウの項目を確認する。そこには「行方不明」の文字が嫌でも目に付いた。

「……アラガミに襲われたからって死ぬとは限らないんだがな」

レインは呟く。

逃げて！

頭の中にあの時の光景が蘇ってくる。

フュート！

振り続ける雨。

逃げてえ！

切り裂かれた右目。

……。

あふれ出す自身の血。

……フュート。

そして目の前にいる死んだはずの恋人。

軽く頭痛が起きて、眉間を揉む。

「レインさん？ 大丈夫ですか？」

「……ん、ああ、大丈夫だ」

レインはターミナルの電源を切って何とか落ち着き始めたゴッドイーター達を見た。

さすがに動揺はしていないがこれからどうするかを迷っているようだった。

「お姉様、これからどうしますか？」

「まったく、リンドウといいフュートといい何も言わず突然去っていく……」

「……そうですね」

「アイリス、とにかくだ。ツバキは通常任務に戻れといった。それ以上のことについては言及していない。ならばとる手段は一つだ」

シエルの気が強そうな目が一層強まる。

睨みつければアラガミでも動けなくなるのではないかと思うほど鋭かった。

「皆聞いてくれ。リンドウの搜索は独自で行う。任務を素早く終わらせ残った時間でリンドウを探すんだ。それ以外の手立てが私には見つからない」

やはりエルセイダ家の人間だけありシエルの統率力は目を見張る何かがある。

現にこの場にいる全員がシエルの言葉に耳を傾けていた。

彼女の一言が見事アナグラ内の雰囲気をもとめている。

各部隊の隊長全員が彼女の言葉に合意した。

『さすがとしか言えないわね。ホント……貴方の姉とは思えない』

「……悪かったな」

『ふふっ、それじゃあ私は部屋に戻っておくわ』

気がつけば全員やるべき事へと戻っていた。

レインも何をしようかと考える。

恐らくこれからは単独任務が増えていくだろう。
ノンミッション

面倒な依頼は出来るだけ自分だけで片付けて他の隊員が少しでもリ

ンドウのいそうな場所、そして簡単な任務を受けれるようにしてはならない。

「……ま、頑張るしかないか」

気がつけばそんな事を呟いていた。

シエルは部屋に戻るとソファに座りうなだれる。
近頃、何か懐かしいような何かを感じる。
その何かが分からないせいか余計に苛立つのだ。

「ったく……どうかしたのか、私は……」

コーヒーをカップに注ぎ一気に飲み干す。
隊長となつてからやる事が急に増えだした。
報告書のまとめや隊員たちのケア これはアイリスに丸投げしている
その他やるべき事もかなり多い。
一言で言ってしまうえば面倒である。

「そつえばフュートはやたらと可愛がられていたな……」

ふと弟のことを思い出し笑みを浮かべる。

もし自分が進言していたら、もし自分が面倒を見ていてやれば、もし自分が……。

そのような「もし」が次々と出てくる。

追放された彼は今どこにいるのだろうか。

とても大人しく子どものように笑っていて、とても優しく誰でも怪我をすればすぐに治すという、誰もが憧れるような性格の持ち主だった。

ゴッドイーターとしての素質はあった。
リーダーとなれる素質も十分にあった。
しかし彼はそれを拒否する。

僕には守るための物があればいい。力なんて傷つけるような物は
いない。

その言葉故に彼は捨てられた。
無能と烙印を押されて、追放された。
彼が追放されたという報告に誰もが啞然とした。

何故……。

そのような言葉しか出てこなかった。
彼を慕っていたほとんどの者が嘆き悲しんだ。
その後、フートの戸籍は消され代わりに一番下となる弟ロイド・
エルセイダが生まれた。
フートがあの後、どこに行ったのかは知らない。
屋敷の者が保護しようしたときには、彼自身どこかへ消えていた。

「……守るための物か」

シエルは大きく息をついた。
どこへ向かえばいいのだろうか。
ゴッドイーターとなってから多くの人を救ってきた。
しかし多くの戦友を失った。
利用されたこともある。
それでも誇り高きゴッドイーターとしての魂を失わなかったのは、
フートという存在が支えてくれていた事に他ならない。

「すまない、フュート……私はお前に恩を返すことすら出来ない……」

もし彼が生きていたのならば抱き締めてやりたい。

たくさん撫でてやって、たくさん話してやって、たくさんとしてやりたい事をする。

だがもうかなわぬ願いだ。

ふと天井を見上げる彼女の頬には、涙の痕が残っていた。

その頃、一人のゴツドイーターが背筋を震わせていたことなど誰も知らない。

第12話 姉として（後書き）

シエルさんにスポットを当ててみた回です。

よく考えてみればロイドに出番がほとんどない……。

そして下書きですが……本当にどうしてこうなった……。

終着見えぬ歩み（前書き）

ただ歩く

終着見えぬ歩み

一つの世界に、一人の少年が歩いていた。

ただ地平線が見えるがそこには、風景と少年以外誰もいない。

言葉にするなら殺風景としか言いようが無いだろう。

地面や空、見える全てが銀色に染まっている。

夜は一度も訪れず、無論朝など来ない。

いや来ているのに気づけていないかも知れない。

だがそのような物は、この地に意味を成さない。

少年は歩き続けている。

荷物が一步踏み出すたびに徐々に徐々に重くなっていく。

体が疲れを訴え、休め休めと本能に命じている。

しかし少年は歩き続けた。

あの日、あの雨が降った夜から少年はずっと歩き続けている。

もうどれほど歩いただろうか。

それでも終わりはまだ見えない。

いや、そもそも終わりはあるのか。

ここで終わりだ。

もうお前が歩き続ける必要は無い。

すでに名前は捨てたはずだ。ならば何故歩く。

どこからか誘惑のような、説教のような、酷く懐かしい何かが語りかけてくるが、少年は何も反応しない。

後ろに戻っても得る物など何も無い。ならば前に進むしかない。

一つ踏み出すたびに、一つ歩むたびに、自分の心が消耗されていく。

終わりの無い無限地獄だ。

だが少年は何も言わず、歩みすら緩めずひたすら歩き続ける。

「君が今している事はただの夢物語の一説に過ぎない。その一説をどんなに上手に書き上げても、どれだけ時間を掛けたとしても、それをただ歴史の中にあつた一つの遺物でしかない。それでも君は歩くのか」

ただひたすら歩く。

「……別に諦めろといっている訳じゃない。馬鹿にしている訳でもない。言いたい事は一つ。何故書き続ける。大切な人を目の前で一

度殺された事、家から追放された事、そして今も増え続けるアラガミから人々を守り抜くこと。どれも変える事の出来ない物ばかりだ。それらは罪として君に残り続ける。例えば目と耳を塞いでいても必ず君の枷となる」

荷物がさらに重くなっていく。

だがここで止めるわけには行かない。

休憩するわけにも行かない。

ただ歩かなければならない。

「しかも今の君は不死身に等しい。例え一説を書き終えたとしても、その膨大な物語を一つ一つ読んで理解する時間なんて普通の人には与えられていないし残されてすらいらない。君を寸分違わず理解してくれる人なんて決して在り得ない。つまり未来永劫、君は誰からも理解されない。それでも、書き続けるつもりかい」

別にいい。

自分は理解される必要なんて無い。

ともに生きようと決めた者が傍にいてくれるのだから、もう何もいらない。

「……ならば賭けをしよう。簡単な賭けだ。勝ち負けなんて無い。ただの満足感しか得られない愚かで無垢な賭け。内容は簡単。君が終着点^{ゴール}まで歩き続けること、それだけだ」

少年はただ歩く。

「だけど逃げちゃいけない、投げ出していけない。それは何よりの地獄だ。雀の涙だけで全ての砂漠を潤わせるような気の長くなる時間歩き続ける。たとえその時間が来たとしても、終着点があるかどうかはまた別の問題だ。普通の人間なら絶望し歩みをやめてしまう」

その瞳に迷いは無く、苦悩すら見当たら無い。

「だけど君は違つだろ。なら歩くんだ。絶望と希望はいつも隣り合わせだからね」

少年は何も言わずに歩き続ける。

その歩みに終着点は存在するのだろうか。

それはまだ誰にも分からない。

今の彼にはただ歩くことしか出来ない。

終着見えぬ歩み（後書き）

今回は本編とはあまり関係ありませんでした。

ただ、ある人物が今まで生きていて得てきた事、覚悟の強さ、そしてその人物を支えてくれる者。

それらがこの話からご理解していただければ幸いです。

第13話 少女（前書き）

白き死神はただ微笑む

第13話 少女

『
』

シユラがのんびりと鼻歌を歌いながら街を歩いていた。
正確には廃墟とした街だが……。

この場所をゴッドイーター達は贖罪の街と呼んでいる。
近くには協会があり、そこは例の事件の現場でもある。
ちなみにレインから特別許可をもらったので実体化しており、おそらくフェンリルが反応を捉えているだろう。

別にシユラにとってそのようなことはどうでも良かった。
自身にとって嬉しかったのはレインが特別に単独行動を許してくれたこと。

さすがにアナグラ内部に長時間いては身も心も疲れる。
声が聞こえたので上を見るとコンゴウがシユラを睨んでいた。
そして体を高速回転させながら突進してくる。

対してシユラは、握れば折れてしまいそうな細い右腕を真横に振る。

『生憎だけとお遊びに付き合ってる暇はないの』

突然発生した闇が一つの帯のようになり、シユラは振った通りに動いて獲物に襲い掛かった。

コンゴウが闇に飲み込まれ不愉快な音を立てて消える。

今の行動で間違いなくフェンリルには、反応を捉えられたはずだ。
しかし彼女はそれを気にしていない。

相棒である青年は慌てているかもしれないが。

『……まずっ。やっぱり禁忌種の方が美味なのかしらね？』

顔をしかめながら教会の中に入っていく。

そこに協会という名の面影はない。

幾年も行われた破壊という名の侵食により廃墟もしくは残骸といった方が良かった。

『誰かいるわね。出てきなさい』

シユラが声を放つと協会から何かが降りてくる。

純白という言葉が似合う少女だが着ているものに血がこびりついている。

それでも似合って見えるのは年相応の姿からだろうか。

シユラと同じようだがどこが違う。

彼女が銀色の長髪であるのに対し、少女は純白の短髪だ。

どこか妹という印象を受ける。

「オネエちゃん……ダレ？」

『……この子が特異点ね。初めまして、私はシユラって言うのよ』

「シユラ？」

『そう、貴方の名前は？』

「ナマエ？ ソレウマイノカ？」

『……そう、一人ぼっちだったのね。貴方の名前は……』

突然ある花の名前が出てくる。

自分がまだ人間であった頃、少年と一緒に見た花の名前。

今考えれば、あの花言葉を持つ花ほど、今の自分たちに合っている言葉は無いだろう。

この花、シオンっていう花だよ。

へえ、そう……。不思議な花ね。

うん、この花言葉は「遠方にある人を思う」「思い出」「君を忘

れない」「追憶」って意味があるんだ。

素敵な言葉……。ってフュート？

はい、ユア。君に上げるよ。

えっ、でも……。

ほら、いいから。

顔を真つ赤にしながら花を渡してきた少年の顔を思い出し微笑む。
一体全体どこをどうしたらあの可愛げな顔から今の顔へと変わるの
だろう。

正直なところ、10000ピースのパズルを完成させることより難
しい気がする。

『貴方の名前はシオよ。本当はシオンだけどそれじゃあ言いづらい
でしょ？』

「シオ……シオ……シオ……コレ、ナマエツテイウノ力？」

『ええ、そう。貴方はシオよ』

「エヘヘヘ、シオ！」

そのままはしゃぎまわるシオをシュラは優しい目で見つめていた。

「うわっ！」

レインは滑空してくるシュウを転がりながら避ける。

それに続くようにコンゴウの転がり、グポロ・グポロの砲弾が襲い
掛かってきた。

ガードしていたら間違いなく怪我している　よくよく考えてみれば
怪我ですむ方がある意味凄いが……。

ちなみにレインはシュウ、コンゴウ、グポロ・グポロの3体と同時

戦闘である。

同行者は一人もいない。

背後を向いたシユウにダッシュして神機で頭部ごと体を両断し撃破。銃形態へと切り替えてグポロ・グポロの砲塔に当てて結合崩壊を生させる。

すぐにグポロ・グポロとの距離を詰めて剣による一撃を当ててシユウと同じように撃破。

「……少し素が出たぞ……」

レインの呟きに反応し再びコンゴウが転がりながら突撃してくる。ため息をつき、神機を持ちながら跳躍し、空中で満月を描くように切り裂く。

「動きが単調なんだよっ！」

コンゴウは蓄積したダメージのせいか転倒し地べたに倒れている。気がつけば討伐していたらしい。

「よし、後は捕食して……」

突然仕留めたはずのアラガミが溶けていく。破壊されたオラクルが融解を始めたのだ。

「……嘘だろ」

そんなことを言わずにはいられなかった。

レインは、未だにアナグラの連続出撃回数ランキングを更新し続けている。

疲労も溜まるに溜まった方だ。

捕食して食べれば少しは解消するのだが……。

「スサノオが恋しい……」

青年の悲鳴は、静かに夜の月へと吸い込まれていく。
しんと降り続けた雪だけが彼の姿を見ていた。

「ただいまっ……ん？」

極東支部へと帰還してきたレインは任務を受ける窓口で人だかりが出来ているのを見た。

別に人だかりはおかしい事ではないが同僚まで集まっているというコッテイターのは何か不自然である。

「レインさん、これを！」

レインを見たアイリスが彼の手を引つ張って窓口へと連れて行き何やらデータを解析したような物を見せる。

それはアラガミの反応であった。

今彼の心で、俗に言う『やっちまった』感が仕上がっていた。

「先ほど、贖罪の街にてレインさんが遭遇した事のあるアラガミと同じ規模の反応を持つアラガミが出現したんです。急いで偵察班が確認に向かったところ、現場には何一つ無かったみたいです……。
遭遇した事のあるレインさんなら何か分かると思うんですが……」

……シユラ、お前しばらく飯抜きな。

そんなことを心の中で呟いた。

間違いなくこの反応はシユラだ。

確かに外出は許可したが力まで使っていないとは言っていない。

今はレインの部屋にいるはずだ。

「そうだな……。あの時は生き残ることに必死でよく覚えていなかった」

「……申し訳ありません。まだ情報が必要ですね。この力を持つアラガミはかなり危険です。どこにいるのかさえ分かれば対策を取れるのですが……」

大体、俺の部屋に居ます。ご飯に気をつければ普段は大丈夫です。その代わり神機の強化が出来ません。

「それに普段からどのような行動をとっているのかも不明ですし……」

ゴロゴロしてるかターミナルでアラガミの情報とか見てます。頼むから使い終わったらターミナルのスイッチ切ってください。

「力の大きさから言えばウロヴォロスを遥かに凌駕していて比べ物になりません。それほどの力を持つからかなり巨大……。そういう点では生活場所は限定されるはずですよ」

普通にアナグラで生活してます。今、ソファでくつろいでいる奴がそうです。

『あら、大変な事になっているみたいね。レイン』

お前のせいだ。

「皆さんも何か異変を感じたら知らせてください。ひょっとしたら任務中に現れるかもしれませんから各自細心の注意を払って行動しましょう。こういう間にも意外と近くにいるかもしれません」

俺のすぐ傍に居ます。

レインの心の声は誰にも聞こえるはずが無かった……。

次の日から世界中で活動しているフェンリル支部に以下の通達が行きわたる。

謎のアラガミ反応に警戒せよ。遭遇した場合は直ちに逃避行動に移り交戦だけは回避する事。なお、姿を目撃した者は、その時の姿を上層部に伝える事

なお、これは最重要命令とする。

第13話 少女（後書き）

この話を書いてて思ったこと。

ごめんよ、ソーマ。

第14話 父

「面倒臭い事になった……」

自室でベッドにうなだれるレイン。

その表情は何かを悟っているようにも見える。

まるで死んだ魚のようだ。

すでに心は瀕死だが。

『まさか最重要命令まで来るなんて予想外ねー』

コイツ、確信犯だ。

シユラの目はとても楽しそうであり、先ほどの台詞は綺麗な棒読みであった。もはやここまで来ると清々しいとしか言えないのではあるうか。

その清々しさを恨めしく思いながらもレインは顔を上げる。

「とにかく、シユラ。実体化は本当にやめてくれ。結果が分かかって時間が長い任務ほど面倒な事は無い」

『ふふつ、ならあの子をここに招待する？』

あの子とはシオの事である。

前回の一件でレインは彼女から説明を受けていたのだ。

任務の時、討伐したアラガミを彼女に上げたりもしている。

神出鬼没なのは、問題だが。

シユラは「お姉ちゃん」と呼ばれ、レインは「お兄ちゃん」と呼んでいた。

アイリスがその場にいてレインの正体を知っているのならば火に油を注ぐ結果でしかないのは明らかだろう。

「それが一番面倒だな。適度なタイミングでシオを博士たちに反応させて命令を終了させるのが手っ取り早いが……何か責任押し付けてるようで後味悪いしな」

『ええ、最低よ？』

元凶はお前だろうが。

そんな言葉を無理やり飲み込む。

最近、ため息ばかりと思っていたが胃の傷みも感じてきた。

何故こんなに苦勞しなくてはいけないのか。

そんなことばかり考えている彼に悪戯心いづしやうが出来上がるのも無理はなかった。

「……シオには悪いが当分会えそうに無いな。とりあえずシユラは3日間飯抜きな」

『ちょ、ちよつと！』

珍しくシユラがうるたえた。

レインは口の両端を微かに吊り上げる。

「俺は力を使うなって忠告したぞ？ それに何がどうあれ世の中は自己責任だ」

『うつ……』

シユラは視線を右から左へ流す。

こういう所も彼女らしい。

本当に変わっていないのだと少し安心する。

『わ、私が悪かったわ……。だからご飯抜きだけは……』

レインは内心笑いそうなのを必死に堪えていた。
しかし彼女はそれに気づかずためらいがちに目を伏せていた。

「分かった、分かった。だったら今回の件は無し。ちゃんとご飯は上げるさ」

『ほ、本当？』

「ああ、俺が飯抜きにした事あるか？」

その言葉にシユラが安堵の表情を浮かべる。

彼女とは裏腹にレインは顔をしかめていた。

これにより必殺（しはんめき）が使えなくなってしまうのだ。

すぐに別の対策を練らねばならない。

レインはため息をつくとエントランスへと向かった。

ちなみにベッドの上にレインの物と思われる抜け毛が数本落ちていた事は秘密である。

「ん？」

レインはエントランスに來ると何か違和感に気がついた。

何かこう、言葉では言い表せないがいつもと違う場所に居るといふ錯覚を感じる。

「あ、レインさんメール読みました？」

にこやかに微笑みながらアイリスはレインに話しかけてくる。

一般の男ならここらで限界だろうが彼にとって彼女は妹であるため、

理性がそれを押さえつけていた。

彼女の質問に対してだがレインが部屋にいる場合、必ずといっていいほどシユラが使用しているため、それはもう死語となっている言葉『オタク』も真っ青になるくらいの時間だ。レインはほとんどタ―ミナルを使用できない。

「いや、ほとんど見ていな「ニコッ」……はい、見てます」

事情を知る者から見れば妹に怯えている兄という構図に見えなくも無い。

今なら実戦で彼女に睨まれた時、急いで言葉を訂正したリンドウの気持ちがよく分かる。

「今日は、お父様のロレント・エルセイダが極東支部の視察に来るんです。それで皆頑張ってるんですよ。それに働きが認められればエルセイダ家専属になる事だって出来ます」

要するに出世する大チャンスという事だろう。

最近、やたらとカレルの出撃数が高かった原因がよく分かった。

「……納得だ、それは」

「はい、だからレインさんも頑張ってくださいね？」

「……努力する」

せわしなく動きながらも決して仕事のペースを緩めない研究員たちを横目で見ながらレインは大きく息をつく。

まるで蟻の日常みたいだ。

ある意味似た様なものだろう

突然周りが騒然と動きを止めた。

その視線は一点に集中している。

「……ロレント・エルセイダ」

レインは自然と呟いていた。

アイリスやシエル、ロイドと同じ黒い髪は健在だが目つきは肉食獣である。

一人一人を見定めるように視線を這わせていた。

レインの記憶から遡ってみても外見がほとんど変わっていないのはミステリーの一つだろう。

……やっぱり気づかないか。

何故か肩を落とす自分がいる事に危うく苦笑いするところだった。

隣を見ればアイリスがいつもより凜とした姿で立っている。

どうやらロレントと話し合うつもりらしい。

レインはそそくさと立ち去る。

公の場で自分はエルセイダ家の者ではない。

これ以上、彼らに付き合つとどんどん白髪になっていきそうな気がする。銀髪なのでうまくごまかせるが。

しかし不運という名の女神は、未だレインに微笑んでいるらしい。どうせなら幸運の女神が降りてきて欲しいものだ。

「待ちたまえ。その君」

「……俺か？」

「ああ、私はロレント・エルセイダ。彼女、アイリスやシエルそしてロイドの父だ」

言葉にアイリスが耳をビクツとさせた気がする。

本当に自分の事^{フュート}は無かったことにされている。

しかし自分の中では、未だに偽物と本物の区別が付けられていないのも事実。

思惑はいつも平行線を描く一方だ。

「……で、そのエルセイダ当主が何か御用で？」

言葉遣いに気をつけているはずなのだが何故かすらすらとタメ口ばかり出てくる。

これもある少女の影響なのだろうか。

「エルセイダにもそのような言葉遣いとは……家の者に見習わせないな」

「……心中をお察しします」

「くくつ、食えない男だ。君は」

ロレントは不気味に笑うとその場から去っていく。

レインはその姿に何度目かの懐かしさを思い出した。

「すごい度胸ですね」

「職業柄だ」

「……レインさんなら、ヴァジュラ10頭と戦っても無傷で勝てるような気がします」

レインは苦笑いで返すしかなかった。

現にアイリスの言った事を彼は既に成し遂げていたのだから。

「おや、やけに騒がしいと思ったら君だったのかい、ロレント」

柵は部屋に入ってきた人物を一瞥する。

ロレントは何も言わず近くに椅子に座った。

「子息たちは元気でやっていた。文句は無い」

「アイリス君やシエル君にはだいぶお世話になってるからね。ロイド君も頑張ってくれているよ？」

「当たり前だ。我がエルセイダに無能はいらない」

あの屑フユートのようにな。

ロレントは笑みを浮かべる。

口の端を吊り上げる程度の笑みだが、それだけでも十分不気味だ。

「世間話に來たわけじゃないだろ？」

「ああ、壁の強化についてだが……」

さて…… 人類の選別を始めるとしよう。

ロレントは口の端を吊り上げた。

「やっぱり家族は変わらない……か」

レインは極東支部の屋上に來ると呟く。

外部居住区は、ほとんど風化していて砂漠の一部分を切り取ってきたかのような光景だ。

吹いてくる風はすでに乾いているが壁の外ほど酷くは無い。

屋上から地上を見れば食料の質上昇を求めるデモ隊が看板を持ち一

丸となつて抗議していた。

思わず口元を緩める。

もし、あの中に恐怖を投げ込んだらどうなるだろう。

きつと蜘蛛の子を散らすように逃走し、先ほどデモの対象としていたフェンリルに助けを請うに違いはない。

虫のいい話だ。

そんなことをふと考える。

逃げて！

少女の声が頭の中に響く。

今はアラガミとなつてしまった少女。

彼女のおかげで今自分はここにいるのだ。

「……っ！ アラガミ反応……」

右目が反応し、即座に観測を開始する。

観測…ヒット…感知…チェック…解析…サーチ。

「……クアトリガにヴァジュラ、サイゴートにオウガテイルか。数が桁違いだな……」

レインは踵を返し神機保管庫に向かう。

この際、どこか不審に思ったという考えは無視した。

これがある厄介な一騒動になるとも知らず……。

第14話 父（後書き）

ストックがアレなのでしばらく更新が滞ります……。

第15話 二度目の追放（前書き）

雨は少女と共に目的のためへと去る

第15話 二度目の追放

「邪魔だ！」

空を飛ぶサイゴートを踏み台にしつつ斬り捨てクアトリガの顔面を勢い良く両断する。

体ごと回転させオウガテイルを数体まとめて切り裂く。
すでにヴァジュラは仕留めている。

レインは神機をだらりと下げて再び、周りを見る。
またもやアラガミの一団が接近してきている。

「おかしい、アラガミの行動に規則がありすぎる……」

不審に考えている中、感じ取れるのはゴッドイーター達の気配。
レインは周りを見渡す。

怪我をしている者はいないが、治しても無駄な者がそこら中にいた。
頭部を食われている者、胴体を切断されている者、上半身しか残っておらずなおも生きている者。
全てが自分に救いを求めている事がわかる。

「……ごめん」

そう言っただけでレインは歩き出す。
もう慣れているはずだった。

何かを助けるために何かを切り捨てるという行為に。
後ろから救いを求める声が殺到する。

「……くそっ！」

思わず近くにある壁を殴りつけた。
壁は木っ端微塵に破壊され、大きな穴へと姿を変える。

「……シユラ、いるんだろ」

『ええ……』

「楽にしてやってくれ」

『……分かったわ』

シユラが放つ闇が人々を飲み込んでいく。
一気に飲み込み、瞬時にその命を終わらせていく。
彼は嗚咽を飲み込みながらその光景を見守る。

『フュート、これはあなたの責任じゃない。外部居住区の住民にはアラガミが迫っておきながら逃げない人達が多いの。どこに行ってもアラガミに食われるのだからどうせ生きるくらいなら死んだ方がマシ……。こんなバカな考え方でね』

「……」

『でも、所詮人間よ。死んだ方がいいって思っても、望んでいたはずの死に入ってしまったえば嫌でも生きるという出口を選ぶ。自分が言った事なんて棚上げにするのよ』

「ユア、アラガミと人が共存する事は出来ないのかな」

今の彼はレインではない。

フュート・エルセイダという人格その者だ。

『……フュート、私の話聞いてくれる？』

「うん」

『私や貴方が今みたいになったのは、きっと理由があると思う。かなり複雑が理由。そうじゃなきゃ私にはあの雨の出来事が偶然なんて思えない』

「……そうだね。あの後、あらゆる可能性を推測したけど、やっぱりどれも可能性に過ぎなかった」

『それにアラガミとの共存は可能なはずよ。私たちがそれを証明している』

「あ……」

気づかなかった。

一番考えていた問題の回答がすぐ近くにあったなんて思っただけでなかった。

『フット、ゆっくり探していきましょう。私たちにできる事から』

「……そうだね。ありがとう、ユア」

『ふふっ、どういたしまして』

突然無数の銃が彼を包囲した。

着ている服はフェンリルの制服。

しかも警備員だ。

「……それがお遊びならやめとけ。怪我するぞ」

何かオカルト的な信者がやっているのだらうとレインは考えた。

しかしその考えはいとも簡単に覆される。

「フェンリル極東支部ゴッドイーター、レイン。貴様を一般人殺害とアラガミ装甲破壊の容疑で逮捕する！」

「何？」

「ゴッドイーターでありながら一般人の殺害、アラガミ装甲の破壊、どれも極刑クラスの罪状だ！」

前者は、身に覚えが無いといえば嘘になる。

しかし後者のアラガミ装甲破壊の疑いはしまったと思った。
何故考えていなかったのか。

警報が出る前にすでに誰かが現場にいる。
それだけで疑いの余地がありすぎた。

「……しくつたな」

「大人しくしろ！」

シユラに視線を向ける。

すると闇がレインと彼女を覆い尽くす。

「な、何だ！」

「う、撃て撃て撃て！」

銃弾が闇の衣に殺到するがその中までは一切届かない。
そうして闇が消え去ると同時に、レインとシユラの姿はその場から
なくなっていた。

「……以上だ。今からレインは除隊処分と一級犯罪者として指名手
配される」

アラガミ襲撃の後、ブリーフィングでツバキから伝えられた事に全
員が愕然としていた。

あの青年がそんな事をするとは到底思えない。

アイリスは自らを両手で握り締めていた。

そうしないと崩れ落ちてしまいそうだったから。

レインの存在は極東支部にとっては兄貴分のような立場だ。

手ほどきをして欲しいといわれれば、嫌な顔一つせず喜んで受ける。

何か話があれば最後まできちんと聞く。

任務が多忙の時は、一日に何回も出撃していた。

すでに彼はアナグラになくってはならない家族の一人だった。それが罪人として指名手配される。

そのような事を聞いて平然としていられる訳が無かった。

ノルンデータベース

『レイン』

2071年入隊。

次々と優秀な成績を収めていた。

幼い頃の記憶を失っており、断片的にしか思い出せない模様。

2071年、一般人殺害とアラガミ装甲壁破壊の疑いで指名手配。現在逃走中。

なお、逃走の時、黒い霧状のような物質に包まれ姿を消したことから行方不明。

各員、厳重に警戒せよ。

第15話 二度目の追放（後書き）

話の在庫がK I・R E・T A！

……正直なところアルダノーヴァまで書いてはいるんですが、そこまで主人公一本しかないの、何とかいうか……どの話にも主人公が出てたので、エルセイダと極東支部のゴッドイーター達をフルに書きたいので……。

とにかく頑張ります。

誰がために（前書き）

他色のない世界

何も無い世界にただ一人

誰がために

少年の道のりは遙かに険しくなっていた。

ただ不気味なまでに平らだった道。

その外見は、何も変わっていない。

しかし今までとは違う。

一歩踏むたびに、強烈な疲労感と倦怠感が襲い掛かってくる。

どうやら歩く道順を間違えてしまったらしい。

いや、もしくはさらに遠回りしてしまったのかもしれない。

それでも歩き続けなければならない。

文句など言っではいけない。

そのような戯言を述べている暇があるならば、ほんの少しでも、ほんの僅かでもいいから歩かねばならない。

荷物の重さは、歩き始めた頃とは比べ物にならないほど重くなっていた。

歩く辛さがどれほどだろうとしても、少年は一切顔色と表情を変えない。

そして、少年に再び見えぬ枷が一つ付けられた。

周りから声が聞こえる。

どうして生きてるんだ。

どうして助けた。

これなら死んだ方が良かった。

何故だ、何故だ、何故だ。

次々と少年に投げかけられる声。

これらは全て少年が救い上げてきた荷物いのちの声。

少年は何も言わずに歩き続けた。

やだ、死にたくない。

助けてくれ。

死のうとしてゐる者がいるのに何で助けない。

それでも人間か。

再び少年に投げかけられる声。

これは少年が落としてきた、見捨ててきた荷物いのちの声。

助けた者には偽善と罵られ

見捨てた者には薄情と罵られた。

見捨てた理由は簡単だ。

もう少年の心は擦り切れていた。

限界だった。

もうこれ以上背負うことは出来なかった。

彼はまだ少年だ。

その小さな背中に運命を背負うという事は過酷だった。

しかし人々は少年に異なる救いを押し付ける。

その責務に、少年の心が壊れるのは、そう早い時期ではなかった。

少年は何も言わずただ歩き続ける。

少年に投げかけられる声は一行に止むことを知らない。

それでも彼は歩き続ける。

より遠回りになってしまった事を知り、軽く笑みを浮かべた。

その目に曇りや迷い、ためらいは一つも無い。

ただ歩き続ける。

この世界の果て、その原点へと

ただ少年は歩き続ける。

幸せなど自分には必要ない。

今の自分にとって必要なのは、使命感だけ。

少年は自分の心に対してさらに酷を打ちつける。

そうしなければ

人々を見捨ててきた自分が

心底から贅沢な安楽を求める事など許されるはずが無い。

銀の世界に風が吹き荒れる。

しかし少年はびくともせず歩き続けた。

少年が終着点にたどり着く日は来るのだろうか。

それはまだ誰にも分からない。

少年ですらも。

運命でさえも。

誰がために（後書き）

べ、別に貴方 読者 のために更新したんじゃないからねっ！

……イマイチですね。

肝心のストックなんですが……話の構成を見直しております。

夏休みがあつた頃が羨ましい……。

そしてしばらく2日か3日に1話という更新速度かもしれません。
かんばって行きますのでよろしくお願いします。

第16話 雨から雲へ（前書き）

そうして彼は姿を変える

第16話 雨から雲へ

『レイン、腕輪はどうするの?』

「さっきそこら辺のアラガミに食わせておいた。必要ないしな」

『……アナグラが余計に混乱するわよ』

「……分かってる」

レインは外部居住区の外れに来ていた。

アラガミもまったく来ないが人間もまったく来ない。

どちらの種族も食料がまったくない場所に近寄らないというのに変わりないようだ。

ちなみにレインが腕輪を食わせたアラガミとはディアウス・ピターの事である。

襲い掛かってきたので適当に戦^{ボコ}って腕輪を食わしてから撃退した。

この事がアナグラで一騒動になるとは、知る由も無い。

「認証ワード、darkness」

レインの言葉と共に地面の一部から下り階段が姿を現す。

彼がその階段を下りていくと共に地上への穴は閉じられた。

狭い階段だったが足元についている光が周りを照らしているため、踏み外す事はない。

階段を下りていき、電子扉にパスワードを入力して中に入る。

そこから見える光景は、アナグラのエントランスと似ていた。

なんでもここは、以前フェンリルが新しく支部を作ろうとしていたが、さらに立地がいい場所が見つかったため廃棄されらしい。

その場所を改造したのがこの施設だ。

「何だ、旦那じゃねえか。久しぶりだな。お嬢も一緒か？」

普段はヒバリが立っていきそうな場所、そこには頭に白髪を大量に生やしていた男がいた。

男の名前はヴェンター・オルフレッド。

情報屋として裏社会に名前をとどろかせている者だ。態度は飄々としているが、眼光はまるで獣。

「ああ、いきなりで悪いけど匿ってくれないか？ 実は……」
「知ってるぜ。指名手配だろ？」

「……お見通しだな。さすが情報屋」
「当たり前前田のクラッカード。ほら」

やけに古い言葉と一緒に部屋と武器庫の鍵を渡す。

この施設には、様々な武器 無論、アラガミに対抗できるほどの力や質を持っている奪取や整備機器まである。

神機は、見られれば正体がバレるため、そんなに易々と使えない。

「で、お嬢はどうする？ 食料なら腐るほどあるが……」
「いや、大丈夫だ。さつきサノオがいたから乱獲してきた」
「……さすが旦那」

ちなみにヴェンターの住んでいる場所だがはつきりいつて楽園である。

まずはアラガミが攻め込んでこない。

この場所には、フェンリルから逃げてきたもしくはレイン達に瀕死の所を救われたゴッドイーター達が住んでおり、全員、凄腕の持ち主だ。

しかも神機のメンテナンス、整備は可能。
食料は質がいいものばかりで嗜好品も多くある。

しかもアーコロジーであり、餓死する必要はない。
一度「まるでアウターヘブんだ」と言ったら金属メタルの齒車ギアを渡されたのは余談である。

「神機そいつの整備はどうする？」

「頼む。俺はしばらくクラウドとして行動する」

青年が髪を掻きあげると色が変化していく。

銀髪から深緑の色へと変わって、顔つきもレインやフュートとは違っていく。

「オラクル細胞って便利だなとつくづく思うぜ……」

「まあ、シユラのおかげなんだけどな」

すぐ近くにある武器庫の扉を開けて中に入る。

ロッカーのようになっていて、自分が良く使っている場所から真紅のコートを着て、黒い弦を持つ弓を取り出す。

この姿は、かつて自身が憧れた人物 無論ゲームの中なので実在しないが をモチーフにしている。

我ながら子供みたいだと、思うが気に入っているので文句は無い。
そして顔の上半分が見えないように仮面で隠す。

これで3人目の人格「クラウド」の姿が完成した。

きちんと声もボイスチェンジャーで変えておく。

武器庫を出てからヴェンターに鍵を返す。

「神医のクラウドのご登場だな。ちゃんと口癖覚えてるか？」

「えっと……なんだっけ？」

「……お嬢、教えてやってくれ」

ヴェンターはため息をついてカウンターの近くにあるパソコンの席

に座り操作を始めた。

シユラが呆れつつため息をつく。

『ですます口調よ。フュート』

「あつ、そうだった。……これでいいですね」

『ええ、完璧ね。クラウド』

「……三人目になるのも随分と久しぶりです」

『で、これからどうするの？ ここを拠点にするのはいいけどあの計画は厄介よ？』

「決まってますよ。時と場合です」

『……ノープランって言いなさい』

再びため息をつくシユラと笑うクラウド。

本当に3人の人格を完璧に使い分けるのだから器用としか言いようが無い。

どうもクラウドは相手にし辛いとシユラは感想していた。

「そうだ、クラウド。お前を対象とした命令がフェンリルから出ている」

「何かしましたか？」

「いや『クラウドという男、見つけ次第勧誘せよ』ってさ」

「指名手配中の俺を^{レイシ}勧誘ですか……矛盾してますね」

『ぶっ……っ……っ』

何故かシユラが笑いを堪えているのはなんとなく分かる。

彼が敬語を使うという事に耐性が無いのだ。

「それではしばらくお世話になりますね、行きましょう。シユラ」

『え、ええ……ふふっ……』

クラウドは何度目かの大きなため息をついた。
吐いた息の持続時間なら今のが最長に間違いない。

そうして雨はレイン雲へと存在すがたを変えた。

第16話 雨から雲へ（後書き）

主人公は多重人格ではありません。
クラウドは敬語ですがいずれ……。

次は極東支部視点です。

第17話 白の少女と足跡（前書き）

足跡を辿るも姿は無し

第17話 白の少女と足跡

「……ここは戦場、ここは戦場……落ち着いて……」

アイリスは、頭の中で数えていたカウントが0になった事を信じて走る。

踏みにじる雪の音がやけに大きく聞こえた。

目に入ったのは、シユウ。今回の標的だ。

走りながら跳躍する。

シユウと離れていた距離が一気に縮まり、アイリスは神機を剣形態のまま獲物を斬る。

残る手応えを堪えつつ、すぐさま距離をとり、出方を見る。

コウタとアリサがパレットを撃ち込み、シユウの気を逸らす。

シエルがその隙を突いて強烈な一撃を叩き込んだ。

まともに食らったシユウは怯むがシエルを攻撃対象として、エネルギー弾を撃ちだす。

「遅い」

すでに攻撃圏内から脱出していた彼女は、神機に大きな遠心力を掛けてシユウに激突させる。

これは斬撃というより打撃と呼んだほうがいいのではないかなどといったくなるほど見事な体勢だった。

4人はそれぞれ自身の立ち回りと役目を再確認して行動する。その移動に迷いは無い。

シユウは圧倒され、そのまま骸へと変わるのにそう時間は掛からなかった。

「それでは私から失礼しますね」

アイリスが神機を捕食形態に切り替えシユウを食らおうとした時だった。

「それ、ちよつと待った！」

聞き覚えのある人物の声が聞こえ、振り返ると榊とソーマが立っていた。

全員が驚きの表情を浮かべる。

「博士、なんでこんなところに？」

「説明は後だ。とにかく、そのアラガミはそのままにして、ちよつとこつちにきてくれるかな？」

全員は訝しげな様子で博士の後を追う。

そのまま待機するような感じになり、場面は刑事ドラマの一部分のようになっていた。

「きたよ！」

榊が嬉しそうな声を上げると同時に、倒したシユウの骸に何かが乗っている。

見えたのは白い少女。

衣服の所々に返り血が付着している。

「オナカ……スイタ……ヨ……？」

アイリスは神機を持つ手に力を込める。
目の前にいる存在は人間ではない。

「いやあ、やつと姿を現してくれたね！」

榊の嬉しそうな声が聞こえた。

ひよっとして研究試料にでもするつもりなのだろうか？

その場は、とりあえず榊のラボで続きを行うことになった。
ちなみに言っておこう。

シオをアナグラの中に入れるのに相当骨が折れた。

『えーっ！？』

全員の声が絶妙なハーモニーを生み出し、綺麗な絶叫を作り上げた。
あのシエルまでもが驚いていることから、かなりの事だとわかる。

「あ、あの博士……もう一度言ってくれませんか？」

アイリスは、目の前にいる少女を警戒しつつ榊に視線を向ける。
何故こんなにも楽しそうなのだろうか、この男は。

「うん、もう一度言おう。コレはアラガミだよ」

「うわっ、ちょっ、あぶなっ！」

コウタの悲鳴が連続して聞こえたのは、目の前の事実に着いていないためだ。

そうでなければ、先ほどの見事な3連続の叫びは生まれなかった。

「博士、貴方が平凡としてのことからこのアラガミに関して害は無いと判断してよろしいですね？」

さすがというべきかシエルはすでに平常心を取り戻しており、冷静な対応が出来ていた。

彼女の言葉に周りがいくつかの落ち着きを取り戻す。

「ああ。シエル君の言う通り、彼女が我々に害を及ぼす可能性は0に等しいと言っていていい。しかも」

榊の口から述べられたのは、今までのアラガミの常識を覆す物と言っても過言ではなかった。

人に限りなく近いアラガミなど聞いた事が無い。

しかも言葉を話せ、心を通わせる事が出来るのなら人とアラガミの間にある、越えられない壁を突破できる可能性があるのだ。

「ところで、彼女にはまだ名前が無い。もし良かったら、名前を付けてあげてくれないかな？」

「ふっふーん、俺ネーミングセンスには自身があるんだよね」

榊の言葉を聞くや否や自信満々に「ふっ」と鼻を鳴らすコウタ。

「そつだな、例えば……ノラミとか！」

その時、部屋の雰囲気は以下の一言に凝縮される。

何言ってんだコイツ。

「どんびきです……」

アリサの言葉にコウタを除く全員が心の中で頷いた。

ノラミと聞かれ「何それ、青いネコ型ロボットの妹？」という回答例が出てもおかしくない。

彼女の言葉を聞いたコウタは途端に「えっ」と不満の声を上げる。

「何だよ、じゃあ他にいいのがあるのかよ……」

「な、何で私がそんなこと……」

「へーんだ、自分のセンスをさらすのが怖いんだな」

もしコウタのセンスがその程度だとすると彼の脳内思考の中身は天^た真爛漫^{んじゅん}なのがよく分かる。

さすがにこのレベルになると「いいセンスだ」どころの話ではない。

「そ、そんな訳ないでしょ！え、えーと……」

「……何だよそれ」

「ロシア語ですが？」

誰がロシア語で付けろと言った。

ついでに日本語訳すると「左」である。

唐突な質問に混乱していたのだろうか。

「シオ！」

少女の言葉に周りがビクツとした。

すぐ近くにいて大声を出されては、そうなるのも無理は無い。

「そ、そうです。日本語にするとシオなんですよ！」

無論、真っ赤な嘘だ。

「シオ……それが君の名前かい？」

「ウン、おにいちちゃんとおねえちゃんニツケテモラッタ！」

榊の目が珍しく見開かれた。

一同の目は、シオの言葉よりも榊の見開かれた目に驚いている。確かに今の状態の彼をこの目で拝む事など、一生に一度あるかないかだ。

数々の勇者達^{バカ}が彼の眼光を目にしようとしたが、それを成し遂げた者は一人もいなかった。

「おにいちゃんとおねえちゃん……君の家族かい？」

「カゾク？ カゾクツテナンダ。ウマイノカ？」

「……そのおにいちゃんとおねえちゃんがどんな姿だったか覚えてないかな？」

「おねえちゃんハマツシロナカミをシテ、おにいちゃんハカタホウノメヲヌノデオオツテタ」

「っ！」

片方の目を覆う、つまり眼帯。

それをしていた男性。

全員の中で一人の人物が浮かび上がる。

「ねえ、シオ。もしかしてそのおにいちゃん、貴方と同じ色をしてなかった？」

「ウン、ミギテナアカイナニカヲツケテタ」

「……博士、これは……」

「意外なところで思わぬ人物が拳がったね……。彼が目の前にでもいればすぐに聞き出せたんだろうけど……」

『レイン・2』

外部居住区の住民の証言により、外部居住区の外れにいた事が確認された。

しかしその後の足取りは分かっていない。

なお、一級犯罪者のため確認次第拘束する事。
抵抗した場合は殺害を許可する。

第17話 白の少女と足跡（後書き）

何かネタを詰め込みすぎた気がします……。ちなみにロシア語はグーグル翻訳で「のらみ」と打ち込んだ結果です。

……カッとなってやった。反省はしている。後悔はしていない。

第18話 雲の一日（前書き）

雲はただ流されるまま往く

第18話 雲の一日

「次の方、どうぞ」

クラウドはカルテを持ち次の患者の診察を開始する。

医者になること時代は幼少時代からの夢だったのである意味満足感に溢れていた。

仮面をつけているのに、誰一人不気味を感じないのは本人の才能による物だろう。

真紅のコートもかなり不釣り合いだが。

次の患者は左腕が微妙に欠損している人だった。

「あの……アラガミに左腕を捕食されて……どうにか戻せませんか？」

一見すると無茶な要求だが最近はそのが多くなっていた。

無論、クラウドとて対策を練っていない訳ではない。

かなりのレベルを持つ技術を要求されたからには、それ相応の覚悟を持ってもらわねばならない。

「そうですね。それでは捕食された箇所が中途半端に残っているのが完全に切断してよろしいでしょうか？」

「そ、それは手術という事ですか？」

「まあ、そうですね。大丈夫ですよ。すぐに終わりますから」

クラウドは薬品が入っているビンを患者の前に置く。

その薬品の色は赤と黒がほどよく混ざった色。

俗に言う警告色という物だ。

「これは眠り薬です。1分ほどで目が覚めます。これを飲んで目が覚めれば手術は確実に終わってます」

「……わ、分かりました」

一度この方法を薦めた患者の一人が「嘘だッ!」と激昂しクラウドに襲い掛かるという事があったが、逆に損傷箇所を増やし、渋々帰るというケースもある。

この患者はその類ではなかったので少し安心した。患者は薬を飲むとすぐに昏睡する。

「フレイ、切断お願いします」

「ええ、了解」

フレイと呼ばれた少女 もちろん、シユラだ はメスを軽く闇で覆い左腕の中途半端な箇所を切断する。

闇を纏わせたのは痛覚を麻痺させるためだ。

それと同時にクラウドが薬品を取り出し、患者の左腕にかける。

すると左腕は、ほとんど元通りになっていた。

起きて左腕を確認した患者は、喜びを見せてその場から去っていった。ちなみにボランティア的活動なので金は取らない。

『相変わらず凄いわね。貴方の作った薬は……』

「ほとんどオラクル細胞のおかげですよ。本当にアレは凄いです」

『……ねえ、クラウド。せめて私とヴェンター達しかいない所ではレインかフートの話し方に戻ってくれないかしら? 少し虫唾が走るわ』

「……分かった。レインで話すから最後の部分を無かったことにしてくれ」

クラウドとなるのは結構疲れる。

敬語があまり馴染んでいないからだ。

これならまだアラガミと戦っていた方がラクに違いない。

『これで今日の回診は終わりね。お疲れ様、クラウド』

「……そうだな」

クラウドは椅子から立ち上がりカルテをアタッシェケースの中にしまう。

ちなみにシユラの闇は物を保存できるという特性を持っている事がわかり、それがかなり助かっている。

医者として活動するのに、最適な物を全てシユラの闇に保管し、クラウドはどこかへと歩き出した。

まだ日が昇っている中、クラウドは膝を落とし食事のサリエルに向けて弓を構えた。

今、いるのは鎮魂の廃寺。

降り積もっている雪は、未だに地面を見せておらず、アラガミ達の活動の一つとなっている。

ちなみに矢はオラクル細胞を付加させてあり、これならアラガミ相手でも十分すぎるダメージをたたき出す事が可能だ。

ここで思い浮かべるのは錬鉄の英雄の姿。

彼の代名詞とも言える言葉をクラウドは呟く。

I am the bone of my sword・(体は
剣で出来ている)

次々と言葉を思い出していく。
体中がみなぎってくるのがはつきりと感じられる。

Steel is my body, and fire is
my blood (血潮は鉄で 心は硝子)

さらに弦を強く引き絞り

I have created over a thousan
d blades (幾たびの戦場を越えて不敗)

目を細め、狙いを固定し

Unknown to Death (ただ一度の敗走もなく)

風の流れを感じ取り、予測して

Not known to Life (ただ一度の理解もされな
い)

獲物のどこに当たるのかを予想

Have withstood pain to create
many weapons (彼の者は常に一人 剣の丘にて勝利
に酔う)

矢の軌道を思い描き

Yet, those hands will never h
old anything (故に、生涯に意味は無く)

そして常に意識するのは最高の自分

S o a s I p r a y , u n l i m i t e d b l a d e
w o r k s (その体はきつと剣で出来ていた)

『クラウド、まだ?』

「……気分を壊さないでくれ」

引き絞り矢を放つ。

矢は吸い込まれるようにしてサリエルの額に直撃し、サリエルは動けなくなった。

シユラはやれやれと頭を振り、クラウドの黒い弓に目を向ける。

『いつものことだけど出鱈目な威力よ、それ』

「神機が使えないからな。これ位の破壊力がなきゃアラガミに対抗できない」

『……神機より十分すぎる代物だと思うけど? それにしてもオラクル細胞って便利ね』

「だな。よし、アイツはシユラが食っていいぞ。俺は素材集めに行く」

クラウドの言葉を聞くや否やサリエルの死骸をシユラの闇が飲み込んだ。

本当にオラクル細胞とは万能である。

シユラ曰く、あの闇もオラクル細胞で構成されているらしい。

どういうメカニズムが働いているのか知りたいが聞いても自分の頭では、まず理解できないだろう。

クラウドは、やれやれと頭を振ると弓を構えつつ、素材回収へと向かった。

「あつ、おねえちゃん！」

誰かに見つかったと思い、二人が振り返るとそこには、一人の少女がいた。

着ている服や外見は変わりが無いが、言葉が滑らかになっている。

『シオ、久しぶりね』

シユラの言葉と共にシオは、彼女に抱きついた。
その様子は、ほとんど姉妹である。

「あれ……おにいちゃん？」

これには、クラウドとシユラも驚く。

何も言っていないのに、彼の正体を見抜くのはかなりの物だ。
うなづく代わりに、クラウドはシオの頭を撫でる。

その後、三人で長い時間、話をした。

彼女は、まだうまく話せてはいなかったが人間らしさが垣間見えていた。

「……じゃあそろそろ行くよ。シオも迎えが来る頃だろ？」

「むかえ？」

遠くからシオの名前を呼ぶ声が聞こえた。

極東支部の者が探しに来たのだろう。

見つかると思わぬこと、この上ない。

『シオ、またね。後私たちの事は話しちゃダメよ？』

「うん、わかった!」

彼女がうなずいたのを見て、クラウドとシユラはその場から去っていった。

「ほら、ヴェンター。頼まれた品だ」

「おつ、お疲れさん、旦那」

ヴェンターはクラウドが差し出した刀を手取る。

その目は鑑定人そのもの。

「年代物の名刀だな。こりゃ結構価値があるな……」

「複製できるか?」

「もちろんだ。俺らの技術力、甘く見られたら困るぜ?」

自信満々にヴェンターは答える。

その態度にクラウドは頼もしく思いながらもどこか呆れた苦笑を隠せなかった。

一日のほとんどは、医業と素材回収に尽くす。
それがクラウドの日課だった。

第18話 雲の一日（後書き）

グダグダ感が酷い！

…… ネタってレベルじゃないぞ、アレは……。
と書いていて気づきました。

ちなみに学校の方でテストがあるため、少しの間、更新を停止します。

いきなりで申し訳ありませんが、これからも「ゴッドイーター」
銀の戦士」をよろしくお願いします。

第19話 心情（前書き）

仲間達は、
各々のモノに理解を寄せる

第19話 心情

「こ、これで全部です……」

アイリスはくたくたになりながらも櫛に頼まれた素材を渡した。

シオの服を作るために、アラガミの素材が必要となったのだ。

既に必要数が足りていた素材も合ったが、たった一つの素材だけが以上に出なかった。

普段ならば良く出るのに、何故かほしい時に限って出ない。

そのようなセンサーでもあるのだろうか。

シエルに頼んで何度も何度もその素材を持つアラガミを討伐し、それでも出なかったが、徒労にくれた拳句、カノンと共にミッションにいくという暴挙に乗り出しようとう手に入れた。

「おお、お疲れ様。アイリス君。……休暇はいるかい？」

「い、いえ。大丈夫です」

体に溜まっていた疲労を無かったことにして、アイリスは背筋を伸ばす。

まだ、この瞬間も人類はアラガミと戦っている。

ならば自分も負けるわけには行かない。

体を奮起させる。

「コンディションにも気をつけてね。人の精神というのは意外と影響が出るんだ。急ぐのもいいけど、たまにはゆっくりと速度を緩めるのもいいかもしれない」

「……ありがとうございます。ですが、私は」

「うん、そっくりだ」

「えっ？」

榊から放たれた一言に、アイリスの思考は中断した。

「その性格はロレントにそっくりだよ。彼もああ、見えて結構繊細だから」

「はあ……」

アイリスは思わず呆気にとられる。

どうして博士絡みになると疲れる事ばかり起きるのだろうか。彼女は、内心大きいため息をついた。

「……ふう」

「ため息なんて珍しいな。どうかしたか？」

「タツミさん」

ロイドは、帰投しエントランスのソファで考えことをしていた。要するに自問自答だ。

彼の部隊の隊長である大森タツミは、彼に缶を差し出し隣に座る。

「ほら、任務お疲れさん」

「ありがとうございます」

「……で、さっきのため息のワケは？ 悩んでるなら相手になるぜ」

タツミは、極東支部に所属している現役ゴッドイーターの中でもかなりの古参兵である。ちなみに現在、現役ゴッドイーターの中でトップはシエルだ。

彼の人柄はかなりの人物から信頼されており実力も高い。

モットーの「勝つ戦いより負けない戦い」。

それは彼が今まで培ってきた経験を物語っている。

「いえ、何というか……力をつけないと足手まといだなんて思ってたして。……例の一件で姉さん達も疲れてるし……俺が強かったら、
って……」

昔、使用人から聞かされた話を思い出す。

自分が生まれる前に追放された少年がいると。

それが自分の兄だということ。

そして様々な人物から尊敬されていたということ。

その話を聞いてロイドから生まれた感情は、やはり尊敬だった。

会ってみたい、話してみたい、聞いてみたい。

色々な願望が頭の中をよぎっていった。

もし、その兄が生きていて今の自分を見たら何と言うのか。

弟としてふさわしい人物になる。

それがロイドの目標となっていた。

「お前は十分強い。自信を持てって」

「……」

「経験を積みれば分かるさ。どんなに力つけても守れないモンだってある。どんなに頑張っても報われない事だってある」

「タツミさんとヒバリさんの関係みたいにですか？」

「イヤな表現するな、オイ」

タツミは少し笑顔を浮かべ、缶の中身を飲み干す。

「けど、それは結果。そいつにしか目を向けない奴はどんどん下がっていく。逆に上がっていく奴っていうのは、自分が得たモンにも目を向けるんだよ。その得たモンでどれだけ上に上がるか。それが成長する秘訣だ……まあ、頑張れって事さ」

ロイドはタツミの言った事を一つ一つ噛み砕きながら整理していく。
気がつけば、心の霽もやはすっかり晴れていた。

「フツ、お前と酒を飲むのも久しぶりだな。ツバキ」

「ああ、最後に飲み交わしたのは……2年前だな」

ツバキとシエルは二人、教官室で酒を飲んでいた。

教官室で酒を飲むのはどうよ？と思われるかもしれないが、プライベートなので問題は無いだろう。

「そうか？ 私のおぼえている限りでは、ユーラシア大陸のアラガミ掃討作戦が最後だったんだが」

「……ああ、アイリスとソーマの初陣だったな」

ユーラシア大陸アラガミ掃討作戦。

ゴッドイーター、フェンリル職員の中でその言葉と意味を知らない者はいないだろう。

原子力の核爆発によりアラガミを一掃しようという計画。

その中で、アラガミ達を誘導する役割を担っていたゴッドイーターが、ツバキ・リンドウ・ソーマ・シエル・アイリスの5人だ。ソーマとアイリスにとっては文字通りの初陣だった。

しかし作戦は失敗。

結局アラガミの数は、5人が倒したアラガミ以外、変化していない。

「あの時か。作戦自体は悪くなかったが兵士の質が悪すぎたな。何よりアイリスを強姦しようとした輩がいた事に腹が立つ」

「……確かに。上官の態度も目に余るモノだった」

作戦決行前夜、アイリスを強姦しようとした兵士がいた。

彼の行動はきわめて単純。

深夜、作戦の打ち合わせをシエルに確認しようと廊下を歩いていたアイリスを後ろから羽交い絞めにする何ともお粗末な計画だった。

しかし、羽交い絞めにする瞬間アイリスの回し蹴りが側頭部を直撃しかもつま先でだ　しさらに彼女からの右ボディブロー、左フック、右アッパーという容赦無きコンボが決まり、最後に一部始終を見ていたシエルが長距離助走付きの飛び膝蹴りを決め、兵士を気絶させるという結末を迎えた。

結果兵士は瀕死の重傷を負い、作戦から外された　それでも瀕死で済んだ兵士には一種の敬意を表すべきなのかもしれない　。

「それにしてもよくアイリスは格闘技なんて出来たな。見た目からは想像もつかないが」

「フートの事は話しただろう？　アイリスは筋金入りのブラコンでな。しばしば、弟の部屋に忍び込んでよく困らせていた。ただ、いつからか行動がエスカレートしていったな。……その、言いにくいがフートを気絶させて……まあ、察してくれ」

「……言いたい事はわかった」

二人は苦笑いし、酒を飲む。

彼女たちは旧知の中であり、多くの戦場で共に行動してきた戦友である。

しかも弟がいて、同じ姉であるため非常に気が合うのだ。

「ところでシエル、レインの件についてだが……お前も同じ意見だろう？」

「ああ、アラガミ装甲壁破壊……少なくともレインではない。……しかし奇妙だな」

「奇妙？」

「何でもレインの部屋を通る時、彼の声を聞いた者がいるらしいんだが誰かと喋っていたようだ。あの後、部隊全員に確認を取ってみたんだが……誰一人としてレインとは部屋の中で話していない」

「確かに奇妙だな」

「他にもある。これも他の隊員からの証言だが、アラガミとの交戦中は必ずといっていいほどアラガミはレインを狙っていたらしい。他の者には見向きもなかったようだ」

「……なるほど、では私の方でレインの指名手配については言及してみる。他の事は任せたぞ」

「……えいつ！」

アリサは訓練所でひたすらダミーターゲットを相手に自身の力量を確かめていた。

自分が追いつくべき存在、彼の姿を思い浮かべる。

地を蹴って、近距離のダミーターゲットをまとめて斬り捨て、遠距離はパレットを撃ち破壊する。

タイムを確認してみるがまだ彼が果たしたタイムには届かない。

「敵かないませんね……」

まだ熱が感じられる呼吸を整えて、エントランスに戻る。

レインが除隊処分されてから数日経った。

本当に彼の仕業なのかと、抗議する声も上がったが状況的証拠しかない以上、判断できないのも事実だ。

それでも、レインとリンドウが帰ってくるこの場所を守らなければならない。

アリサは今までの自分と今の自分を比較した。

かつての自分は、ただ自惚れていた。

暗示に掛けられ、手にした力を自分の物だと思い込んでいた。ただ今の自分は。

気がつけば、彼の事ばかり追い続けている。

思い返せば初めてかもしれない。

自分が人に憧れを抱くなど。

「……もう一頑張りです」

そう言って再び訓練所へと向かう。

今よりもっと強くならなければならない。

彼の隣に立ち、彼の背中を守るためには。

第19話 心情（後書き）

最後がグダグダです……。

ちなみに今、ストックを見直しているんですが……やはりグダグダです。

……文才が欲しい。

第20話 徒労（前書き）

旅人はただ走り続ける

どこへ向かうかも定まらぬまま

ただ走り続ける

その先に何かが待っているとしたか予感しか抱けずに

第20話 徒勞

外部居住区は混沌の真つ只中であつた。

理由はアラガミの襲撃。

アラガミ装甲壁が突破され、無数のアラガミが外部居住区へと侵入してきたのだ。

何の力も持たない人々はアラガミにどうすることも出来ない。

一人、また一人とアラガミの養分に変わり果てていく中、二つの存在が行動を開始していた。

母らしき女性と娘らしき少女がひたすら走っている。

女性は少女の手を離すまいと強く握り締め、少女は女性に急かされるまま走り続けている。

何気ない石に躓いて症状が態勢を崩し地面に倒れる。

一匹のオウガテイルがゆつくりと近づいてきた。

一步、一步と歩いてくる音に、死の恐怖を感じる。

女性は少女を守るように抱き締める。

少女はひたすら泣き崩れる。

そしてオウガテイルの顎が女性の頭を喰らおうとした瞬間、一本の矢がオウガテイルを貫いて、その生命活動を停止させる。

「大丈夫ですか？」

仮面を付け、真紅のコートを纏った青年が手を差し伸べてくれた。

右手には黒弓を持っている。

「あ、ありがとうございます。ゴ、ゴッドイーターの方ですか？」
「まあ、それに近いですね。それよりもここは危険です。後100mほど、貴方達が走っていた方向に進めば、私の仲間がいます。彼らが守ってくれるのでそこにたどり着くまで頑張ってください」
「わ、分かりました。本当にありがとうございます！」

女性が少女を立ち上がらせる。

少女は青年の方をじっと見ていた。

ちなみに仲間とは、ヴェンターが出してくれたゴッドイーター達である。

一箇所に避難させて、極東支部の隊員が到着次第、真っ先に本拠地に戻るという手筈だ。

「お兄ちゃん、ひょっとして正義の味方？」

「……うん、悪い奴を退治に来た正義の味方だよ」

少女はニコツと笑顔を浮かべた。

「行こう、お母さん！ 正義の味方がいるなら私たち大丈夫だよ！」

「ええ、そうね。それじゃあ、本当にありがとうございました」

女性は少女の手をとると再び走り始めた。

その様子を青年は、微笑を浮かべて見つめる。

『新しいファンができちゃったわね』

「そうだな。……しかし正義の味方と言われるとは……」

『ええ、あの子の心をガツチリ掴んだわよクラウド』

「……そんなつもり無かったんだけどな」

そついいながら、クラウドが新しい矢にオラクル細胞を付加させた

時、悲鳴が聞こえた。

聞こえた場所は、先ほど女性と少女に走れといった方向。そして悲鳴の声は先ほどの少女の声。急いで走り出してその方向に向かう。

「……」

クラウドが見たのは、すでに事切れている女性と死にかけている少女だった。

二人とも先ほどの人物に間違いはない。

女性は、首から血を流しており、少女は腹を赤く染めていた。どちらも刃物の傷だ。

ならば彼女たちを殺したのは間違いなく

「……」

人の気配を感じて、クラウドは振り返る。

立っていたのは2人の男。

両方とも外部居住区の人間だとすぐに分かった。

所々が薄汚れている。

どちらも手に刃物を持っていて、その刃物から鮮血が垂れて血溜まりが作られていた。

「なんだア？ 気づかれたじゃねえか」

「しかも男だぜ？ 女だったらやれてたんだが……やっぱさっきのやつとけば良かった」

クラウドはただ沈黙し、仮面の奥の瞳から二人を睨んだ。自責と怒りを押し殺して声を絞り出す。

「……どうして殺した」

男の一人が顔を歪ませた。

今すぐに、この顔を殴りつけて肉塊にしてやりたいと心が叫ぶ。

「生き残るために決まっただろうがボケ！ アラガミどもから逃げる時間を稼いだんだぜ？ これが世のため、人のためってヤツだ」

何故だ

「……何故彼女たちを選んだ」

何故、僕はいつも守れない

「あ？ 弱そうだったからだよ。弱いヤツが生きてたって今のご時世口クナ事がねえ。だったら他のヤツらのために死んだ方がいいに決まってる。俺たちはコイツらに生きる意味ってのを与えてやっただけだ」

どうして気がついたときには、既に手遅れなんだ

「お前も貧弱そうだからな。そんな仮面はいけ好かねえがコートと弓は気に入ったぜ。俺たちがそれを使って人を救ってやるからよ……大人しく死ね！」

そうか。やっぱり……

男二人が真っ直ぐに突っ込んでくる。

クラウドは最初に繰り出された刺突を避けて、男の鳩尾に膝蹴りを叩き込んだ。

「がぁぁあつ!?!」

男の体の骨が数本、粉碎し、折れた骨が肉を突き破って血を撒き散らす。

すぐに後ろに迫っていた男の脛を踵で蹴りつけた。

「ぎゃっ!?!」

蹴られた箇所は、甲高い音を立てて折れた。

二人の男はその場で悶える。

「いてえ、いてえよ。た、たすけてくれ」

クラウドは表情一つ緩めずに、男の首を持ち上げると無造作に放り投げる。

二人の男は、どすんと地面に激突しその激痛の加速に呻いた。

そして男たちの目の前にはオウガテイルがいる。

先ほどとは別の個体だが、それでも人々を殺す存在である事には変わりはない。

「ア、アラガミだ。た、たすけて!」

「た、頼む! や、やっつけてくれえ!」

男の二人がオウガテイルに捕喰されていくのを見ながらクラウドは矢を構えて放つ。

貫かれたオウガテイルは絶命し、その場に倒れこんだ。

すでに男達の方も息は無いだろう。

クラウドは女性と少女の前に立つ。

「……ごめん」

その時、少女の手が微かに動いた。
すぐに少女を抱えあげる。

クラウドの薬は、この状況では効果が無い。

彼の薬は患者の容態をベースに治療を発揮する効果だ。

あの時左腕を治したのも、喰われた切断面の細胞が完全に死んでおらず、自身の役割を覚えていてくれたため、再生できた。

この少女は、刃物という物で刺されており、細胞は完全に破壊されている。

いくら強力な治療薬でも何か作用を働きかけてくれるベースがなければ意味を成さない。

「あ、おにいちゃん……」

「……」

「ねえ……おかあさん……どこ……」

「すぐ傍にいるよ。だから安心して」

残酷な事実を平然と改変する自分にクラウドは嫌気が差した。

だが目の前の少女を救わなければならない。

生きるのが無理なら、せめて死に際だけでも。

もう見慣れているはずの光景だ。

だから涙など出る訳が無い。

無いはずだ。

「よかった……おにいちゃん……ありがとう……」

少女の目は焦点が定まっていな

彼女の灯火はもうすぐ消える。

だというのに自分は何も出来ない。

「おにいちゃん……がんばって……」
「うん……頑張るよ。絶対に……」

少女の重みが抜けていく。

やはり、今回も完全に救うことは出来なかった。

「……ありがとう……せいぎのみかた……」

少女の目が閉じられ、かろうじて動き続けていた彼女の心臓が止まった。

彼女の体温が急速に失われていく。

『……クラウド、ごめんなさい。私がついていつてあげれば……』
「いや、シュラのせいじゃない。それに……こんな事はもう慣れる」

そうだ。いつもそうだった。

最初からあの男たちを探して出して殺していれば、二人は死ななかった。

ついていつてあげてやれば、死ななかった。

すでに意味の無い後悔や苦悩が押し寄せて来る。

「……まだ生きている人がいるかもしれない。シュラ行こう」
『クラウド……分かったわ。せめてゴッドイーター達が来るまでは、出来る限りの事をしましょう』

もう慣れているはずだ。

助けた命が別の存在により死んで行くことに。
意味の無いことを繰り返し返す。

だが戦い続けなければならない。

そうする事でしか、彼は理由を得られない。

ただひたすら、意味の無いだけかもしれない救済を続けていく。

だが止めてしまえば、それまで犠牲になった者たちの意味がなくなってしまう。

君は誰からも理解されない

そんな言葉がずっとクラウドの中で繰り返されていた。

『料理騒動』 アラガミの味は人間の味覚を超越するか！？（前書き）

注意！

まず、この話はグダグダです。
キャラ崩壊の可能性有るかもしれません。

あくまで外伝です。
フィクション

『料理騒動』 アラガミの味は人間の味覚を超越するか!?

「なあ、そういえばさ、料理できるゴッドイーターってあんまりいないよな?」

コウタの何気ない一言。

それが後に酷い状況を作り出すなどとは誰も思ってもいなかった。言ったのがせめて『死亡フラグ』とやらを積み立てるヤツでなければ、回収される必要は無かったのかもしれない。

「んー……確かに食糧が配給になってから料理するヤツなんて滅多にいないからな……」

「ですよー。むしろ何ていうかギャンブルより安定ですかね、俺は」

ハハハ、と笑うリンドウとコウタ。

リンドウは加え煙草をしたまま、煙で輪を作り、飛ばす。

この二人は、今自分達がとんでもない地雷を踏んでしまったのだと気づいていない。

危険を予測していたソーマはすでにターミナルを操作しているフリをして、背後から感じる見えぬ重圧に冷や汗をたらしながら耐えていた。

レインは、危うく巻き添え寸前だったので、大人しくよろず屋の商品を立ち見していた。

『レイン、貴方の出番じゃない。手料理は貴方の趣味でしょ?』

こんな時でも余裕たっぷりの表情と台詞を言うシユラ。
何故、コイツはこんなにも楽しそうなのだ。

その頃、エントランスでは、爆弾を投下した二人に対して女性陣
第1部隊限定 から挑戦状がたたきつけられていた。

「……で、どうして俺たちまで巻き込まれた」

ソーマの一言は、レインの気持ちを正確に代弁してくれていた。
気がつけば着ていた服の上から再び武装し頭^{エラロン}にすっかりバンダナま
で巻いている。

「いやあ、なんていうか、皆でやった方が楽しいと思ってさ！」

「まあ、アレだ。たまには皆でワイワイするのも悪くないって事だ」

お前らは道連れが欲しかっただけだろ。

ソーマとレインの思いが再び重なる。

コウタの楽天さは、ある意味世界クラスだろう。

これが任務中であるならばどれだけ頼もしいことか。

そして自己犠牲スキル保持者が巻き込んでどうする。

少なくともコウタは戦力外にしておいた。

頼りになるのは、家庭の味を知っているということだけだ。

リンドウに関しては、ほとんど未知数だ。

年期が長いということから配給食糧の味を体が覚えているので、味
の平均値を決める要素にはなる。

ソーマに関しては、食べた時の顔の変化 味のバランスでは期待で
きる。

エリックに関してはグルメであるという事のみ　そもそも期待できる要素がない。

ちなみにレインは、何度か自炊した事はある。
つまり……

料理できるの、俺だけかよ！

隣でシユラの笑い声が聞こえるのは、もう慣れたが傷心の時に笑われれば嫌でも症状は悪化する。もしかすると変わり過ぎたのは、彼女が原因かもしれない。

そしてもう一つ頭の痛くなる理由は一つ。

アイリスとシエルは料理が壊滅的に苦手だ。

家にいた時、一度彼女たちの料理を食べた者が謎の食中毒を起こし死にかけるという事件が発生した。

しかも食べた者は一時的な記憶喪失になっているというオマケ付き。その日から「決して彼女たちを厨房せんじょうに入れるな」という心の文章がエルセイダ家訓に追加されていた。

そして今回の料理対決では、試食するのは極東支部の隊員たち。

何とかして犠牲者を減らさねばならない。

そうしなければ極東支部は一巻の終わりだ。

現実とは非情である。

「……分かった。調理は俺がやる」

全員の視線にこめられた期待に、レインは肩をすくめるほか無かった。

食材の量は彼やシユラでも舌を巻くほどであったので心配はしなくていいだろう。

作る料理をシチューに決めたところで早速レインは調理に取り掛かる。

食材なんてよく用意してあったな、と思いながらも思考と両手の動きは完全に分割されていた。

まずは野菜を角切りにして鶏肉を適度な大きさに切る。

そして鍋に油をひき、鶏肉と野菜を入れ、塩・こしょうしてよく炒める。

玉ねぎが透明になるを合図に火を止める。

小麦粉をいれ、野菜と混ぜ合わせる。

牛乳と水をいれ、さらによくかきまぜてとろみがついたのを確認してから弱火で煮込む。

そして最後に味を調べて、レイン特製のシチューが完成した。

以外にテキパキと出来たので、我ながら満足気な笑みを浮かべる。

「おっ、中タイケるな」

「……うまい」

「おおっ！ 凄いじゃん、レイン！」

「さすが僕が認めた華麗な相棒だからね。信頼していたよ」

その場にいた者たちからの評価は好評だった。

これならば何とか認められる事は間違いない。

レインは一息つくとドアに目を向けた。

互いとなって配置された部屋である。

反対側の部屋では、間違いなく悲劇が起きているだろう。

「まあ、アリサとサクヤさんがいるから問題ないよな……」

ちなみにこの時レインは一つ勘違いをしていた。

それもかなり重大な勘違いだ。

アリサも料理は壊滅的に苦手である。

「……見に来て正解だったか」
「レ、レインさん!？」

レインがシュラと同じく深いため息をついて部屋に入ってきた。
片手にはお盆を持っており、上には4つのシチューが置いてある。

『レイン、貴方は今、この場においてたった一人の救世主^{メシア}よ。悩める人々を救ってあげなさい』
「やっぱり俺も手伝わないとダメか……」

お盆を置いて、キッチンに立ち、その惨状に苦笑いする。
どうやら彼も調理器具が破壊されるという光景は初見らしかった。
しかし、そこは手馴れたもので生存している所をうまく使い、残っている食材を次々と調理して量は少ないものの見事なシチューを完成させた。

「す、凄い……」
「……俺からするとお前らの方が凄く見えるけどな」

レインが指を差すのは暗黒物質^{ダークマター}がたつぷりと煮えたぎっている鍋。
シュラの計算だと、火を止めてから30分ほど経っているのに、まだ沸騰しているのは一種のミステリーだろう。

そして何故スープの色が次々と変化しているのか。
これもまたオラクル細胞以上の謎である。

「これは、その……」

「分かつてる。考えてみれば原因はあの二人だからな」

出来る限り、自然を装いつつレインはシュラに目配せする。

どこをどうしたら、こんな事になるんだ？

シュラはため息をついて、口を開いた。

何故、あの鍋に入っている物が誕生したのか。その過程を示すキッチンの上で繰り広げられた惨劇を、ゆつくりと語り始めた。

『い、いま起こったことをありのままに話すわ』

シュラはキッチンの上で行われている事が理解できなかった。
まず最初こそは普通である。

サクヤは普通に料理がうまい。

しかし、3人は出来る限りのオリジナルを作りたいということで彼女は見守る役となった。

その後、レシピを一通りを見てアイリスが鶏肉を手取る。
包丁で適度な大きさに切るのかと予想したその時だった。

ブチッ

『え？』

唐突に手で引きちぎったのだ。

確かに肉を手でちぎり鮮度を保つという方法はある。

しかし、容姿端麗である少女がいきなり肉を手で引きちぎるという中々にアンバランスな光景。

鶏が見れば間違いない逃げ出すであらう。

何気に引きちぎる時、快悦に浸っている表情が何とも生々しい。

『……アイリス、なんて恐ろしい子』

そう形容するしかなかった。

調理は、後から後から徐々に酷くなっていく一方だった。

器具を持てば取っ手を砕き、食材を持てば潰すかちぎる、調味料に至ってはキッチンの上にぶちまけられていた。

気がつけば3人は何かに憑依されており、フォローに定評のあるサクヤですらとめることはできなかった。

ちなみにシユラが女性陣の部屋の中で聞いた第一声は、この言葉である。

料理なんてレシピ通りにやればいい！

その言葉はどこで消えていったのだろうか。

何故か部屋の中には、化学実験でもしているのかという程に異常な胃臭が漂ってくる。

見ればアイリスとシエル、そしてアリサが形容しがたい物を鍋で煮込んでいた。

食べる事が好きなシユラでさえ、目を背けたくなるほどの姿である。サクヤは額に手を置いてため息をついている。

目を凝らして見れば3人の周りを黒いオーラの何かがうろついていた。

はつきり言つて、シユラの操る闇よりもかなり色が濃い。

ひよつとして料理の変貌はアレが関係しているのではなからうか？

『レイン……貴方だけよ。この毒に対する解毒薬を作れるのは』

『哀れな悪魔に魂の救済を』とシユラは呟きたくなった。

あまりやりたくはなかったが3人の顔を表情が見えるように移動してみる。

3人の表情は何かに取り憑かれているのでは、と錯覚させるほど近寄りがたいものだった。

だがあの様子では、幽霊どころかアラガミでさえ、まっしぐらだ。

現にアラガミであるシユラがそうなのだから間違いではない。

レインからの頼みで無かつたら、逃げ出している事は確実だ。

とくにあの鍋はもう二度と見たくない。

この世にある存在とは到底思えない。

『……この時ほどアラガミで良かったって思った事は無いわね』

そして驚いた事がもう一つ。

どうして、調理器具が全て破壊されているのか？

壊れたというレベルどころではない。

お玉は持ち手が粉々に砕け、フライ返しは先端がつぶれてスプーンが何かになっている。

包丁に至っては刃が途中で屈折しているといつていいだろう。そもそも柄しかついていない物もある。

唯一、無事なのが箸だけというのはどうだろうか？

そしてこしょうや塩が入っていたビンが砕けて見事、中身を散乱させていた。

それらが間違いなく料理に影響が出るクラスである事は想像に難くない。

「お姉さま、シチューが白いのって塩をかけてるからですか？」
「ああ、間違いない……多分な」

頭の痛くなる会話を繰り返す姉妹。

シユラはレインに同情しつつため息をついた。

『レシピを見なさいよ……』

最初の言葉はどこへ行った。

「……とりあえず、皆が待ってるからいくか」

レインはふう、と息をついて出来たシチューを集めてエントランスへと降りていく。

そして彼の中である教訓が出来た。

もう身内の女性に料理は作らせない。

ちなみに「カノンを呼べばよかったんじゃない？」などと言っ
てはい

けない。
ただ一つ、レインがゴッドイーターとして学んだ事は

女性ゴッドイーターにまともな人がいない。

この一言に尽きる。

補足

アナグラは無事だった。

ちなみに支部長が破壊された調理器具の値段に泡を吹きかけていたのは余談である。

『料理騒動』 アラガミの味は人間の味覚を超越するか！？（後書き）

……何か堅苦しくなるんですね、自分の文体って。

どうすればいいんだろう……。

そしてこの滑った感は、どこにしまえばいいのだろう。

何を思ったのか所々を修正。

本編まったく進まないなあ……。

第21話 その先に（前書き）

旅人はただ のために

第21話 その先に

愚者の空母。

今、クラウドが見下ろしている場所はそう呼ばれている。

かつてアラガミが現れる以前、人々の生活を支えていたと思われる橋は、大部分が破壊され、もう見る影も無い。

空を飛んでいたであろう空母は、うち捨てられておりアラガミ達の食事場所となっている。

その影響からこの場所では、旧世代の遺品が見つかる事が多々ある。クラウドが立っている場所は瓦礫の上。

そこから見ているのは一匹のアラガミ。

戦車と偶像が合体したような姿を持つアラガミ、クアトリガの墮天種である。

「……」

静かに弓を引き絞り、頭部の後ろにある箱型の物体 ミサイルポッド に狙いを定めた。

神経が極限まで研ぎ澄まされ、時間の流れが変わったような感じがする。

全てが静止した中で、自分だけが動けるような錯覚を覚える。

もう少しだけ、この間を楽しみたいと思う気持ちすら出てくる。

無論、そんな猶予は許されない。

「あの……」

後ろから掛けられた声に弦を緩めた。
聞き覚えのある声。

どれだけ心が煮えたぎっていても、すぐに落ち着くような優しい響き。

この声は間違いない。

彼女だ。

「何か御用でしょうか？」

振り向くと、そこにはアイリス・エルセイダが立っていた。恐らくだが任務で来たのだろう。

後ろには、ソーマ・コウタ・アリサの3人がいる。

それぞれから感じる雰囲気は、以前とは比べ物にならない。彼らもまた力を蓄えつつけているのだろう。

「御用って……。ここ危ないから避難した方がいいよ。俺たちもそこにいるアラガミと戦うんだし……」

「……お前、クラウドだな」

コウタの言葉にアリサが何かを言いかけたが、ソーマの台詞により周りが「えっ？」と表情を凍りつかせる。

「ええ、そうです。避難は必要ありませんよ。これがありますし」

手に持っている黒弓に目が行っている。

確かにゴッドイーター稼業でも弓を見かけることは少ない。

「弓……ですか」

「ところで、ソーマ。クラウドって……もしかしてあのクラウド？」

「……それ以外、誰がいる」

「すみません。クラウドって……」

四者四様の発言の中、クラウドはクアトリガに目を向ける。
まだこちらには気づいていない。

「ああ、そういえばアリサさんはロシアからで知りませんでしたね。クラウドさんはこの近くでは有名な方ですよ。神医と呼ばれるほど腕前を持っていて、この方に治療を受けた方はたちまち病気が治っていくという噂もあります。……ところで、何をなされてたんですか？」

「素材集めですよ。治療にはやはりお金が必要でして、こうやって時折、顔を出して素材回収をしています」

ソーマが神機を肩に担ぐとクラウドを見る。

目の前にいるのが本人かどうか見定めているのだろうか。

「アイリス、コイツの腕は俺が保証する。行くぞ」

「……はい。でも危険だと判断したらすぐに逃げてくださいね」

「はい。ありがとうございます」

4人のゴッドイーターがクアトリガの元へ向かっていく。作戦は立てていたらしく、それぞれがバラバラに散開していた。

クラウドは改めて息をつき、弦を引き絞る。

『……で、いつまで正体を隠すつもりなのかしら？』

遠くで瓦礫の残骸の鉄片に腰掛けていたシユラはクラウドの隣に降りてくる。

ソーマが感知していなかったのは、離れていたのとクアトリガがすぐ近くにいたからだろう。

「……何、近いうちに分かる。少なくとも、今はまだその時じゃない

い」

視界の真ん中でクアトリガと彼らが交戦し始めたのを確認し、クラウドは矢を放つ。

それは見事、ミサイルポッドを直撃しクアトリガを怯ませていた。

『その時……ね。これ以上時間掛けたら、正体を現した時にボコボコにされるかも知れないわよ』

「……そうならない事を祈ってくれ。俺には、まだやる事がある。それに彼女達に迷惑を掛けたくない」

『自分に嘘ついてもいい事なんか無いと思うけど？』

再び、クラウドは矢を弦に掛けて引き絞る。

僅かな手ブレは抑えつつ、狙いをすます。

「自分を騙すことには慣れてる」

『……分からず屋』

矢をもう一度同じ場所に放つ。

ミサイルポッドが結合崩壊を起こし、クアトリガが大きく怯んだ。

「本当に悪いけど……もう少しだけ、少しだけでいいから付き合ってくれ、シユラ」

『……何言ってるのよ。私は貴方の相棒なんだから、それに付き合うのは当然でしょう。……でもたまには、貴方の事を心配してる身にもなりなさい、フユート』

「……ああ、ありがとう。ユア」

弦によって威力を得た矢はクアトリガの顔面に命中した。そして、クアトリガは、断末魔と共に動きを止めた。

「今回は本当にありがとうございました。また一緒にできたらいいですね」

「はい。ではこれにて」

第1部隊と別れた後、クラウドはエイジス島を見る。
その島に向けて手をかざした。

「……もうすぐか」

アーク計画が実行される日は、近い。

『クラウド・1』

愚者の空母にて、接触。

黒い弓を使用しており、どうやってアラガミを討伐しているのか、未だ不明。

腕前は、ベテランのゴッドイーターにも勝る。

特徴は、仮面に真紅のコート。

再度、接触した時には勧誘を試みることに。

あちこちで素材集めをしているため、接触は多くなる見通し。

第22話 二つの仇（前書き）

ただ思いを晴らすために

第22話 二つの仇

リンドウと交戦したと思われるアラガミが確認された。

その情報が極東支部に通達された瞬間、内部の動きが即座に変化した。

アラガミの特定、特徴、能力、属性、種類……様々な情報を回していく。

出撃メンバーに選ばれたのは、シエル・アイリス・アリサ・サクヤの4人。

それぞれは静かに闘志を煮えたぎらせていた。

「……いよいよ、来ましたね」

「ええ、これではつきりするわ。彼が生きているのかどうか……」

「皆さん……頑張りましょう」

アリサにも十分トラウマの筈だ。

リンドウと交戦したアラガミは、彼女の両親を殺したアラガミと同じ種族でもある。

言わば、因縁の相手だ。

この戦いは、彼女にとってかなり重要な戦いとなる。

これ乗り越えなければ明日の景色を見る事は許されない。

「いきましよう」

アイリスの声で、全員がさらに気を引き締めた。

「あれが……ディアウス・ピター……帝王」

『ええ……今回のターゲットよ』

通信機の声からサクヤの声が聞こえた。

4人は、それぞれ市街地の隙間に隠れて、任務の対象であるアラガミ、ディアウス・ピターを見ていた。

ベテランのゴツドイーターでも苦戦すると言われ、ゴツドイーターの天敵でもある。

このアラガミによって命を落としたゴツドイーターは数知れない。

アイリスは息を潜めて、通信機に声を掛ける。

「まずは私から奇襲を掛けます。それと同時にサクヤさんは援護を、アリサさんとお姉様は背後から強襲してください。その後は各自判断で行動を……あれ……」

『どうかしたか？』

「あのアラガミ……弱ってませんか？」

注意深く見てみると、頭部と前足とマントが綺麗に破壊されている。その上、外見からは余り判断がつかないが、他のアラガミに比べて歩く速度が弱々しい。

それに気づくアイリスも中々凄いが……。

『……ホントですね。別のアラガミと交戦したのでしょうか？』

『手負いの獅子ほど恐ろしいモノは無いって言うわ。弱ってるからって気を抜いちゃダメよ』

「……はい」

何にせよ、相手はアラガミだ。

弱ってるからといって油断するほど自分も馬鹿ではない。

アイリスは再び、神機を握り帝王の名を冠するアラガミへと突撃していった。

「……疲れた」

『それは疲れるでしょう。だってディアウス・ピターに白兵戦で挑むなんて貴方みたいな馬鹿以外信じられないわよ』

ベッドの上でうな垂れているクラウドにシユラは、ため息をついた。今日もやはり素材集めだった。

しかし場所が場所であるが故に、アラガミとの遭遇は当たり前だ。本来ならば逃げるのが正しいが、クラウドは弓があるため、その場で撃退か討伐する。

ただ、今回は何故かクラウドが弓をしまつて、拾ったばかりの刀で単身突撃したのだ。かなりの名刀である。

常識どおりであるのなら、アラガミにはオラクル細胞が付加された攻撃以外通用しない。

ところが。クラウドはオラクル細胞を武器や道具に付加させる事が出来るため、そのアラガミと渡り合い、見事撃退したのだ。ちなみに途中から刀を捨てて無手で挑んでいた。これはただの馬鹿でしかない。

「たまには接近戦もしないと腕がなまるしな……それに」
『フュート、ちょっとそこに正座しなさい』

目が笑っていない笑顔で地面を指差すシュラ。
しかもフュートと呼んでいる事は、本当に怒っている。

逆らったら死ぬ。

そんな事が頭の中に浮かんできたので彼女の言うとおり、正座する。

『……フュート、右腕を見せて』

「……問題ないよ。別に痛んでいるわけでも」

『黙りなさい』

「……」

怒っている、これほどまでにないくらい怒っている。

ちなみにシュラという名前は、インドの戦神である修羅からとっているのだが、今の彼女を見ると改めて納得できる。

仕方なく、上着を脱いで、右腕の裾を捲くり、腕全体が見えるようにする。

右腕に刻まれているのは、何かの線だった。

それは傷。

あの雨の夜、膨大すぎる力に体がついていけず、一部を犠牲にした結果変貌したのが右目と右腕の二つだ。

右目には、まぶたの中心を垂直に貫くようにして傷跡が走っている。それはあまりにも生々しく、ついさっき出来たようにも見えた。

そして右腕は、今は白くなっていて見え辛いが、線が肩から螺旋状に刻まれており手首のところで消えている。

これもまた、彼が間違いである理想を信じたがために犠牲にしたものの。

『……馬鹿』

「……返す言葉もないよ。早く気づいていればよかったんだ。僕の求めた理想なんて、ただの絵空事だった。……気づけていれば、もっと早く……」

『違う。私が言っているのはその事じゃないわ。貴方はほとんどを一人で戦っている。それはあの頃と何も変わらないじゃないの。……本当、いつも方向音痴よね。貴方』

シユラはため息をついた。

考えてみれば、いつも彼女に心配を掛けているような気がする。本当に、自分はその頃と何も変わっていない。

「ごめん、ユア……。でも、あと少しでようやく終わる。長すぎた夢も、間違えた理想も、愚かな決意も……。あと少しで終わるから」
『……アラガミじゃなかったら今頃、心配すぎてノイローゼになってるわよ、私』

「……ノイローゼの薬は無かったな」

もうすぐ、もうすぐでようやく終わる。
あの頃に求めた、愚者だった時代のユメから……。ようやく目覚める事が出来る。

「せいっ!」

アイリスの一撃が帝王の顔を抉る。

続けて繰り出されたアリサの一撃がその足を破壊した。

「あと少しよ!」

「食らえっ！」

サクヤの回復弾が体の傷と疲れを癒す。

シエルが振り下ろす一撃が正確に、そして強烈な一撃が帝王の眼に傷を作る。

そうして帝王は人間に出せないような断末魔を上げて倒れていった。

「これで完了……ですね」

「ええ……」

全員がディアウス・ピターの死骸を見つめる。

この中にリンドウの遺品が残っているかもしれないのだ。

全員の中で一つ、疑問が生まれていた。

全ての場所が結合崩壊を起こしており、新米のゴッドイーターでも何とか倒せるくらいまで弱体化している。

誰かがこの帝王と交戦したとは思えない。

問題は、誰がこのアラガミを瀕死寸前まで追い詰めたかという事。もし弱っていないければさらに苦戦を強いられていたかもしれない。

「皆、神機を見つけたら触れるだけだ。使おう何て思ったなら神機に体を喰われるぞ」

シエルの言葉に全員が頷く。

死骸を調べ始めてから数分、リンドウの腕輪と神機が出てきた。

「……アタリです」

「ああ……リンドウ……」

サクヤはその場に泣き崩れる。

今、彼女たちの中でリンドウの死が確定した。

「……っ！　まだ腕輪が……」
「何？」

アイリスが奥を探すとそこにあったのは、ゴッドイーター達がつけている腕輪。

そういえば一人のゴッドイーターが指名手配され極東支部から行方不明になった。

その人物の名前が頭の中に浮かぶ。

「嘘……」

アイリスは膝を落とした。

神機を持つ手に力が入らず、神機が地面に落ちた。
泣かないと決めていたはずなのに涙が溢れてくる。

「レイン……さん……」

腕輪はゴッドイーターにとっての命、それをなくしたのならば例外を除いて生きていられるはずが無い。

心のどこかでは生きていると信じていた。
だが思わぬ形で予想は覆される。

「……馬鹿が……」

シエルはそう毒づいた。

何故、守れないのだ。

何故、こんなに自分は無力なのだ。

何故、仲間を救えないのか。

この日、極東支部では二人のゴツドイターが戦死として認定され、そのうちの一人は英雄として、そのうちの一人は証拠が見つからなかった事から犯罪者として扱われた。

『レイン・3』

第1部隊が交戦したアラガミの中から彼の腕輪が発見された事により、死亡は確実。

どのようにして、リンドウを殺害したアラガミと交戦したのかは不明。

神機は、見つからなかったため、どこかで紛失したと思われる。貴重なサンプルのため、見つけ次第迅速に確保する事。

第23話 英断（前書き）

場面は進む

ただ逆らう事もせず、ただ刻々と進む

第23話 英断

「……………」

クラウドは自室に備え付けてあったターミナルに目を通す。
このターミナルはヴェンター特製で本家よりも数倍の高性能という
反則ぶりである。

その中ではクラウドは一人のゴッドイーターを閲覧していた。

『あらあら、あのディアウス・ピター討伐されたみたいね』

「……………まさかりンドウさんと交戦した個体だったとは……………悪運とし
か言いようが無いな」

『ええ、どこその赤い正義の味方もびつくりの運勢よ』

「言うておくが俺はその英霊を尊敬してるからな」

『もしかして、クラウドの時弓を扱っている原因って……………』

「……………ああ、そんな子供っぽい理由だよ。双剣は……………まあやろうと
思えば出来るが」

『……………ぷっ、あはははっ』

シユラが予想通り爆笑している。

そんな光景に頭を痛くしながらクラウドは息をついた。

それから数分、ようやく笑いが収まったシユラは、その笑みをしま
つていない。

『それと、あの支部長は黙らせておいた方が良かったかしら?』

「……………やめてくれ」

『冗談よ。……………そろそろあの子も特異点としての本能が目覚め始め

る。榊博士に頑張ってもらわなくちゃいけないけど』

クラウドはふとホログラムで作り出された窓の風景を眺める。
今、この時極東支部はどうしているのだろうか。
何にせよ、まもなくアーク計画が始動する。
ならば自分にできる事をするだけだ。

そしてこの戦いでやっとあの時の決意が終わる。

「今回集まってもらったのは、私個人の要望だ。理由は赤裸々に言
おう。アーク計画に賛同するかしないかだ。みんなの意見を聞かせ
てもらいたい」

シエルの言葉に場所が静まり返る。

極東支部のゴッドイーター。ただし、選択権を与えられた者だけだ
が、エントランスに集まっていた。

研究者たちも作業をしながら、しきりに横目で見たりしている。
彼らの選択で自分たちの行く先が決まる。

ただ、それだけのこと。

その中、ロイドが口を開く。

「俺は賛同しない」

その言葉に周りがロイドを見る。

シエルは表情一つ動かさず視線で理由を問う。

「俺はエルセイダとして人々を守りたい。それがゴッドイーターに

なった理由なんだ。だからその理由をいまさら無かったことに出来ない」

ロイドの言葉に多少空気が緩んだのかタツミがロイドと肩を組む。

「俺は乗り物酔いしやすいから、船なんて乗れないんだよ。だから参加しろって言われても絶対やだね」

「……変わり者だな。お前たちは」

シエルは微笑む。

その雰囲気には先ほどのまでのピリピリとした感じは一切無い。

「わ、私は……やっぱり残ります。皆さんの足を引っ張りたくないですし……、怖いですけど……人々を置いてけぼりにして後悔するより、私はいいです」

第2部隊はブレンダンを除いてほとんどの者が残ることを選んだ。ただ誰もブレンダンを責めない。

死ぬことを恐れない人間がいるはずがないのだから。

第3部隊はジーナを除いて全員が賛同した。

問題は第1部隊の意見だろう。

彼らの選択次第でこれからの極東支部が大きく変わる。

「私から行こう。私は残る」

シエルの言葉に下から聞いていた職員たちのざわめきが聞こえる。聞こえる声は、喜びと期待を抑えきれないものばかりだ。

「戦友から託された物がある。それだけだ。これ以上の理由なんて私の中には存在しない」

「私もお姉様と同じ意見です。数々の人たちが犠牲になってこの世界は出来ています。それを無かったことにするというのは、私には出来ません」

シエルとアイリスが残ることを選び、これでエルセイダ家が全員アーク計画に賛同しない事となる。

それは残ることを選んだ者達にとっては強い希望となっていた。

サクヤとアリサはやはり残ることを選び、ソーマの無言は、残ることと受け取ってもいいだろう。

エリックも残ることを選んでくれた。

ただ一人、コウタが賛同することを選んだ。

自分には家族がいる。

その家族を救うためなら自分は賛同すると。

どの部隊からもう一人以上がアーク計画に賛同するという結論にいたり、アナグラの空気はさらに厳しくなっていた。

しかし、一人として賛同者を責める事はできない。

個人の道を選ぶのは、何であろうと、その人自身であるからだ。

「美しい……」

ロレントはエイジス島の地下施設で目の前にある巨大なアラガミに見とれていた。

そのアラガミは巨大なカプセルに入れられており姿は狼の形をしている。

言葉にするならフェンリル。

それほどふさわしい言葉などあるはずがない。

隣には大車ダイゴが立っていた。

「調整も完了しました。これから24時間、いつでも使えます」

「……見事だ、大車。エルセイダの名を持ち、賞賛しよう」

「ありがたい事です」

ロレントは再び目の前のアラガミを見る。

その表情は、どこか冷静さを保っているが、抑えきれない興奮がにじみ出ている。

「死神……。アルダノーヴァとは比べ物にならない力を持ったアラ

ガミ……。これでようやく、人類の選別が始まる」

「ええ、ロレント様の思うとおり、これで全人類から選ばれた者だけ生きられる世界を作りましょう。真の才能を持つ者だけが作る、最高の世界を……」

「ああ、無能が安眠できるのは今夜限りだ」

二人は笑う。

ただひたすら、自身の望む未来が開けたことに。
その光景をただ、夜空に浮かぶ月が見つめていた。

審判の日は、まもなく訪れる。

ある者は何気ない日常を過ごし、ある者は一日一日を大切に過ごし、ある者はその運命を覆そうとする。

無論、その審判に気づかぬ者は多い。

数々の思惑や信念が交差する。

そして審判の日

長過ぎた銀色の戦士の戦いは、
ようやく終わりを迎える。

第23話 英断（後書き）

次は、アルダノーヴァに行く可能性が高いです。
後、ストックの残りがマズイ事に……。
更新頻度は低下していくかも……。

第24話 謀略（前書き）

そうして戦士は目覚める

第24話 謀略

「旦那、アーク計画が完全に起動したぜ」

「そう……シオ……」

『……』

ヴェンターがにやりと笑ってフュートとシュラに話しかける。

フュートは神機を握って接続を確認し問題なく使えることを把握する。

「状況は？」

「現在、第1部隊は、ほとんどがアルダノーヴァと交戦中、アーク計画非賛同者は外部居住区を守り抜いてる。ここから何人か出すか？」

「いや、いい。返って混乱する。アルダノーヴァの撃破が確認できたらシュラ、エイジスへお願いできる？」

『ええ、私を誰だと思っているの？』

「……それもそうだね。ところでロレントの動きは……」

「現在、エイジスにて交戦状態を眺めてる。大車も同じ場所にいるな。そしてロレントは今、人工アラガミを手に行っている」

人工アラガミ。

一見すると何か想像し難いが、ろくなものじゃないという事だけは分かる。

「やっぱり、あの人なら絶対にそうする」

『おそらくノヴァも制御下にあるはずよ。もし人工アラガミと戦うつもりなら私がノヴァを抑えておく』

「……シュラ」

『何？』

「……間違つてエイジス島ごとく喰べないようにね……」

そっぽを向いて口笛を吹く　やはり今回も空気が漏れる音だけだったが　シユラに、フૂートは苦笑するしかなかった。

「っ！」

「大丈夫！？」

「はい！」

アイリスはすぐに床を転がり、自分を貫こうとした光の束をギリギリで回避する。

こんな所で倒れている暇などない。

シエルとソーマは、アルダノーヴァを挟み撃ちにし天輪を攻撃する。アリサが捕食した時に得たアラガミパレット「トールレントノヴァ」を撃ちだす。

光のレーザーが女神の後ろに立っていた男神を貫く。

続けてサクヤとコウタの撃ち出したパレットが男神を直撃した。

女神が四つん這いになりシエルとソーマの猛攻から脱出し、お返しとばかりに髪と思わしき部位から光の刃を飛ばす。

「ぐっ！」

シエルは装甲を展開させ、受け止めた。

旧型の剣形態を長年使っている経験からか、ソーマは刃を交わし、再び女神目掛けて突撃する。

絶対にここで負けるわけにはいかないのだ。

今まで死んで行った者達のためにも。

この世界を築き上げてきた過去の人達のためにも。

「当たれっ！」

アイリスの撃ち出したパレットが男神の活動を停止させる。

シエルの一撃が女神を怯ませ、大きな隙が出来た。

ソーマが力を最大限に溜めて女神に向けて振り下ろす。

「終わりだ……！」

この一撃でアルダノーヴァは活動を止めた。

「くっ……馬鹿な……この、私が……」

アルダノーヴァが再起するがうまく動かせていない。

その場にいた全員は戦いの疲労が残りつつも奮い立たせ神機を手に、構える。

「人の業からも目を背ける、こんな愚か者どもに、敗れるなど……」

その言葉と共にアルダノーヴァが完全に崩れ落ちる。

しかし終末捕食を始めたノヴァは動き始めた。

「はぁ、はぁ、畜生、あのデカブツ……止まらないよ！」

「一体、どうしたら……！？」

この間もノヴァは動き続ける。

揺れ動く地面がさらに焦りを引き出そうとしていた。

「あきらめないで！ きつと何か……何か方法があるはずよ！」

「ふ……ふふ……無駄だ。覚醒したノヴァは……止まらない……」

アルダノーヴァから声が出されたことから神機を構える。

しかし動き出すことはなく、ただ淡々と支部長の声が聞こえていた。

「この私が珍しく断言する……不可能です……」

榊からさらに絶望的な一言が加わる。

シエルは唇を噛んだ。

「何とかならねえのか博士！」

「残念だが支部長の言った通りだよ。あふれだした泉は……ノヴァが止まることは……ない」

榊は淡々と、ただ言葉を放つ。

その声色に希望は無い。

「アラガミの行きつく先、星の再生……やはりこのシステムに抗うことはできないようだ……」

「ふざけるな！ そんな事……認めねえぞ！」

「……そう、それでいいのだ。ソーマ、お前たちは……早く……箱舟に……」

アイリスは神機を地面に向け、ヨハネスの声を出しているアルダノーヴァに近づく。

その目は厳しさを醸し出していた。

「やはり、支部長……貴方は……」

「さすがはエルセイダ……。そうだ。元より舟に私の席など……ない」

ヨハネスに恐れという感情は一つも見当たらない。
それほど覚悟の強さがよく分かった。

「ふふ……世界にこれだけの犠牲を強いた私だ。次の世界を見る資格など……ない。後はお前たちの……仕事だ……。……適任だろう？」

シエルは息をついた。

もう、ヨハネスが助かるはずは無い。

それなのにこの男は希望を託そうとしている。
自身が成し遂げる事が出来なかった理想へ。

すでに絶望が全員を支配しようとしていた時。シオの体から棘の様な物が生え彼女を包み込む。

「シオ！」

そしてアルダノーヴァの女神を逆さまにしたような物の光が消えた。
それと同時に揺れが収まる。
事態を把握できずに周りを見渡した。

「ありがとね」

「え？」

少女の声が空から聞こえる。

「みんな、ありがと」

いつも無邪気で家族のようだった少女の声。

「これは……」

「シオ……なのか？」

「まさか……ノヴァの特異点となっても、人の意識が残っているなんて……」

女神の像が空へと登っていく。

呆気にとられており、まだ目の前で起きていることしか言っ事が出来なかった。

「だんだん……上昇している？」

「シオ……お前……？」

「おそらのむこう」

満月が見える。

夜の空にぼつかりと穴が空いたような金色の月。

「あの　まあるいの」

「えへへ　あっちのほうが　おもちみたいで　おいしそうだから」

悪戯に成功したような少女の笑い声。

しかし少女のしょうとしてゐる事は嫌でも分かった。

「まさか……ノヴァごと……月へ持っていくつもりか！」

「わかるよ。いまなら　わかるよ。みんなに　おしえてもらった。ほんとうのにんげんのかたち」

「シオ……」

ソーマは少女の名を呟く。

人とアラガミ、自分と同じ、種族の境界で迷い込んだ者。今、彼は何を思っているのだろうか。

「たべることも だれかのために いきることも だれかのために しぬことも だれかを ゆるすことも それが どんなかたちを してても…… みんな だれかとつながってる」

彼女の言葉、それはこの世界全てを比喻した物。日常生活での行動、それらは全て、一つの世界の中で繋がっている。つながりとは一つの循環。

その中で生きているという事は、誰かと共に生きているということ。それが生きるという中で彼女の出した答え。

「シオも みんなといたいから だから きょうは さよならするね みんなのかたち すきだから えらい？」

最後に悪戯じみたことを聞く。

それは本当に人の子供のようだった。

ノヴァがどんどん空へと昇っていく。

「もう いかなきゃ。だから おきにいりだっただけだ。そこのおわかれしたからない じぶんの かたちを たべて」

言っている事は無茶苦茶だ。

だけどそれが彼女の出した答え。

それを否定する事は、この場にいる誰にも出来ない。

「ソーマ おいしくなかったら ごめん」

「一人で勝手に、決めやがって……」

「だけど おねがい」

「はなれてても いっしょだから」

少女の言葉を聞いてソーマはそこかたちの元へ歩き出し、彼女を捕喰した。

その瞬間、全員の頭の中に不愉快なノイズが響く。

そしてソーマが崩れ落ちた。

「がっ……!!」

「ソーマ!」

拍手の音が聞こえる。

気がつけばロレント・エルセイダが歩いていた。

周りには新型神機部隊が数人、アナグラの者達を囲んでいる。
アサソール

ロレントは、もう動かないアルダノーヴァを見つめる。

「ヨハネス……やはりお前ではダメだ。人類の歴史は人類が変えねばならない」

そうしてロレントは、第1部隊の面々を見下ろした。

「今から人類の選別を開始する」

第24話 謀略（後書き）

ストックが……3つ……だと……。

第25話 乱入（前書き）

願いは終極へと向かう

第25話 乱入

アイリスとシエル、二人はうろたえるより先に父に向けて言葉を飛ばした。

「お父様……何をなさっているのですか」

「ノヴァ。アラガミが出した生きるという答え……なるほど、つながっているか」

ロレントはアイリスの言葉に耳を貸していなかった。その事がシエルの苛立ちを増幅させる。

「素晴らしいな、アラガミ。人間に飼い殺された拳句の答え。それがつながり……愚問だな」

「てめえ！」

ソーマは神機を構えるとロレント目掛けて振り下ろす。その一刀を新型神機部隊の一人で受け止めた。バイザー越しに見える目は、完全に機械の目。それに躊躇や情けなど込められていない。

「じつとしている」

再びソーマの中に不鮮明なノイズが響き、彼は悶える。自身の頭の中をかき混ぜられているような不愉快な感触と激痛。その二つがソーマを襲う。

「ぐうっ！」

「……ロレント・エルセイダ。こんな事をして何が目的なんだい？」

榊の声には怒りが込められていた。

普段は温和な彼がここまで怒りを露わにさせるほどの行為。それを改めて認識させられる。

「決まっている。今から人類の再選択をするのだ。現にノヴァは私の制御下に置かれている」

ロレントが手を出すと触手の一つが彼を守るかのように動く。

ノヴァを制御下に置いた。

それはつまりシオの意思が消えたということ。

ソーマはノイズに耐えてロレントを睨みつける。

「では、アルダノーヴァを越える存在をお見せしよう。あのような不完全ではなく、さらに洗練された完全かつ完璧な存在を！」

ノヴァの触手を足場にして、一匹のアラガミが姿を現す。

それはまるで狼だった。

いや、狼なのだろう。

姿だけならフェンリルと呼んだ方がしっくり来る。

その狼はアルダノーヴァを捕喰した。

途端に感じる重圧がさらに跳ね上がった。

この力なら死神を名乗った方がいい。

この力は生物が持っていない力ではない。

「こいつの名前はタナトス。生と死を司る神、コイツ相手にどれほど生きていられるか試させてもらうよ。何、榊博士には手は出さない。これはちよつと特殊なんだ」

聞き覚えのある声が聞こえ振り向くとそこにいたのは大車ダイゴだ

った。

「大車！」

「久しぶりだねえ、アリサ。話をしたいところなんだけど、あの人からの命令でさっさとやれって言われてるんだ。……やれ、タナトス」

タナトスが振り下ろす爪を全員　すでに榊博士は退避していた　が回避する。

その一撃でエイジスの床が抉れた。

「あんなの、もらったら……」

考えたくも無い。

もしガードしていれば丸ごと叩き潰されていただろう。

サクヤがレーザーパレットを放つが反射し、サクヤの方に跳ね返る。

「嘘っ!？」

シエルが素早く懐に潜り込み、タナトスの腹に一撃を与える。

しかし斬った感触が無い。

いや違う。

神機が無効化されているのだ。

「……まずいぞ。あのアラガミ、神機が効かない……!!」
「何!？」

「へえ、よく気づいたじゃないか、隊長。さすがはエルセイダだね。こいつに神機はほとんど効かない。通用したとしてもそれは攻撃のタイミングのほんの一瞬だけ。しかも体はボルグ・カムランの盾を利用してゐるからそう簡単にダメージは通らない」

シエルは何とか脱出しようとするが隙が見つからず、攻撃の隙間を利用して無傷で切り抜けるのが精一杯だった。

黒の長髪が一本一本斬られて行く。

「きゃっ！」

「アイリス！」

アイリスがノヴァの触手に絡めとられる。

コウタがパレットを撃つがほとんど効いていない。

神機が通用しない大型のアラガミ、エイジスを覆い尽くしているノヴァの触手。

最早、全滅は時間の問題だ。

第1部隊が絶望の色を示し

ロレントや大車、新型神機部隊が笑みを浮かべたとき、

突然、ノヴァの触手が破壊され、アイリスが解放される。

タナトスに黒の鎖が巻きつけられ、シエルが咄嗟に距離をとる。

「な、何だ！」

「……闇？」

エイジスの中央に闇が一つの渦となり中心にか集合していく。

そして渦が消えて闇の集合体だけとなると闇が消えていき、中から二人の人物が現れる。

「……シユラ、いきなり戦場の中に飛ばされるなんて聞いてないぞ」

「あら、間違えちゃったみたい」

頭を押さえ呆れた表情を浮かべる銀髪の青年に、楽しそうな笑みを

浮かべる銀色の少女。

銀の戦士、二人の乱入により状況は激変していく。

第25話 乱入（後書き）

何を思っていたのかストック分を完成品だけ全て投下します。

……アレ？ 大丈夫だよね？

第26話 銀の戦士

「シユラ、だからアレほど丁寧にしてってくれて……」

『コーボーにも筆の誤りってことわざ、知ってるかしら？』

「……何か違う気がするぞ」

レインは大きくため息をついた。

そして隣ではシユラが楽しそうに笑っている。

「レ、レインさん？」

レインは神機を持ち、ロレントに向ける。

いつもと変わらぬ姿。

右腕に腕輪が無いことを除けばだが。

「……腕輪がないだと？ 貴様、アラガミ化したか」

「あー……まあ、後で分かる」

『とりあえず貴方たちは邪魔ね』

シユラが手を動かすと闇が新型神機部隊を飲み込んでいく。

悲鳴や苦悶の声があちらこちらから上がった。

タナトスは闇の鎖に縛られており、動けない。

それほどまでに彼女の力は強いのだ。

『ねえ、レイン。やっちゃっていいかしら？』

「……無力化しといてくれ」

『分かった。それじゃあいただきますわ』

闇の中から何かが碎かれる音が聞こえる。

そして、闇が鎖に変化し新型神機部隊の隊員たちを捕縛した。その手にさきほどまでの神機は握られていない。

「闇……お前は何をした？」

『ふふっ、初めましてね。私はシュラ、レインに追従しているアラガミよ』

全員に驚愕の表情が浮かぶ。

なんとなく予想は出来ていたが、ここまでオーバーだとは思わなかった。

「……ま、詳しい事は帰ってからか。という訳でとつとこのエセ死^{タナ}トス神仕留めるか」

『レイン、貴方その意味理解してる？』

「ああ、ばっちりだ」

『……じゃあ、あの人たちは私が守っておくから手抜き無しでやりなさい』

「……分かってる」

シュラは第1部隊の近くに立ち、彼らを守るようにして闇を展開した。

ソーマはシュラを見るとある少女の名前を呟く。

「シオ……？」

『いえ、私はシオじゃない。でも似たような者ね。あの子の面倒見てくれたのは貴方たちでしょ？ 本当にありがとう』

「……レインさんは何者なんですか」

アイリスがシュラに尋ねる。

無理もない。

彼に出会ってからずっとずっと悩み続けてきた答えなのだ。

その答えが今ようやく分かる。

『それは貴方たちが一番よく知っているはずよ。アイリス・エルセイダにシエル・エルセイダ』

「えっ？」

「何？」

見れば、レインは神機を地面に突き刺し、眼帯を取っていた。

右目の傷がはつきりと見え、瞳の色もくつきりと分かる。

「な、何だ。あの色……」

「……シュラと言ったね。聞きたい事があるんだけどいいかな？」

『ええ、どうぞ。榊博士』

「レイン君はアラガミ化しているのか、そしてどうして君は彼の傍にいいのか。興味をそえられるのはいくらでもあるけど、今は知りたいことだけ、聞かせてもらったよ」

『意地が悪いわね、貴方……。一つ目だけど答えはイエスよ。彼はすでにアラガミ化しているわ。それも数年前から。そして二つ目だけど、答えは簡単。私たちはもう切っても切れない関係だからよ』

「……余計に疑問が増えた気がするが」

『レインの正体はすぐに分かるわ、ほら』

見ると、レインの銀髪が黒へと染まっていき顔つきまで変わりはじめていた。

右腕には銀色の大剣が握られている。

そして彼女は、大剣をアラガミに向けているその者の名前を呼んだ。

「…………お兄様？」

「何だかいいところ取りみたいで申し訳ないな」

自嘲気味に笑みを浮かべる。

シユラが第1部隊の近くにいる事を知り、レインは息を整える。

右目の眼帯を外し、自分の右腕を想像して力の引き金を見つける。

露わになった右腕に光が走り、銀色の大剣が具現化した。

その柄を握り、自身の髪の色が黒へと変化する。

レインという名の擬態^{かめん}を解除していき、彼は大剣の先をタナトスに向けた。

「…………お兄様？」

アイリスの声が聞こえる。

フュートは彼女に振り向いて、ニツと微笑んだ。

「ただいま」

お疲れ様（前書き）

そうして、新たな道が開く。

お疲れ様

少年は、今までの旅路を思い返す。

今までの道を振り返ってみれば身勝手な事ばかりしていた。

自分のせいで多くの者が不幸になってしまった。

守るために歩いていたはずなのに

いつの間にか変わっていた。

殺す事が目的になってしまっていた。

改心させる事が出来たかもしれないというのに。

自分さえかわらなければ生きていたはずの者が大勢いたはずだ。

己の行動のせいで大切な、そして身近にいてくれた人。

全てを傷つけ、不幸にしてしまった。

生きている先に幸せが待っている

そう信じて戦ってきた。

あの頃の思いはどこへ消えていったのだろうか。

少年は自嘲の笑みを浮かべた。

結局……自分は何がしたかったんだろうか？

荷物が次々と落ちていく。

拾っていても次々と落ちていく。

拾っても拾ってもキリが無い。

ただそれは、終わる事の無い繰り返しだったのかもしれない。

少年が再び笑みを浮かべようとした時、世界が変化した。

銀色だったはずの世界に、色が戻っていく。

本来の色が、自然が持っている色へと変化していく。

少年は自分が深緑の草原にいることを理解する。

荷物の重みも、足の疲れも、心の背負いも

全てがなくなっていた。

まるで許されたかのように、答えを得たかのように。

少年は止まって周りを見渡した。

いた

黄金の朝日が地平線らしきところから顔をのぞかせている。

その光を纏うようにして、少女が立っていた。

顔は、まだ逆光で見えない。

でも誰なのかははっきりとわかる。

こちらに向けて、手を振っていた。

それらを理解した時には、駆け足で少女のところへ向かっていた。

もう二度と手放さない。

もう二度と傷つけたりはしない。

少女の顔が見えた。

ああ、やっぱり君は

お帰り フュート

微笑みと共にその言葉を贈られた。

久しぶりに見る笑み。

どう返せばいいのか、そんな事は考えなくていい。

返す言葉は、この言葉以外ありえないのだから。

ただいま

彼女の名前を呼ぶ。

手を握り、そのぬくもりを確かめる。

少年と少女は笑いあう。

そうか、僕が守りたかったのは　　だっただ

遅すぎた答え。

だけど、もう間違わない。

今度こそ誓おう。

必ず守り抜くと

自分自身が傷つけてしまった彼女を

もう手放さないようにと。

色彩が取り戻されたこの世界で、少年は足を休める事が出来た。

しかし、彼の道はまだまだ続いていく。

次の道は、前より厳しく、辛い道のりになるかもしれない。

それでも

彼女がいてくれるなら

僕はどこまでも歩いていける

そうして

少年の長い孤独な旅は、ようやく終わりを告げた。

第27話 銀の英雄（前書き）

英雄は一人、孤独の果てを脱する

第27話 銀の英雄

青年の一言が止められた時を揺さぶらせた。

「ただいま」

ようやく現れたレインの正体。

それを知った者の反応は二つだった。

呆気にとられる者と震える者。

「なつ、馬鹿な！ お前は……」

「ええ、そうですよ。父さん。だから僕はエルセイダから消えたじゃないですか」

黒髪の青年は、狼狽しているロレントに対し、不適に微笑む。

その笑みが何を示しているのか、彼にはわからなかった。

青年は、アイリスの方を向くと困ったように頬を掻いた。

「お兄様……どうして……」

「ごめんね。アイリス、姉さん。理由は後で話す……だから」

フュートは優しげな表情でアイリスに微笑み、タナトスに大剣を向ける。

その覚悟に迷いは無い。

その背中に恐れは無い。

ただあるのは、自分自身の誇りのみ。

「今度は僕に守らせてくれ」

タナトスの爪がフットを断ち切らんと振り下ろされるが、大剣で受け止め、押し返して胴部をなぎ払う。

飛び上がり、体の軸を回転させ剣の腹で頭部を打ちつける。

着地と同時に走り出し、その勢いを力に上乘せさせ叩きつけた。

タナトスが苦悶の声を上げるがフットは容赦なく追撃し、タナトスを圧倒している。

その攻撃に、その動きに、その意思にあの頃の迷いはない。

振りぬかれた前脚に対し、大剣を衝突させて相殺する。

反発した勢いで体ごと回転させ、タナトスの頭部を切り裂く。

「お兄様……」

アイリスは、一方的にタナトスを追い詰めているフットを見ていた。

今、自分がどんな表情をしているのかはわからない。

「エルセイダにもう一人男子が？ いやでも戸籍には……」

「それは違います。榊博士」

シエルは出来る限り感情を殺しながら答える。

しかし、驚きを隠しきれていない。

普段ボーカーフェイスである彼女でさえ、動揺が見られる。

「エルセイダにはロイドが生まれる前に一人の男子がいました。それは私にとって弟であり、アイリスにとって兄でした。……弟の名前は、フット・エルセイダ。無能とされ家を追放され、存在を抹

消された……正真正銘、私の弟です」

「……なるほど、深いわけがありそうだね。今は追求しないでおくよ」

「ありがとうございます」

シエルは改めてフュートの動きを見る。

彼の動きは戦い続けた者だけに分かる動き。

死線を切り抜けて来た戦士だけが理解できる動き。

あの年でそこまで達するには、彼の人生に何かがあったとしか思えない。

人間をやめざるを得なかったほどの何かが。

「……」

横薙ぎに振るわれた爪を受け流し、反撃する。

もう目の前のアラガミは瀕死寸前だ。

このまま戦いを長引かせる事が最良の手段になるとは到底思えない。フュートは大剣に力を込めてタナトスの頭部にたたきつける。

その威力に、タナトスは一層大きな叫び声をあげた。

しかし彼は躊躇無く、さらに大剣を叩きつける。

鎌のように振り下ろされる前脚に対し、爪の間を縫うように回避する。

そして前脚ごと斬り捨てる。

さらに叫ぶ、タナトスに対しフュートは再び大剣を振り下ろす。

「……これで終わりだ」

その言葉の後、タナトスは断末魔の叫びを上げた。

アラガミの断末魔と共に、ロレントは自分の計画が全て潰れた事を悟った。

第27話 銀の英雄（後書き）

戦闘描写下手ですね……。
そして短い！

第28話 おわかれ（前書き）

さよなら

第28話 おわかれ

『……終わったみたいね』

「うん、後は……」

こちらを見下ろしているロレントと大車を見る。
大車は屍餅をついていたが彼は直立不動だった。
こればかりは、さすがとしか言いようが無い。

「なるほど……かつての無能が英知を手にしたか」

「……父さん、僕はもうエルセイダ家の者じゃない。それは貴方が一番よく分かっているはずだ」

「……だが。タナトスを倒した実力、それは認めざるを得まい」

フュートは表情一つ変えない。

その目に浮かんでいる感情は何なのか。
読み取ることはできない。

「しかし、お前は何故今更となつて戻ってきた？ その力を得たならばフェンリルに頼る必要もあるまい。私にはお前の行動が非常に理解し難い」

ロレントは怪訝そうに目を細め、フュートを値踏みするように問う。
確かにそうだ。

これほどの力を持っているなら頼る必要はない。
ごく単純な疑問だろう。

「僕が生きてきた中では、得たモノより落としてきたモノの方が遥かに多かった。そしてその落としてきた物のために力を振るう。僕

が戦う理由にそれ以上の事は要りません」

「……俺の目的もお前の目的も最終目的は変わらない。だがやはり意見は交わらないようだ」

ロレントは、ノヴァの触手を自身の傍に纏わり付かせる。

注視してみれば中々グロテスクな光景だ。

「……タナトスが倒された時点で人類の選別は不可能となった。故に俺が出来るのは悪あがきのみ。理由が消えた以上、俺がこの世界に生きている理由は無い」

フュートは、何も言わずかつての父親を見つめる。

「ヨハネス、今ならお前の気持ちも分かる。自らの息子が自身以上の力を持って自らと対峙する……。これほど嬉しい事はないな」

「……悲しいですよ、僕は」

今まで助け切れなかった者たちの顔が脳裏に浮かんでは消えていく。おそらくロレントもその一つに加わるのだろう。これもまた残酷な運命だった。

「しかしフュート、何故お前は俺の理想に逆らう？ かつての俺は力に溺れ、今の俺は人類の救世に飢えている。それはお前も同じはず。現にお前は、俺が渴望していた物を手にしている。求めていたモノは同じだ。人類の選別……それはアラガミから人々を救い出し、永劫の平和で世界を統治できる」

「違います。世界をたった一つの存在が統治するなど無理な話。命という名の鎖につながれ、それでもまだ理想を叫ぶというのなら、そんなくだらないモノに潰されて消えればいい」

ロレントの理想に対しフュートは真正面から反論する。
これもかつての彼では出来なかったことの一つ。

「なるほど、やはり俺とお前は分かり合えないらしい……。最後に聞く。フュート。お前は这个世界をどう思っている？」

フュートは訳が分からないという様子で首をかしげる。

「アラガミの出現以前、这个世界は根本から腐り果てていた。恐喝、強姦、強盗、殺人、汚職、暴行……。その行為に疑問を持つ者はいたが、行動を起こす者はいなかった」

ロレントはただフュートを見据える。

「アラガミが出現し、人類が危機へと追い込まれ互いに協力せねば生きていけぬ時代へと世界は姿を変える。そうなれば呉越同舟するのは当然の事。……。しかし人というのは、余程愚かだ。今の状況はどうだ？ アラガミを称え数々の犠牲者を出す狂信者、他の住居に乗り込み食料の強奪、住人の殺害、果てにはテロ……。挙げればキリがない。だからこそ、俺は这个世界がアラガミを生み出したのだと思っている。アラガミ……。それは这个世界の叫びだ。俺はその叫びを伝えるためだけに行動を起こした。フュート、お前は这个世界に
して何を思う？」

「……何も思ってませんよ」
「何？」

フュートの言葉にロレントは眉をひそめる。

「僕はただ歩き続けただけです。どうすれば、どうあれば、自身が望んでいたところへたどり着けるのか。その結果が今の僕ですよ」

その言葉には重みが込められていた。
とても言葉では表せない、強い思い。

「……解せないな」

「ええ、そうですね」

ロレントは踵を返して、月を見上げる。

「……フツ、今日は珍しい気分だ。自分の理想が潰えたというのに
気分がいい」

フュートは何も言わずロレントを見る。

「……お前は気づいていたようだな。フュート」

「当たり前です。これでも一応医者してますから」

「……なるほど」

二人の会話の意味、一部の者がその真意を理解する事が出来た。
榊はゆつくりと口を開く。

「ロレント……やはり凄いね、キミは。賛同は出来なかったけど、
さすがエルセイダとしか言えない」

「榊博士……どういう意味ですか」

「簡単な事だよ。シエル君。……ロレントは病を患っている」

その場のほとんどがロレントを見る。

彼はやれやれと言わんばかりに息をついた。

「何とかごまかせたと思ったのだが……。それすらも見透かされる

とは……」

ロレントは地形の淵で立ち止まる。
そしてフュート達の方を向いた。

「俺は今からあの少女の意思を復活させる。……言いたいことだけ述べさせてもらうぞ。口を挟む事は許さん」

誰一人、何も言わなかった。

彼の覚悟と決意を止める事はできない。

「シエル、エルセイダの当主はお前だ。二度と私のような者を生み出すな」

シエルは、ただ頷く。

「アイリス、自らが決めた事は最後までやり通せ。挫折する事だけはするな」

アイリスもシエルと同じく頷いた。

「フュート、どうやらお前は様々な苦悩を重ねてきたようだ。だがその苦悩から目を背けるな」

フュートは何も言わず、ただ頷く。

「……では行くとするか」

ロレントはそう言って奈落の底へと落ちていった。
死に際とその後の姿だけは誰にも見られなくなかったのだらう。

どこまでも悲しい人間だと、フュートは思う。

「おねえちゃん、おにいちゃん、きてくれたんだね」

シオの声が聞こえた。

そして全員が悟る。

もうあのロレント・エルセイダはこの世から去ったのだと。

『ええ、そうよ、シオ。……ほとんど時間は無いみたいだけど』
「ごめんね。でも、みんなとあえてうれしかった」

シオとの別れ。

彼女はノヴァごと、月へと持っていく。
その様子を、全員がただ見守っていた。

第28話 おわかれ（後書き）

ロレントが三流悪人みたいになってる……orz
最後、投げやりすぎるぞ自分……！

第29話 フュート・エルセイダ（前書き）

ただ、それだけで良かった。

どれだけ変人、奇人、偽善などと様々な暴言を吐かれようとも
どれだけ蹴られり、殴られたりしても

周りが笑顔でいてくれるなら

ただ、それだけで良かった。

それがどんなに自分を殺すという事だとしても
それだけが自分の生きがいだから。

第29話 フュート・エルセイダ

「……さて、どこから話そうかな」

教官室にて、フュートは極東支部に現役中のゴッドイーター全員、そして榊にリツカ、ツバキと、豪華人物ともいえる面々を前に椅子に座っていた。

無論、シユラも同席である。

「フュート君、今君が話せる範囲でいい。さすがに全部話せとはいわない」

榊がよく分からないような笑みを浮かべてフュートを見ている。狐を人間にしたら彼のようなものではないか？

「……じゃあまずは右目に付いて話しましょうか」

フュートは眼帯を取った。

右目の瞳が露わになり古傷が外気にさらされる。

その傷を見た人物の一部に表情が凍り付いている者がいる。

「なっ……！？」

「なるほど……。ついでにただの目じゃ無さそうだね」

「ええ、コレは一種のセンサーです。まだ完全にはわかりきっていませんが、自身を中心とする数百メートル範囲内のアラガミを自動的に探知、補足、解析します」

榊以外は目を開いていた。

彼は、おもしろそうな表情を浮かべフュートを見る。

寒気を感じたのは、勘違いではないはずだ。

「ほお！ それは凄い……。ところでその右目は何時からなんだい？」

「……その事なら昔話をする必要はありますね。かなり長くなるけど聞きますか？」

「君が話してもいいのなら構わないよ」

「それでは遠慮なく……」

フュートは軽く目を閉じてあの時の夜を思い出す。

アレは、僕が追放された当日の夜でした。

少年はひたすら走っていた。

着ている布が汗を吸い取ってくびれて始めている。

靴は履いているが、その役割をほとんど果たしていない。

すでに太陽は沈んでおり、恍惚な黒が空を占めていた。

ハア……ハア……ハア……ハア……。

すでに息も絶え絶えで、肺が悲鳴を上げている。

だが走らなければ、そうしなければ自分が消えてしまいそんな焦燥感に少年は駆られていた。

不注意だったためか、何も無いはずの地面でこけてしまった。

すぐに立ち上がろうとするが、足が言うことを聞かず、ただ悲鳴だけを上げている。

自分はこのまま無様に死んでいくのだろうか。

ひんやりと冷たい空気が、死の感触を生み出してくる。

目を閉じよう。

そう思った矢先だった。

大丈夫？

少年は自分に掛けられた声に顔を上げる。

目の前にいたのは一人の少女。

砂塵にまみれた肌色の服を着ていた。

所々が薄汚れているが、それでも少女は独特な美しさを持っていた。

君は？

ユア、貴方は？

……フュート。

そう……よろしくね、フュート。

それが僕と彼女の初めての出会いです。その後、僕は彼女と数ヶ月行動を共にしていました。家族のことを気に掛けながらも、彼女と共に生きられることに満足していた頃……ある事件がおきました。僕がレインを名乗る事、そして右目の傷……これらはその事件が原因です。

ユアと共に生きてきてから数ヶ月。

フュートも何とか生き抜く事が出来るようになっていた。

そしてある夜、それは酷く雨が降っていた深夜だった。

雨、酷いわね。

でもきつと朝には止むよ。

ええ、そうね。

小さな空洞の中に入って、雨が止むのを待っていた二人は、空から黒の球体が落ちてくるのを見た。

その球体の正体は分らない。

だが一つだけ分かるとすれば、それは破壊。

命あるモノを殺め、形あるモノを破壊する衝動。

その球体から闇が溢れ出る。

気がつけば空洞から逃げ出していた。

二人とも闇から逃げようと走るが、雨で地面がぬかるんでいるため、うまく走る事が出来ない。

闇が二人を飲み込もうと迫り来る。

気がつけば、ユアはフュートを庇うように両手を広げて、彼を守るように立つ。

フュート、逃げて！

目の前に自分を殺そうという闇が迫っているのにもかかわらず、ユアは叫ぶ。

闇がユアへと狙いを定め、彼女を覆いつくさんと迫る。

逃げて！

逃げたいと願っているのはユアのはずなのに、彼女はフュートに懇願する。

闇が彼女を飲み込み、死という毒を体へと蝕ませていく。

だがそれでも、ユアは叫んだ。

……逃げて

彼女の叫び。

だがフュートは動く事が出来なかった。

ただ目の前で起きている事が整理しきれない。

どうして、どうしてこんな事になったんだ。

フュー……ト……

ユアの叫びが途切れると共に、彼女を喰らった闇が一つの刃となり、フュートの右目をまっすぐに切り裂く。

彼は悲鳴すら上げずに、眠るようにして地面に倒れこんだ。

……ごめん

死を覚悟し、家族の名を呟く。

そうして、体へと語りかけてくる眠気に全てを委ねた。

あの時の事は、今でもよく覚えています。彼女が逃げてと言っているのに僕にはただ見ることにしか出来なかった……。守りたいって誓ったはずなのに……。そうする事すら出来なかった……。

……フュート

少年は自分の名前が呼ばれたことで意識を覚醒させる。

雨に体温を奪われ続けていく中、顔を上げた彼に見えたのは一人の

少女。

……ユア？

闇に飲まれ、死んだはずの彼女だった。

彼女は笑みを浮かべる。

この数ヶ月、何度も見てきた彼女の笑み。

それは彼の中にある記憶と何の大差も無かった。

彼女が微笑を浮かべる。

気がつけば自分も笑っていた。

あの時からです。僕と彼女が強い力を得たのは。そして……道を間違え始めたのは。

一人の少年と、一人の少女は人々の幸せを願い、アラガミとの戦いを始める。

全ての人に生き続けたその先が確かな幸せになっていると思い、ただひたすら力を振るう。

だけど結果は違った。

例えばアラガミから助けたとしても、人間あるいは別のアラガミによってその先を断たれてしまう。

だから今度は、人々に害悪を成した人を殺した。

平穏を求める人を殺めるのなら、それを捨て置けるはずが無い。ただそれだけの身勝手過ぎる思い。

その者にも家族がいたはずなのに、その者にも守りたい幸せがあるはずなのに。

時には望んでいないにも関わらず、第三者の手によって実行せざる

を得ない者達もいたはずだ。

彼らの願いを、自分たちはただの感情論で無へと還した。

しかし、彼らを殺さなければより多くの犠牲が出るのも事実。ただ気づいた時には遅すぎた。

気がつけば、この手が何百人もの血で赤く染まっていた。

途中でやめればその者達の存在が無駄になってしまう。

自分の身勝手と無知が起こしてしまった救済という名の地獄。

徒労に終わる救済。

終わることの無い後悔。

繰り返される矛盾。

それにもめげず、少年と少女はただ続けた。

しかし彼らに付けられる枷はそれだけでは終わらなかった。

助けた者からは『どうして助けた』と罵倒され、見捨てた者からは

『どうして助けない』と罵られる。

彼らに救われた、あるいは壊された人々が糾弾し始めた。

裏切りに等しい行為。

だが人々は、ずっと彼らを敵視した。

アラガミ以上に危険な存在として、話すら聞かずに、迫害を始めた。

もう限界のはずだった。

だけど止める事はできない。

今更引き返すことは出来ない。

人間とアラガミ、両者からずっと戦い続けなければならない事。

望んでいなかったはずなのに

助けたかったはずなのに

愛していたはずなのに

その希望は、その願いは、その祈りは、全て覆され、二人に牙を向いた。

誰かに疎まれながら戦い続ける事でしか道は続いていなかった。

誰からも理解されない

誰からも同情されない

誰からも愛されない

少年と少女の心は、壊れて行った。

やがて彼らは表から姿を消した。

裏では静かに戦い続けながら、人と世界を愛し守り続けるという思いの中、彼らはずっと戦い続けていた。

少年と少女の戦いは、当事者以外誰の記憶に残る事も無く、ただ静かに歴史の闇へと葬られていった。

フット・エルセイダという少年が祈り求めた小さな願い。

誰もが幸せであって欲しいという嘘のような本当の願い。

それは、人々の平和という皮を被っているだけの言い訳でしかなかったのだろう。

そうでなければ

どうして、人を簡単に殺す心が出来たのか

どうして、心が壊れていくのを傍観したのか

少年の心が孤独な旅を始めるのに、
そう時間は掛からなかった。

第29話 フュート・エルセイダ（後書き）

ストックはもうすっからかんです。

……更新できるのはいつになるかな……。

第30話 消えない思い（前書き）

今の自分に守るモノなど何も無い。

そう信じていたのは自分だけだった。

我儉な願いや思いのために多くの人を嫌悪な気持ちにさせてしまった。

気づくには遅すぎた。

償うにも遅すぎた。

十字架は背負う事しか出来ない。

だが、その道中には必ず理解者が現れる。

その存在がいてくれるだけでどれだけの救いになるだろうか。

第30話 消えない思い

「喋りすぎましたけど、これがあらすじです」

誰もが沈黙を守り続けていた。

何も言えないのではない。

言うべき言葉が見つからないのだ。

自分達は人類を守るために戦ってきた。
ゴッドイーター

しかし、彼ら二人の前にその事が言えるだろうか。

無限に増殖するアラガミと終わりなき戦いを続け、人々に裏切られ、それでも人々のために戦い続ける。

彼も、彼女も、平和を願うただの少年と少女でしかなかったというのに。

沈黙の意味を理解したシュラが苦笑する。

「……勘違いされても嫌だから私から一つ言わせてもらおうね。フー
ートも私もフェンリルを恨んでいないし、人々を恨んでもいない。
そもそも原因は私たちにある。勝手に人々の思いは一つだと考えて
戦いを始めた私たちが悪い。だから貴方たちが気にする必要はどこ
にもない」

全員がシュラを見る。

何故だ、とその視線は問いかけていた。

確かにそうだろう。

裏切られて、利用されて、迫害されて、それでもなお恨まないとい
うのだ。

違う、と叫びたかった。

「……フーート君、質問してもいいかい？」

「どうぞ」

「君が今まで戦い続けていた理由、それは分かった。だけど……今の君はどうして戦っている？ 私は今、その答えが聞きたい。星の観察者としてではなく、一人の、平和を望む人間として」

榊の言葉を聞くと、フュートは苦笑する。

その笑みは、どこか幼く、そしてどこか大人びていた。

「随分と確信に切り込めますね、博士」

「何、今一番知りたい事を聞いたままだよ。フュート君」

互いに再び、笑みを浮かべた。

「よくよく考えてみれば無理だったんです。所詮、一つの存在ではない僕たちが、この星に生きている人たち、全てを救うなんて冷静に考えれば無理な事。多分、僕は……言い訳をしたかったんですよ。この力を得てしまった事、その八つ当たりをぶつけるための都合の良い言い分を作ったただけでしょうね」

フュートは息をつく。

まだ答えを言っていない。

その答えを述べる覚悟を思い出す。

「今更そんな事に気がつきました。だからもう間違えない。僕は僕の大切な人を守る。……ただそれだけの理由です」

そう言つて、右目に再び眼帯をつける。

もうレインの仮面を被る必要もない。

「……よし、それじゃあ部外者となる私たちは出よう。ここからは

家族の時間だ」

榊の言葉に一同が頷いて部屋を出始める。

そして残ったのは、エルセイダの名前を持つ者だけとなった。

「まさか、レインの正体がお前だったとは……。姉なのに見抜けなかった自分が情けない」

シエルは苦笑して、フットを見る。

本当に彼女はあの頃の面影を残している。

その光景を思い出したのか、フットも笑った。

「仕方ないよ、姉さん。僕もバレないようにレインに変わったんだし」

「それもそうか……」

アイリスはじっとフットを見つめていた。

ちなみに見つめられているフットは内心相当な冷や汗を掻いていた。

「えっと……アイリス？」

「本当に、お兄様なのですね……」

「……うん、そうだよ。遅くなって……ごめん」

最後の言葉と共にアイリスがフットに抱きついてくる。

そして声を上げて泣いていた。

フットは彼女の頭を撫でながらロイドの方を見る。

「……ロイドだよね」

「え、ああ、はい……」

憧れていたものの、姿を見る事はできなかった兄。
その兄を見て、ロイドはうろたえていた。

「皆、ゴッドイーターになってたんだね……。やっぱり凄いや」

その後、4人で色々な事を話した。

他愛も無い事やごく普通の事。

その中でフュートはようやく、自分にも帰る所が出来たという喜びを噛み締めていた。

「ところでシュラ君、君は……アラガミとなった人間を見た事があるかい？」

エルセイダ家の者が突然現れた事とアーク計画の頓挫、ヨハネス・フォン・シックザールとロレント・エルセイダの死亡により研究員が多忙の時間を迎えていた頃、榊は自分の研究室でシュラと話していた。

『ええ、それはもうたくさんね。……そもそもオラクル細胞は人の産物で生まれた物だから』

「！ それはどういう事だい？」

『そうね……少し長くなるしつまらないかもしれないけどいいかしら？』

「ああ、ちつともかまわないよ」

細胞

それは生物 命 の単位。

無数の細胞により生物は成り立っている。

その細胞に自我を与えるかどうか、そんな単純な疑問が叫ばれた。

しかし、自我とは科学だけでは生み出せない。

そのため、これらの考えは机上の理論と思われていた。

ところが、とある町外れにて何の変哲も無いオカルトマニアな一人の少年が黒魔術から生まれた儀式をネズミに行った。

結果、ネズミを構成していた細胞は自我を得た。

これがオラクル細胞の原点。

ただ一つ問題があったとすれば、それは何の学習もしていない細胞だったという事。

原始の細胞……それらが自我を持つとすれば、とる行動は一つしかない。

それは生存。つまり食べる事。

ネズミは、その場にいた少年を捕食し次々と少年が住んでいた家を捕食していた。

その内、ネズミは生殖細胞を生み出す。

当然の如く、その細胞も形を変えていき、次々と増殖していった。

それらがその町を飲み込むまで、そう時間は掛からなかった。

『これがオラクル細胞……つまりアラガミの始まりよ。ホント馬鹿馬鹿しいわね』

シユラは大きいため息をつく。

榊は、彼女の話聞いて少し落胆していた。

オラクル細胞の始まりはもっと神秘的だと思っていたのだが、あまりに情けなかったからだ。

あまりにも劇的すぎる結果の動機は、実際どうしようもない物ばかり

りだ。

「そうか……。その少年がこの世界の光景を見ていたらどんな表情をするだろうね」

『さあ？ よく分からないわ。もう人の思いに介入するなんてこりこりよ』

そう言ってシユラは部屋を出ようとした。

「ところで……君はどこでそんな知識を得たんだい？」

『……内緒よ。ヒントをあげるとすれば……それはノヴァね』

シユラの言葉を聞くや否や榊は早速調べ始めていた。

ノルンデータベースより

『フュート・エルセイダ』

エルセイダから戸籍を抹消された人物。アイリス、ロイドの兄でありシエルの弟である。

生存が確認され、今は極東支部でイレギュラーのゴッドイーターとして活動している。

ベテランのゴッドイーターを遥かに凌ぐ戦闘力を持っており、時折ゴッドイーターの戦闘訓練などもしている。

レインやクラウドの正体は彼である事が判明した。

オラクル細胞を、自力で作りに出したり、物質や肉体に付加するなど、現代の技術や科学では解明できない能力を持っているため、アラガミへの大幅な対抗力として期待されている。

アラガミにも精通しており、ノルンデータベースのアラガミ情報のほとんどは彼が書き込んでいる。
世界各地のフェンリル支部から、彼の移籍を求める声が相次ぐが、本人はほとんど無視している。

『シユラ』

フュートと共に存在が確認された謎のアラガミ。ただアラガミとするにはあまりにも知能が高い上に人間らしい少女。
闇を操る力を持っており、アラガミの中では最強の強さを持つ。
フュートとは、相棒の仲のようで、度々彼の戦闘訓練にも付き合っている。

正体は不明だが、人に敵意を持っていないため、フュートと同様、アラガミへの大幅な対抗力として期待されている。
フュート曰く「食費が馬鹿にならない」。

『現在の極東支部について』

フュート・エルセイダとシユラ、二人の出現で極東支部の注目度は遥かに上昇した。

主な注目は戦闘訓練の様子である。

ダミーターゲットしか実戦訓練に使用できなかったのに対し、シユラは純粋なアラガミで戦闘能力も高い。

訓練の内容はシユラに一撃を当てる事であり、一見簡単そうに見えるが彼女は闇を操るため、難易度は遥かに高く、現在この訓練に成功した人物は、フュート・アイリス・シエル・ソーマ・サクヤ・タツミの5名だけである。

ちなみに二撃目を当てた人物は現在、フュート・シエル・ソーマ以

外いない。

なお、訓練の効果により現在、極東支部の隊員戦死率は、大幅に低下するなど成果を見せている。

二人に対する応援を求める声も多い。

第30話 消えない思い（後書き）

ストックを放出したツケが来たぜ……。

自分でも何を書いているのか分からなくなる時があるとは……。

ちなみにストックが無いに等しいので、更新は亀更新です。

……バーストの展開どうしよう。

第31話 不死（前書き）

この世に不死なんて無い
万物には滅びが有るからこそ美しいのだから

第31話 不死

「……コイツ」

フュートは後ろへと地面を蹴る。

その刹那、劫火を纏い回転を与えられた剣がその地面をえぐり削る。好機と見たソーマがその胸部を神機で斬り付ける。殴りつけるに近かった。

一撃の重さに怯んだ姿に、アリサが無防備となっている足を狙う。今、彼らが戦っているのは新種のアラガミである「ハンニバル」。昔の英雄の名前を冠したアラガミの姿に、どこか人間らしい動きを感じさせる。

ハンニバルは距離をとると両手に先ほどの剣を出現させた。立っている場所が地面。

しかも二本足の上に、先ほどと態勢が違う。

「マズイっ！」

何をするのか察したフュートが神機を銃形態に切り替え、特性のパレットを頭部へと撃ち込む。

その一撃が合図だったかのように、両手から剣が消え、ハンニバルは地面に倒れた。

緊張の糸が切れたかのように、コウタがその場に座り込む。

「中々手ごわかったね……。危なかったー」

「人間らしい動きが多かったですし……。とりあえずツバキさんに今回の結果を報告しましょう」

フットも何とか息をついて、周りのアラガミ反応が無い事を確認する。

何故ならこのハンニバル、ある噂が立っていた。

不死のアラガミ、と。

その事がどうにも気になる。

が、このアラガミが死んだという事実を確認した今、それは考えるべき事ではないだろう。

そう思い、フットは踵を返した。

離れている彼らに追いつこうと、歩いた直後、右目が強烈なアラガミ反応を感知する。

距離もかなり近い。

第六感が何かをわめきたてている。

「……まさか」

振り向けば、そこにいたのは先ほど倒したはずのハンニバルが、炎をまとって生きていた。

その姿は炎の帝王というふさわしい。

それに先ほどよりも強くなっているような気すらする。

「666回同時に殺さないで死なないのか……それとも、十二回別々の方法で殺さないで死なないのか……。厄介だね」

3人も異変に気づく。

すぐさま、手を突っ込んでいたポーチからスタングレネードを地面に投げつけてハンニバルの目をくらませる。

「走るんだ！ 今は退こう！」

アラガミの咆哮をBGMにして、4人は一気に走り出した。フュートはちらりとハンニバルを見る。その姿を、しっかりと脳裏に焼き付けて。

「……以上がハンニバルとの戦闘結果です。解析では、相手の力は炎を操る事とコア摘出後の再生能力、そして非常に人間らしい動きをするという三つが判明しています」

「そうか、分かった。……今から新種のアラガミについて対策会議を開く。フュート、お前は休んでいいぞ」

「ありがとうございます」

ツバキの労いに頭を下げ、部屋を出た。

戦闘報告が住んで自室へと足を走らせる。

思考の隅では、ヴェンターから得た一つの情報が残っている。

雨宮リンドウと思われる人物の目撃情報があちこちで出てる。

ベッドに寝転がり、天井に手をかざす。

まだ自分自身を定義する事が出来なかったあの頃。

ただ迷いながら、走り続ける事を繰り返していた。

もし、今の自分ならあの時、リンドウを無理やりにも救出に向かっていたのだろうか。

前の自分は違った。

「アーク計画」を止めるために、リンドウを犠牲にした。

彼が行方不明になっていなかったら、アーク計画を潰すのが難しくなる。

たったそれだけの理由。

「多くを守るために一つを捨てる……か」

それは簡単には出せない答え。

「10人を救うか1人を救うか」。

単純だが、答えにたどり着くまでの道程や葛藤は険しい。ちなみに「11人を救う」なんて答えは問題外だ。

神でもない存在がそのような事をすれば、結末は唯一つ。

「全てを失う」事、その結末しか迎えられない。

「……絶対に助けます。リンドウさん」

ベッドから起き上がり、ターミナルを起動させてヴェンターから届いた情報を確認し始めた。

目を通して伝達された情報を細かに整理し、自分の知識と照合させ、考えを練り始める。

『フュート、少しいいかしら?』

「ああ、いいよ」

ターミナルのデータを保存し電源を切る。

『リンドウさんの神機なんだけど……何だか最近おかしいのよ。触れてみたら救出への大きな手がかりになるかもしれないわよ?』

「神機……か。分かった、ありがとう」

長かった。

少女の心を占めていた思いはそれだった。

アラガミに対する憎悪心を誰にも悟られぬよう、静かに募らせながら、長い時間を耐えた。

それが今、ようやく報われる。

「これが……神機」

何度も柄の感触を確かめる。

少女は、その刀身をじっと見つめた。

「これで……ようやく滅ぼせる」

少女は静かに笑う。

自分を救ってくれた、あの背中。

銀髪の髪を翻し、どこまでも強く気高いあの姿を。

近づく事が出来る。

静寂を破ったその声は、どこか虚しく聞こえた。

第31話 不死（後書き）

スランプ気味です……。

リアルが多忙すぎるッ！

ちなみにバースト編は筋道こそ同じですが一人だけオリキャラを加えています。

最近、キャラを考えるとどうも型月になってしまっ……。
何故だorz

『悪いが今回のタイトルはアタシが頂く!』

フュートの不思議な一日(前書

この話はいつもにもまして病氣的です。
ご注意を……。

作者の妄想、ダダ漏れです。

『悪いが今回のタイトルはアタシが頂く!』

フュートの不思議な一日

「うーん……」

フュートは自室のベッドで目を覚ました。

しかし、記憶はいつまで経っても安定してこない。

おかしい、いつ自分は正体を明かしただろうか。

まだ偽名で名乗っているはずだ。

しかも傍にいたはずのシユラがない。

見てみれば、自分が寝ていた布団に人一人分の団子が出来ている。

「……? 誰がいる……っ!」

急いで布団をめくりあげる。

確か昔見たデータで、何かヤのつく職業に關係している相手だった場合高額の金を筆記取られるという情報があった。

もし、見知らぬ女性なら誤解を解かねばならないし、見知らぬ男だった場合の傷 主に心と尊厳 が悪化していく。

しかし、そこにいたのはどっちのケースにも区分しがたい相手だった。

「お兄様何なされてるんですか?」

そこにいたのは我が妹アイリス。

思いつきり血縁者だとバレている。

「え、えーとアイリス? ど、どという事が説明してくれるかな?」

「ヤダッ、お兄様ったら 昨晚アレだけ私を んだり いたり
めたり したりしてくれたじゃないですか」

NGワード連発をされ、フュートの頭の中が真っ白にフリーズした。
そして、頬を赤く染めてもじもじし始める妹。^{アイリス} 何だコレ。
こんな性格だったろうか？

いや、待て。それより今重要なのは。

「……アイリス、誤解じゃない？」

「あら、本当に覚えていないのですか？ 私を無理やり部屋に連れ
込んで押し倒して……キャッ」

落ち着くんだ。素数を数えて落ち着くんだ。素数は1と自分の数
でしか割ることのできない孤独な数字…僕に勇気を与えてくれる…
…。

再び頭の中で混雑していた情報を整理する。

知る限りでは、アイリスを無理やりやったような記憶は無い。決し
て無い。

ならば勘違いだろう。

ここは何とか間違いを指摘して

「フュート、いるかつ！」

部屋に入るなり、いきなり大声を上げてシエルが入ってきた。
表情には、いつもあるであろう余裕がない。

そんなに起こられることを自分はしただろうか。

……まさか。

「フュート……フフッ、責任は取ってもらっぞ？」

「え、ちよつと姉さん。なんの……」

「何、昨晚、私をアレだけ んだり いたり めたり したりしてくれた事に決まってるだろう」

目の前に机があれば、そこに額を打ち付けていただろう。説明まで似ていることはさすが姉妹と言いざるを得ない。逃げたい、ただ逃げたい。

「やだですね、お姉さま。お兄様は私の物ですから」

「何を言う。アイリスにはまだ相手がいるだろう。姉権限を使い、ここではフュートは私が頂こう」

「あら、お姉さまったら年下好きなんですね。そんな事じゃ手狭になりますよ？ 私はお兄様を生まれた時から予約していたんです」

何故かにらみ合う姉妹。

というより話し合う点が違う気がする。

そしてアイリス。

お前は本当にそんな性格だっただろうか。

いや、身に覚えがないんだけど……。

そんな事を言い出させる雰囲気ではない。

嫌な予感がした。

二度ある事は三度ある、と思い出したくも無い格言が頭の中に浮かんでくる。

アイリスとシエルがにらみ合いを続けている時、ドタドタドタと何か走っている音が聞こえた。

……もう嫌だ。

「フュートはいますか!」

入ってきたのはアリサである。

もう何も言えない。

フュートは脚力をオラクル細胞で強化させて走り出した。

「あつ、待つてください！ 昨日、アレだけ私を んだり いたり めたり したりしてくれた責任を取ってください！」

後ろから、精神的に追い討ちを決めてきた台詞を置き去りにして、ただ逃げることに集中する。

エレベーターでは、まず捕まるだろう。

ならばどうするべきか、そう考える前に非常口の扉が開いた。

「君、コッチだ！」

急いでドアの中に滑り込むと同時に、誰かがドアを閉めてくれた。フュートは一息つくとその人物の顔を見る。

そこにいたのは、一死亡フラグ エリック 一だった。

「エリック……助かったよ」

「何、困っている時はお互い様さ。それより早くエントランスに逃げるんだ。ここは華麗なる僕が囷になるう」

「どうして？」

「アイリスとシエル、そしてアリサの3人が今朝やたらと発狂してね、今アナグラ全体に君を死守する命令が出ている」

アナグラエ……。

「……分かった。エリック、無事でね」

「フッ、時間稼ぎはいいけど、別に彼女達を倒してしまってもいい

構わないだろう?」

3人の狂戦士^{バーサーカー}が迫り来る中、エリックは強がってフュートに背中を向けた。

何故か、今はその背中が偉大に見える。

フュートは後ろ髪を引かれる思いで走り出した。

「ご覧の通り、君達が挑むのは無限の優雅。華麗の極地！ 恐れずしてかかってこ「邪魔」へぶッ！」

さよなら、エリック上田。

走る、走る。

ただひたすら走る。

エリックは犠牲となったのだ……。

ならば別の協力者^{イクニエ}を探さねばならない。

ここは死亡フラグを積み重ねる事に定評のあるあの人物に頼るしかない。

エントランスに下りると、何故かどこかへと連れ込まれる。

手を引いた人物の服装はオレンジ。

ならば

「無事か、フュート！」

「コウタ……ああ、何とかね」

傍でドタドタという音が聞こえる。

例の3人に間違いない。

ちなみに二人が隠れているのはソファの裏。
ある意味、見つかりにくいところである。

「お前も大胆な事するなあ。アリサならともかくシエルさんやアイリスさんにまでなんてさ」

「……記憶が無いんだ」

「は？」

「いや……その時の記憶が無いんだよ」

「……お前」

こればかりは反論できない。

フュートは仕方なく、コウタからの視線を受け止める。

「寒っ……あ、ドア開いてるじゃん」

「あ、ホントだ……。姉さん達焦ってたのかな……」

「ここは俺に任せな。ちよつと閉めてくるよ。なあに、すぐに戻るって」

そういつて、コウタは立ち上がりドアのところへ歩いていく。

ちなみに、今の状況は俗に言う定番である。^{フラグ}

フュートはソファ裏から息を殺して、物音を聞き取ってみる。

ちなみに彼の耳は今、男性の会話以外シャットアウトするようにしている。

女性の場合、独自の包囲網があるので信憑性が薄い。

お、おい！ エリック、どうしたんだ！

い、今すぐフュート君に伝えるんだ……生きろと……。

待ってる！ すぐに助けを……。

コ、コウタ……周りは確認したかい？

大丈夫！ 安心しろって。何も起きやしないよ！

そうか、安心した……！ コウタ、後ろ！

へっ、うっ、うわあああっ！

「……冗談でしょ」

体中を冷や汗が嘗めていく。

間違いない……彼女達ハシタがいる。

フットはソファ裏からどこへ逃げ出そうか考えるが思い浮かばない。

こうしてる間にも、どんどん自分の危険は迫って来ているのだ。

少なくとも、下手には動けない。

考える考える考える……勝機が1%でもあるならそれを手繰り寄せ
るんだ……。

「……？」

すぐ傍にあるダンボールが目についた。

形・大きさ・外観・カムフラージュ率……行ける！

「くつ、どこ行っただんだフット！」

「お姉さま、私は上を探してきます！」

「では私は地下に！」

ドタバタと廊下を駆けてゆく3人の傍らに一つのダンボールが置かれてあった。

そのダンボールは誰も触っていないはずなのに動き始め、エレベーターの中へと入っていった。

「……まさか成功するとは思わなかったけど」

フットはダンボールから出て、エレベーターのボタンを押す。

行くのは地下施設だ。

フュートの服装は黒を基本としているため、闇にまぎれやすい。
これで幾度と無くアラガミの目をごまかしてきたのだ。

「さて、どうするかな……」

『HUHUHU……、人間的には発音しづらくてフュートと言ってもヒュートと呼ばれてしまう哀れな主人公よ。今は、アタシの手の上で……、アレ？ 何だこの闇……あぎやああああっ！！！！』

『悪いが今回のタイトルはアタシが頂く!』

フュートの不思議な一日(後書

カツとなってやった。反省はしている。

本編がまったく進まない……。

ストックがまったく増えない……。

何とか今月中には復活してくれ! 俺の意欲よ!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6605u/>

GOD EATER ～銀の戦士～

2011年11月17日19時52分発行